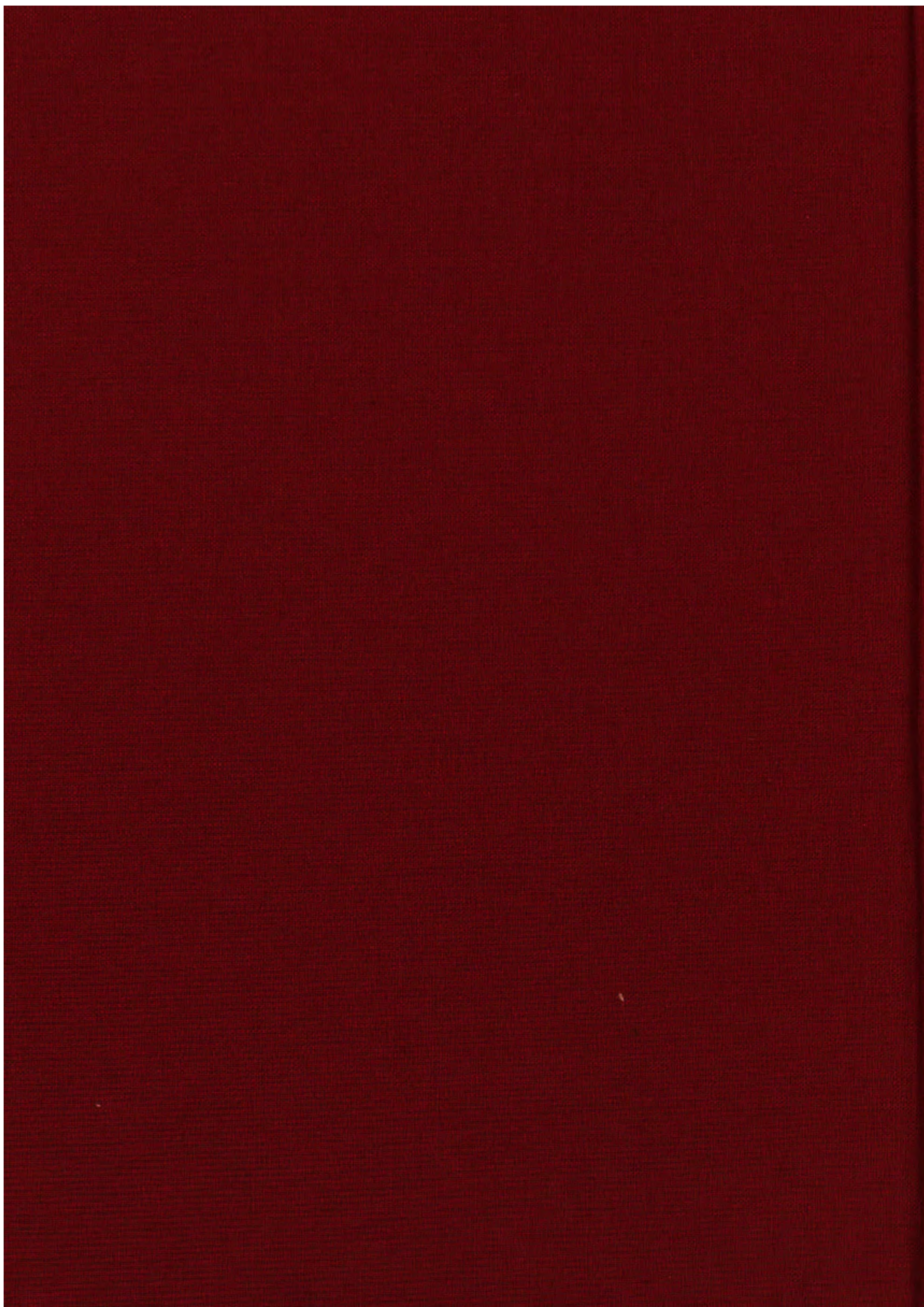


田中香涯 主筆／日本精神医学会 発行

復刻版

変態性慾

第1巻

第1巻1号～8号
（大正11年5月～12月）

不二出版

『変態性慾』第一巻　復刻版刊行にあたって

一、復刻にあたっては、次の方々のご協力を得ました。記して深く感謝いたします。
斎藤光氏、古川誠氏

一、復刻版刊行に合わせ、別冊として解説・総目次を刊行しました。解説は斎藤光氏によるものです。

一、内務省の検閲によるものと思われますが、原本において伏せ字が施されていますが、そのまま復刻しました。

一、使用した原本には、発行されたときと同じ体裁の並製のものと、それをのちに発行所の日本精神医学会が和綴じにした合冊版、そして同じく日本精神医学会が表紙を付けて製本し販売したと思われる合本版（上製）があります。原本に添付されていた巻ごとの「目次」は、復刻にあたってはすべて巻頭に収載しました。

一、資料の中には、人権の視点から見て不適切な語句・表現・論、現在から見て明らかな学問上の誤りもありますが、歴史的資料の復刻という性質上、そのまま収載しました。

一、原本の「第一巻　合本版」の「見返し」には次のような紙片が添付されていました。

> 内務省警保局圖書課の御注意に依り本文三〇五頁以下四頁削除す。

（編集部）

【第1巻収録内容】

第一巻第一号　大正一一（一九二二）年五月一日発行
第一巻第二号　大正一一（一九二二）年六月一日発行
第一巻第三号　大正一一（一九二二）年七月一日発行
第一巻第四号　大正一一（一九二二）年八月一日発行
第一巻第五号　大正一一（一九二二）年九月一日発行
第一巻第六号　大正一一（一九二二）年一〇月一日発行
第一巻第七号　大正一一（一九二二）年一一月一日発行
第一巻第八号　大正一一（一九二二）年一二月一日発行

自第壹號（大正十一年五月）
至第八號（大正十一年十二月）

田中香涯著

變態性慾　第壹卷

日本精神醫學會

變態性慾　第壹卷目次

□

ザヂスムス及びマソヒスムスに關する諸篇

性的信仰に關する諸篇

性的犯罪に關する諸篇

半陰陽に關する諸篇

性病に關する諸篇

性慾に關する諸篇

同性愛に關する諸篇

性的文學（美術）に關する諸篇

雜篇

變態性慾要說

□

□

大正十一年四月廿六日第三種郵便物認可
大正十一年五月一日發行（毎月一回一日發行）

性之問題研究の最高級雜誌

變態性慾

前大阪醫大病理學教授
田中香涯氏執筆

創刊號

目次

東京 日本精神醫學會 發行

香涯田中祐吉先生著

新刊

間違だらけの治療

四六判 二七〇頁 函入
定價金壹圓九拾錢
書留送料金十五錢

醫者も讀め
患者も讀め
弱者も讀め
强者も讀め

濟生司命の聖職として信頼せられつゝある醫師の多くが現在間違だらけの治療をして患者の身を害し生命を失ふが如きは驚くべき事實なり、本書は學術及び社會の兩方面より新藥、新治療法を始め諸方面に亘り治療に關する虚僞、誇張、誤診等の多きを赤裸々に指摘して一大鐵槌を下し、一般世人に警告せるもの、附錄「大正醫道傳授」「當世七外道醫者」の二篇は現代醫風の墮落を罵倒し、皮肉諧謔の妙を極め、痛烈骨に徹す。

田中香涯先生著

間違だらけの衞生

定價壹圓九拾錢
書留送料十五錢

田中香涯先生著

人間の性的暗黑面

（近刊）

發兌 東京日本橋數寄屋町 振替東京一三七五番 大阪屋號 電話本局 三七三七番 四二八九番

本誌創刊三周年紀念

催眠術革新號

一部定價 金九拾錢 税一錢半

殘部僅少 至急乞註文

目次大要

東京品川御殿山（振替東京三一一七七番）
發行所 日本精神醫學會

朝刊・夕刊

趣味と實益との無盡藏

記事も意見も、穩健にして而も綿密なれば、何の事件に關しても、最も信頼して讀む可き新聞紙なり。最も斬新なる知識の紹介者として新聞紙中の新聞紙なり、何者にも拘束せられず、如何なる問題をも自由に論議する活きたる新聞紙なり、時代に遅れざらんとする人は、一日も此の新聞に離る可からず。



年中無休

月極一ケ月壹圓 外國行一ケ月郵税共貳圓貳拾錢
郵送（一ケ月壹圓 三ケ月貳圓九拾錢 六ケ月五圓七十錢 一ケ年拾壹圓參拾錢）（郵税本社持）

東京市京橋弓町本局 株式會社 萬朝報社 振替東京八千番

讀賣新聞には立論公平で着眼切實な**社説**がある

讀賣新聞には外國觀察の異彩八氏の**通信**がある

讀賣新聞には烱眼爛々たる**政治經濟記事**がある

讀賣新聞には活躍比類の無い**社會部記事**がある

讀賣新聞には特種記事に驚殺する**婦人欄**がある

讀賣新聞

明治七年創刊

新聞代價	廣告料	振替貯金口座	電話京橋	
一部 金四錢	五號活字十五字詰 一行金壹円貳拾五錢	東京六一二番	(編輯用) 七〇一番 八〇番 七二五番 八一番	發行兼編輯人 三石汝吉
一ヶ月前金 九拾錢	編輯欄 一行金貳円貳拾錢		(營務用) 三九五番 八二番 七〇二番 七〇三番	印刷人 篠原久吉
三ヶ月前金 貳円六拾錢				
郵税一ヶ月 金拾錢				

發行所 讀賣新聞社

東京市京橋區銀座一丁目一番地

讀賣新聞には時代文藝の先驅たる**文藝欄**がある

讀賣新聞には本紙の新特色たる**商況物價**がある

讀賣新聞には新知識と興味の庫の**娯樂記事**がある

讀賣新聞には一日讀んだら忘れられぬ**小説講談**がある

活氣橫溢した！

昨今の讀賣新聞を見よ

新聞界の權威

黎明期に方りて

▽何を措いても先づ東京日々新聞を讀まなければならない、何となれば此の世界の黎明期に當り、地上萬般の事象は悉く網羅されて遺憾なく紙上に展開されてゐるから。而して此の貴さ人類の記錄は、即ち文化の過程を語るものであつて吾人は一日も忽がせにすることの出來ないものである。



智見の開發に

△何を措いても先づ東京日々新聞を讀まなければならない、政治、經濟、外交、軍事其他萬般の社會事象、日に新たなる科學の進歩、月に改まる思想の變遷、文藝や美術の新傾向、これらは皆悉く我社の優秀なる報導機關を以て吾人の面前に提供されつゝある、而して此等は我等の生活に取り必要以上の必要であるのだ。

新聞代金

一部	金四錢
一ケ月	金八十五錢
一ケ月地方郵税共前金	壹圓
三ケ月同上	二圓九〇錢

發行所

東京市丸ノ內
東京日々新聞社
振替口座二八〇〇番

廣告料

五號活字十五字詰一行	金壹圓拾錢
第一面一行	金壹圓貳拾錢
場所指定一行	金貳拾錢增
雜報欄一行	金貳圓五拾錢



發刊の辭

近年來『性』の研究は一種の流行となり、之に關する著書雜誌の向背相望んで踵出するが如き有様であるが、併しその中には人心の弱點に乘じ、或は世俗の好奇心に迎合して顰蹙に堪へざる記事を掲載するが如き者の尠からざることは、私の深く遺憾とする處である。加之、所謂性の研究を標榜する人達の中にも、其の基礎的知識たるべき醫學、生物學、心理學、社會學等の素養造詣に乏しく、徒らに他人の研究に成つた論文や著書中の記事を剽窃し、或は燒直しなどして我が物顔に振舞つてゐるやうな人々も尠く無い様である。私は固より淺學菲才の學究であるが、併し性の研究に關しては、既に十數年以來之に從事し、多少の自信と抱負とを有つてゐる者であるから、近年來流行の性研究の内容に、俗惡、淺薄、卑猥、杜撰の分子多く、之がために世の識者をして益々性に關する述作論議に對して厭惡

の感を抱かしめ、眞面目なるべき性研究の行路を阻碍するの虞愈々大ならんとするを認めて、心ひそかに痛嘆せざるを得ない。さらぬだに肉を卑しみて徒らに靈を重んじ來れる因襲の形式的慣習は、今に至るも猶世人をして性慾を陋視せしめ、學者として世に立つものと雖も、人間の性的生活を公然論述せざるを以て賢なりと思惟するが如き狀態であり、殊に我國の如き道學者流の空論横議が大に幅を利かしつゝある國に於ては、性に關する事項を筆にする者を誹謗嘲罵する傾向の殊に大なるは素より恠しむに足らない。されば性の研究に從事するものは、能ふだけ眞面目なる態度を取り、學者的立場を失はない樣に注意して、世の非難誤解を回避するに努むると共に、性の研究が人生及び社會問題を解決する上に於て緊要なることを啓示闡明しなければならぬ。本誌發行の目的は實に此に存する。

本誌は純學術上の見地より、性的生活、就中、變態性慾に關する事象を論究するもので、近年來の時流時好の上に超越し、眞摯愼重の態度の下に私のこれ迄研鑽した處を披攊せんがために發行するものである。誌名を『變態性慾』と稱したのは、病理學及び法醫學を專攻した私として、主に性慾の異常方面の研究を取扱つて來たが爲めであるのと、又一つには、性の研究上、變態性慾の特に必要であり、且つ興味あることを認むるからである。しかし、本誌は變態性慾の他、あら

ゆる性的生活の事項をも掲載することは固より言ふを俟たない。

本誌は畏友中村古峽氏の發議と好意とによつて私に提供せられた公刊雜誌である。淺學菲才の私一人で永久に執筆することは至難の業たるを免れないが、併しこゝ二三年位の間は、他の寄稿を待たずとも、獨力で執筆を繼續し得べき自信を有つてゐる。されど本誌は俗受專門雜誌では無いから、思ふやうに多くの讀者を得られぬかも分らない。若しそのために本誌經營の衝に當らるる中村氏に損害をかくるやうな事でも起れば、斷然廢刊する覺悟である。私は賣文によつて生活する者でないから、自己の學者的良心に裏切つてまで俗惡なる記事を掲げて、低級讀者を多數に集めたくは無い。

大正十一年四月

田中香涯識

性的早熟と早夙性發情

性的早熟 Praekozität der sexuellen Entwickelung, Sexuelle Präkozität とは、未だ思春期に達せざる小兒でありながら、早くより生殖機關が發育成熟し、身體も亦大きくなつて、第二次性徵も顯著となり、男兒ならば鬚髭が生え、音聲の調子が變り、女兒ならば乳房が膨らみ上り、月經を通じ、又精神も早熟して少しも子供らしい處がなく、性慾も早くから發現するのが則ち是れで、ベルリクチーは之に早發性身體大發育 Makrogenetosoma Praekox と云ふ名稱を賦與した。這般の異常は、小兒期に於ける生殖機關の發育を抑制する內分泌腺の機能障碍より起るものである。

抑々溫帶國に於ては、人の知るが如く、男子は十五六歲、女子は十四五歲で思春期に達するのは、生殖機關が此の時期に至つて發育成熟し、所謂「性ホルモン」Sexualhormon の內分泌が始まるからである。處が玆に注目すべき現象は、生殖機關の發育するに先つて、胸腺と松菓腺の萎縮退化することである。胸腺とは胸腔內に在つて心臟の前面に橫はる腺體であり、松菓腺とは大腦と小腦との間に介在する腺體である。胸腺は七歲頃から次第に萎縮して、十四五歲に到れば殆ど

消耗し、また松菓腺も七八歳頃までは立派に發育してゐるが、其より後は次第に退化してくる。此様な事實は上記の兩腺と生殖腺との間に反對關係のあるべきことを想定せしめた。既に千八百九十八年カルッオラリーは、動物に就いて生殖腺（睪丸、卵巣）を摘除せしに、胸腺の萎縮退化することの僅少なるを認め、ヘンデルゾーンは、未だ思春期に達せざる牛に就いて其の生殖腺を除去せしに、胸腺は持續的に發育し、且つその萎縮を來すことは遲延するゝ、之に反して牧畜用に供せらるゝ牡牛、即ちその生殖機能の旺盛なる牛では、胸腺の退化すること甚だ早きを認めた。此の如き動物試驗は、生殖腺を除去すれば胸腺の萎縮退化を來すこと甚だ僅小緩漫なることを證明するものであるが、之に反して若し胸腺が思春期以後にも永く殘存するが如き異常の場合には、生殖腺の機能が不完全となるものである。それは胸腺淋巴性體質 Statusthymicolymphaticus と云つて、胸腺の永く遺存し、また肥大せる人間に於て認めらるゝ處で、此の種の體質のものにては、生殖腺の機能は衰退し、女子に於ては月經の不潮、不姙等を伴ひ、又第二次性徴の發育も不充分であつて、乳房は小さく、骨盤も狹隘であり、身體の全構造は充分に女性的に分化して居らず、また男子にては皮下脂肪に富み、陰毛の發育に乏しい。之に反して性的早熟のもの、即ち既に小兒時代に生殖腺の發育成熟せるものにては、胸腺は早期に萎縮退化するものである。這

般の關係は、人間では今猶充分に認知せられざるも、併し去勢によつて胸腺が腫大し且つ永く遺存することは明白なる事實である。

上記の事實に徵すれば、胸腺と生殖腺との間には明かに對抗作用のあるもので、即ち胸腺は生殖腺の發育を抑制し、生殖腺は胸腺の發育を抑制する特殊の「ホルモン」を分泌することが明かである。併し、胸腺の原發的萎縮退化より生殖腺の早期的發育を來したといふ實例は、未だ明かに知られてゐないが、之に反して松菓腺の機能障碍より性的早熟を惹起せし實例に至つては、夙に諸學者の報告せる處である。

前記の如く、人間では七八歳の頃までは松菓腺は立派に發育してゐるが、これより後は漸次に萎縮退化するものである。されば此の內分泌腺は其の血液中に送入する特殊の「ホルモン」によつて小兒時代に於ける生殖機關の早期發育を抑制してゐることが明かであり、年齡の進むと共に此の腺の萎縮退化するの結果、次第に生殖機關が發育して遂に思春期に達することも亦容易に考察し得られる。之に就いて先づ第一に擧ぐべき實驗は、伊國の醫學者フォアが鷄に就いて行つた動物試驗である。同氏は六十三頭の幼鷄に就いて、その松菓腺を除去せしに、三ヶ月後よりは生殖腺は著しく發育し來つて第二次性徵の一たる鷄冠も顯著となり、又性的本能も發現して來た。

而して八乃至十一ヶ月後に至つて殺した雄鷄に就いて之を檢査せしに、睾丸と鷄冠とが強く發育せることを認めた。這般の實驗成績に徵してフォアは次の如くに結論した。松菓腺は生殖腺及び第二次性徵の發育を直接或は間接に抑止する生理的機能を有するものである。それ故、之を除去すれば、性の早期發育を惹起すると。而してマルブルグ、ゴールドチーヘルも松菓腺は一の內分泌腺であつて、生殖機關の發育を抑制する一種の「ホルモン」を分泌するものであるから、若し之に腫瘍が生じて腺實質が破壞すれば、內分泌の廢絕するの結果、生殖機關が早くより著しく發育して、性的早熟を來すに至ることを說いた。實際上、性的早熟者を死後に解剖して、松菓腺に畸形性腫瘍の發生せることを證明したのは、グートツアイト、オーグル、エストライヒ、イラウイツク、フランクル、ホツホワルト、ベイレー等の記述せし處であり、またレイモンクロードは神經膠樣腫、ホルツホイゼルは肉腫、ゴールトチーヘルは血管肉腫の發生を認めた。

近世哲學の開祖デカルトは、精神の所在地を松菓腺に歸した。これは固より彼れの想像說に過ぎぬが、併し、松菓腺が幼兒時代に於ける性的早期發育を抑止する機能あることが分明となつた今日から之を見れば、哲學者の臆想も幾分か事實に當つてゐる處がある。私は今こゝに松菓腺の破壞性腫瘍によつて性的早熟を惹起する模範的實例を二つ擧げて見よう。一は、エストライヒ・

スラウイクの實驗した四歳の男兒で、三歳の頃までは身體の發育通常なりしも、爾來生殖機關は過度なる發育を始め、陰莖は九仙迷の長徑を算し、(非勃起狀態に於て) 睾丸は鳩卵大に達し、陰毛は強く密生し、體重は二十基瓦、身長一〇八仙迷に達した。死後之を解剖せしに、松菓腺に畸形性腫瘍の發生せるを認めた。他の一はフランクル・ホッホワルトの實驗した一男兒で、僅か四歳六ケ月の幼童でありながら、陰莖は著しく發育して能く勃起し、顏面には鬚髭を發生して、恰も二十歳前後の青年の如く、又その精神も甚しく發育して哲學上の議論をなし 死後の生活などと云ふが如き幽玄の問題に就いて談話するを好んだ。その後、猩紅熱に罹つて死んだが、之を解剖せしに、松菓腺に畸形腫が發生してゐた。私は此の異常なる一例を想ひ出す毎に、生殖機關及び第二次性徵の早期發育と精神生活の早熟との相關聯せることの顯著なるに驚かざるを得ない。固より此樣な事實は甚だ稀有なることゝしても、從來稗史小說等に見ゆる早熟の顯著なる小兒の如き、必ずしも單に作者の空想的所產物とのみ看做す譯には行かない。曲亭馬琴の『里見八犬傳』の主人公の一人たる犬江親兵衛の如き、若し之を實在の人間と假定するならば、松菓腺腫瘍の所有者と認めねばなるまい。

抑々性的早熟の幼兒に關する記述や報告は必ずしも稀でない。尤も解剖上、松果腺腫瘍の存在を證明したものに至つては、今に至るもなほ十餘例に過ぎないが、しかし、假令臨牀上の報告に留まるにしても、性的早熟の顯著なるものは、松果腺腫瘍に由來するものと認めて差支無いのである。其の中にも女兒に於ける性的早熟の症例は既に數十例に達してゐるが、その中より特に著明なるものを擧ぐれば、コンバイは六歳二ヶ月の少女で既に十四五歳の處女に等しき外貌を具へ、陰部には恥毛を生じ、乳房も腫脹充實して圓形を帶び、二歳の頃より既に月經を通じたものを見、又チアマンは、六歳にして七十九ポンドの體重を有し、その乳房、臀部、及び大腿は成人のやうに發育し、腋窩及び陰部は毛を以て被はれ、月經は二歳頃より來潮したものを見、又モントゴメリは一歳頃から月經を潮し、十歳にして姙娠せるものを記し、又モリトールは四歳より月經あり、八歳で異性に接し、九歳にして分娩せるものを報告し、又カルスは二歳にして月經を見、三歳にして陰毛及び乳房が發育し、八歳にして姙娠せるものを見た。吾邦に於ても往々此の如き早熟の女兒に關する記述がある。既に江戸時代に於ける隨筆書類の中にも這般の實例が往々記述せられてあるが、例へば『鹽尻』には六歳の少女が姙娠して、産に及ばずして死んだことを記し、『筒井記』には七歳の少女が子を産んだことを掲げ、又『兎園小說』には四歳より月經を通じ、七歳

にして姙娠し、八歳で分娩した幼女のあつたことが明記してある。又支那でも『吏周記』に『后宮童妾、既齔而遭、既笄而孕』と見え、又『南史』に『陰麗華初事貴嬪、方十歳、后主見而悦之、因得幸、遂有姙』とある。

以上列擧した性的早熟の例證は、いづれも松果腺腫瘍に起因する病理的のものと看做すべき事例であるが、然るに又之に對して身體、及び生殖機關はなほ幼兒の狀態にありながら、獨り性慾のみが早くより現はれて、異性に戀着するが如き一種の早熟者もある。私は此の如きものを稱して『早夙性發情』Pubertas prackox といひ、上述の性的早熟と區別したい。米國の學者ベルは既に二三歳の幼兒に於て性的愛情の萠生したものを實驗し、モルは、八九歳の頃に性的興奮の起ることは病的と看做すべからざるも、三四歳頃より既に性慾の早發するが如きものは病的に屬すべきものであると云つた。そは兎に角、史乘及び人物傳に徵するに、詩人、文豪、美術家の中には、既に幼童時代より性慾の早くより現はれた者がある。此の點に於て最も有名なるは、バイロンであつて、八歳の頃より戀路に入り、マリー、ダッフといへる處女に熱烈なる愛情を捧げ、十二歳に及んで又もや從妹のマガレット・パーカーに戀慕した。又大詩人ダンテは九歳、文豪ルッソーは十一歳で既に異性に愛着した。此の如く幼兒時代に於て性慾の早發するのみならず、往々

著しき發揚亢進の狀態を呈するやうな事實もある。併し此樣なものは固より病的であつてエスキロールの實驗したものは、四歲の幼女でありながら男童と狎褻し、ロンブロソーは殺人罪を犯した一女子が既に六歲頃より七歲の兄と共に戯れ、八歲で破瓜したことを記し、又ローランは十歲の少女で、その多くの同胞と性的行爲を試み、十五歲で破瓜したことを記した。

さりながら、幼兒時代に性慾の早發するが如きことは、決して奇異なる現象では無い。フロイドの云つた如く、性慾は思春期に至つて始めて突發するものではなくして、既に哺乳兒の時より性的興奮を惹起する性質を有し、知覺神經に富める末梢部、例へば陰部を始め、直腸、尿道、口唇、皮膚等に於ける末梢的刺戟によつて快感を覺ゆるものである。（自家發情 Auto-Erotismus）ブロッホ等の說に依るに、哺乳兒に於ける自家發情は全く純粹なる末梢性のものであつて、上記の如き一定の體部（所謂催情帶 Erogene Zone）の機械的刺戟より惹起せらるゝものである。フロイドは最も早く性的快感を發起する體部を以て口唇なりとし、哺乳兒が母の乳房を吸吮し且つ温き乳を口にすることが一の機械的刺戟となつて本能的に快感を覺ゆるものであるといひ、哺乳兒の心地よげに乳を吸ふ（Wonnesangen）てゐるのをば、一種の自家發情と看做した。而して幼兒に於ける這般の現象を始めて科學上より觀察したのは兒科醫リンドネルであつて、之を性的滿足

の現象と認め、これより次第に高等なる他の性的滿足に移行變形するものたることを說いた。さりながらレーウエンフエルドは之を以て大人に於ける性的興奮と同一視すべきに非ることを論じた。私の觀る處を以てするも、孩兒に於ては末梢部の刺戟によつて一種の快感を惹起しても、それは唯だ快感といふのみであつて、成人に於ける性的興奮及び滿足とは全く其の趣を異にするものと看做さゞるを得ない。しかし、性慾の萠芽が旣に孩兒時代に存し、それが一定の體部即ち催情帶に於ける刺戟によつて誘發され得べき可能性のあることは、固より否定し得られない。されぱこそ、生殖機關の未だ發育せざるに、性慾が早くより發現して手淫を試み、或は異性に戀着するが如きことも起るのである。此の如き事實は旣に十八世紀に於てラムドールの注目した處であつて、兒童が女性に對して屢々愛情を抱き、往々强烈なる嫉妬心を起すやうなことのあるのも、亦世上往々見る處である。クルシユマン・フユールブリンゲルも、五歲以下の小兒に於て異性に對する愛情の存することを見たことがある。近時ユングの報告した處に依るに、生後九ヶ月、十三ヶ月の嬰兒で手淫を行つた實例があり、又三歲六ヶ月の男兒が若き母親の牀中に入るや發情したものもあつたと云ふことである。

されば小兒時代を以て全く無性的未性的と稱することは出來ない。性慾は思春期に至つて突然

發するもので無く、小兒期より次第に發育して此期に達するのである。ブラッキストン・ヒックスは言つた、『男女は搖籃時代より既に其の本性、精神的慣習等をも異にしてゐる。而して思春期は唯だ這般の差異を亢盛するのみに過ぎない。性慾は夙に小兒期より發生するもので、思春期とは何等關係もなく、單に之によつて增進する迄である』と。蓋し性慾も他の本能に於けると同じく神經中樞の作用であつて、生殖腺の有無に關係なく、性慾が存在し發現することは、之を諸般の事實に徵して疑ふべからざる處である。併し性慾が思春期に至つて始めて顯著となるのは、畢竟此期に於て生殖腺が發育成熟して內分泌が始まるため、第二次性徵の顯著となるのと同じである。それまでは性慾の發現すること著しからざるも、體部の末梢的刺戟によつて誘發せらるゝこともあり、又特殊の內因によつて自發性に興奮することもある。併し早夙性發情の顯著なる人間は、恐くは精神變質症 Psychische Entartung のものと看做すべきで、普通健全の人間に於て前述の如き著明なる早夙性發情を認むることは甚だ稀有である。

月經の生物學的意義に關する一疑問

月經が卵巣黃體の内分泌作用と密接の關係を有することは、フレンケル及びハルバン等の研究以來明白なることで、其の生理學事實に就いては最早や疑義を容るべき餘地もないが、併し私の今猶充分に解決することの出來ない點は、月經其者の生物學的意義である。

抑々人間に於ける月經期と哺乳動物の交尾期との相類似せることは、夙にビショッフ、ヘガー、ストラッスマン等の說いた處であり、又哺乳動物の交尾期に於ける生殖器關の解剖的研究に就いては、ヒープ、ケルレル等の記述もあるが、併し此の時期に於ける外部生殖器關の狀態と、月經其者の性質に至つては、人間と哺乳動物との間に於て看過すべからざる相違がある。即ち哺乳獸に於ては出血を來すことは甚だ少く、人類に近き猿類に於ても子宮より血液を流出しても、しかも其の月經の特性は粘液性であつて血球に乏しく、之に反して外陰部の腫脹することが甚だ著明で、類人猿に於ても、ハルトマンの記述せしが如く、月經期に至れば平素僅かに見るを得るに過ぎざる大陰唇が強く腫起し、小陰唇及び陰核も甚だ大となり、外陰部の腫脹發赤するが特に顯著な

るに反し、人間では通般の變化を來すことが甚だ僅微で、主として血液を多量に流出するのが其の特徵である。イワン、ブロッホも、猿の月經では外陰部の腫脹と、之より主として粘液が流出することに留つてゐると記してゐる。無論、血液も出るが、しかし人間のそれに比すれば遙に少量で且つ粘液の方が多い。又茲に注意すべきことは、猿類にあつても粘液中に比較的多量の血液を混ずる月經を漏らすものは、唯だ人爲的生存要件の下に生活するもの、即ち動物園に分離せられて檻の中に生活するものに於てのみ認めらるゝに過ぎないことである。

此の如く高等哺乳動物の月經と人間の月經との性狀に著明なる相違があるから、直ちに兩者を同一視することは出來ない。固より動物に於ても、交尾期には前記の如く外部生殖器關に腫脹充血を來し、又子宮粘膜にも固有の變化を生じて、所謂月經脫落膜の形成を認めるものであるが、併し月經其者の性狀が既に人間と異る處あるのみならず、外陰部の腫脹の特に著明なる事實は、明かに動物と人間との月經との間に其の生理的狀態の異る處あることを示すもので、從つて人間の月經を之より區別することの妥當なるを覺えしめる。

猶吾人の注目すべき現象は、動物が人類に類似すること愈々大なるに從ひ、その流出する血液の量の多くなること、また人間に於ても文明の進むに從つて愈々出血量の多くなることで、即ち

野蠻種族では文明の民族よりも其の經血の量の少いことは、エッリス等の夙に記述した所である。此の如き事實に徵して考ふれば、月經の殆ど純血性なることは人間に於ける特徵の一つであり、又其の血量の多寡は人種進化の程度に比例すと言ひ得らるゝ譯である。

こゝに於てか先づ第一に起る疑問は、何が故に人間に至つて月經の殆ど純血性になつたかと云ふことである。メチニコッフの說に依れば、人類が原始狀態を去つて後、その豐富なる生殖力を制限し、結婚の時期を延長することゝなつてから、始めて今日のやうな月經が起つて來たのであると云ふ。蓋し彼れの考察では、原始時代の人間は既に幼年の頃から性交を始め、女子は月經の起る以前に早くも妊娠した。妊娠及び授乳期の間は、無論月經の起る筈は無い。そして授乳期の經過した後は再び妊娠するから、原始時代の人間には月經が起らなかつたのである。然るに一たび原始時代の生活を出てからは、自然にその生殖作用を制限し、結婚の期日を延ばすの已むなきに至つたので、こゝに於てか始めて月經は何等の妨げもなく發現するに至つたと云ふのである。イワン・ブロッホも亦此の說を承けて、月經は恐くは生殖を制限し、且つ少女の早期結婚を妨ぐがために、人間に至つて始めて新たに獲得したものであらうと云つた。

上記の說は素より臆想であつて、生殖を制限し且つ結婚期を延長せしむるがために、今日の如

き月經が始めて人間に起つたと云ふが如きは牽强附會に近き說である。固より原始生活狀態にある野蠻種族が今猶月經來潮以前の幼女と結婚することは、實際上疑ひなき事實としても、而も此の事實から推測して、原始時代の人類には月經の來潮したことが無く、此の時代を出でゝ後、始めて月經が人間に起つたもののやうに考へるのは、容易に肯定することの出來ない臆想である。既に人類に近き猿を始め、その他の哺乳獸でも、交尾期に當つて生殖器關の充血腫脹、粘液分泌の亢進を來し、且つその中に少量ながらも血液を流出して、人間に於ける月經に略ぼ類似した週期的變化を生ずるものがあるのを見れば、人間に至つて始めて月經が起り、しかも其の目的が生殖の制限にありと云ふやうな說は、何うしても私等の腑に落ちかねる。勿論、動物の月經と人間の月經との相違せることは、既に述べて置いた處であるが、併し兩者共に卵巢の內分泌作用に起因することが明白なる以上は、人間の月經も動物の月經も、其の根本原因に至つては共に同一のものと認めねばならぬ。唯私の疑問とする處は、何が故に人間の月經では殆ど純血性であるか。又動物に就いて之を見るに、外陰部の腫脹特に著明なるに反し、何故に人間では這般現象の僅微なるか。而して此の如き兩者間の相違が、生物學上いかなる起源に由來するかと云ふことである。此の疑問に對して聊か私一箇の考察を述べてみたいと思ふ。

動物の交尾期に當つてその外陰部が特に充血腫脹するのは、想ふに、ワイセンベルグの云つた如く、雌の生殖器粘膜に炎症類似の刺戟を惹起して交接慾を挑發し、雄に接近せしむる傾向を與へ、また外陰部の腫脹と粘液分泌とは、交尾機轉の機械的作用を便利ならしめ、また一方に於ては粘液より特異の臭氣を放つて雄の嗅覺機關を刺戟し、その性慾を興奮發揚せしむるがためである。然るに人間には最早や此の如き必要が無いのと、又一面に於ては生殖器關及びその機能の退化に傾いた結果、動物に於けるが如き上記の現象が起らないのであらう。之に反して人間の月經が殆ど純血性であるのは、その生殖器粘膜の組成が動物に比して薄弱となり、變性破壞等の退行機轉を來し易き傾向あるがためでは無からうか。之を動物界の事實に徵しても、人間の月經に類似する出血性現象は、唯人類に近き猿類に認めるだけである。夙にゲーゲンバウエルや、ウイーデルスハイム等の說きしが如く、腦髓の發達するに從ひ、之に逆比して生殖器關及びその機能に直接間接の關係を有する他部機關の退化に傾く事實の上から考へてみると、猿及び人間の如き最高等動物に於ける月經の出血性なる所以の理を推知するに難くない。今更言ふ迄もなく、人間に於ける月經は子宮粘膜の表層の破壞に因る血管壁の破綻より起るものである。而して這般の退行機轉の生起し易いのは、畢竟人間に於ける生殖器關の組成の退化の結果と認むべきものであらう。

割禮の遺風と認むべき日本民族の龜頭裸出

歐米人は人體解剖圖を見ても分る通り、その陰莖龜頭の大部分は包皮で掩はれてゐるが、之に反して日本人は龜頭が裸出してゐる。我國では包莖を「皮かぶり」「すぼけ」などゝ云つて、之を耻ぢ嫌ふ風習があり、從つて少年時代より機械的に包皮を下方に牽退せしめて、龜頭を裸出するやうにする。此の如き民族的風習の淵源に就いては、割禮、即ち包皮切斷の遺風ではあるまいかとの考へが浮ぶ。然るに我國の古史及び古記錄に徵するに、包皮切斷の風習の行はれたるが如き事實を明かに突きとめることが出來ない。處が足立文太郎博士が嘗て Zeitschrift für Morphologie und Anthropologie. Bd.V の紙上に發表された『日本人の陰莖』Ueber den Penis der Japaner と題した論文の中に、左記の如き一節がある。

Dr. Inouye hat mir mündlich mitgeteilt, dass er einmal gehört habe, dass in einer Gegend seiner Provintz Harima die Mutter die Vorhaut ihrer Knaben mit einem Schilfblatt schneidet. Auch ein Freund von Inouye soll von ganz anderer Stelle dasselbe gehört haben. Obgliech

ich leider darüber weiter nichts mehr erfahren konnte, scheinen mir doch diese Mitteilungen irgend wie auf Wahrheit zu beruhen.

（意譯）　井上學士（今の井上通泰博士のことならん）は播磨の一地方に於て、母親がその男兒の包皮を蘆の葉で切斷することを聞いたと私に語つたことがあり、又氏の友人も全く他の方面から同樣のことを耳にしたさうである。私は此のことに就いて惜むらくはこれ以上に知ることは出來なかつたけれども、併し是等の報告は眞實のやうに思はれる。

是に由つて之を見れば、今猶包皮切斷の風の行はれてゐる地方のあることが明かである。私の考に依れば、有史以前の時代に、南洋方面から吾國に移入した先住民族には、包皮切斷の風習があり、その遺風として龜頭裸出の慣習が成立したのではあるまいかと思ふ。されば之に就いて少し許り私の見る處を記述することにした。

抑々幼兒の包皮を切斷する風習は、一つの宗教的儀式として今に至るも猶猶太教、回々教の信者間に行はれてゐる。而して此の風習が初めて宗教的儀式となつて猶太人に行はるやうになつたのは、彼等の祖先にも云ふべきアブラハムを嚆矢とする。（「創世記」第十七章）これは固より傳說に違ひないが、併し割禮の風習が猶太人に行はれることになつたのは、猶太人が四百餘年の久し

き間、埃及に滯在してゐた時、埃及人より之を學んだ結果であつて、最初から彼等に行はれたのでは無い。ヘロドットの說に依れば、埃及に於ては、有史以前の時代から包皮切斷が行はれてゐたといひ、又ハルトマンの說では、此の風習は亞弗利加より起つて、亞細亞人に傳へたもので、それは先づ亞弗利加の黑人種に行はれた幼兒の包皮切斷の風が太古の埃及人に傳はり、更にその媒介によつて猶太人及び回々敎徒に傳はつたのであると云つた。蓋し埃及に於て、上古時代より包皮切斷が汎く行はれてゐたことは、夙に解剖學者及び最初の人類學者たるブルーメンバッハの證明せしが如く、古代埃及人のミーラには、明かに包皮割損の痕跡の存するのを見ても明白である。而して有名なる埃及研究家エーベルズは、基督紀元前千六百十四年乃至千五百五十五年代に生存した一軍人のミーラの陰莖を得、之をハルレー大學の解剖學敎授ウエルケルに示したが、全く包皮の痕跡をも認めなかつたといふから、埃及に於ける包皮切斷の風習は、旣に紀元前十六世紀の頃に於ても行はれてゐたことが明かである。

太古の埃及人及び猶太人に行はれた幼兒包皮切斷が、如何なる方法の下に施行せられたかは明白でないが、併し石製の刀を以て切斷したことだけは、聖書の記事に徵して明かである。是に由つて之を觀ると包皮切斷の風習が、石器時代より行はれたことは、容易に想像し得られる處で、

蓋し石製の刀を以て包皮を切斷したのは、要するに石器時代に行はれた風習の名殘りに違ひない。さりながら其の後になつて硝子製、又は鐵製の器具を以て切斷することゝなつた。アブラハム及びヨシュアの時代までは、石の刀で切斷してゐたのである。

上記の如く、包皮切斷の風習は上古時代より埃及、猶太人間に行はれて、また回々教徒にも傳へられたが、またそれ以外に、ポリネシア、ニューギネア、印度の一部の蠻族に於ても夙に行はれてゐる。猶太人では、幼兒時代に之を行ふのであるが、その他の民族では、多くは十二歳から十六歳に至る迄の思春期時代に行はれ、之を施された少年は始めて一人前の男となり、武器を携へ、或は戰場に出る資格を得るのである。而して包皮切斷を行ふ際には、宗教的儀式及び舞踏が之に伴ひ、場合によつては、これが六ケ月間も續くことがある。

包皮切斷の原因に就いては、種々の説がある。或は他の種族より識別し得べき民族的徵候として之を行ふといひ、或は包皮の存する時は恥脂が堆積して分解し易く、そのために炎症を起し易いから之を切斷するのであると云ひ、或は包皮を除去すれば、龜頭の知覺が鈍となるため、性交の時間を延長して、對者に多くの快感を與へるに由り之を行ふといひ、或は人身犧牲の遺習として包皮を切斷し、之を神に捧げるのであるといふやうに、いろ／＼の所説がある。

私は以上に於て包皮切斷に關する風習の大要を述べたが、これより本論に入りて我國民に於ける龜頭裸出の民族的風習につき、その起源に關する卑見を述べて見よう。

抑々今日に於ても、南洋諸島に於ける土人間には、殆ど共通的の風習として、貴賤貧富を通じ割禮、即ち包皮切斷の儀式が行はれてゐる。それは獨り回々敎徒たる土人許りで無く、回敎徒たらざるダイアック、パプア、ニアス等の蠻族を始め、メラネシア、ポリネシア、ミクロネシア等の蠻人間にも行はれてゐる。而して此の風習の起源に就いて、グルランドの說いた處に依れば、ポリネシアの蠻族等は、陰莖の龜頭を以て生命の力を賦與する神聖の部分なりと信じ、之を掩蔽せざるがために包皮を切除するのである。果してそれが事實であるか否かは分らぬが、兎に角、南洋諸島の土人間に於て、此の風習の今猶行はれてゐること、及び前記の如く石製の刀を以て包皮を切斷した史實あるに徵すれば、其の起源は非常に舊いもので、石器時代にあつたことを推知すべく、獨逸有名の人類學者シエーテンサックの說いた如くに、原始人類の搖籃地を以て南洋のアウストラリアなりとせば、包皮切斷の風習も、或は南洋土人より起つたものかも知れない。而してそれが亞弗利加にまでも傳つたのではあるまいか。蓋し地質學上、明かなるが如く、プリオツエーン時代に於て、南洋島と亞細亞大陸との連絡があつたとすれば、此時代に當つて、南洋の原始

人類が亞細亞大陸に出で、更に亞弗利加にも進み入つたかも知れない。これは固より臆想であるにしても、包皮切斷の風習は、恐くは原始人類の故郷たる南洋島から起つて、それが他に傳つたのであるまいかとも想はれる。

我が日本島に於ける先住民族で、九州及びその附近の諸地に棲住した種族、所謂「倭人」なる者の祖先が、南洋方面から移住した土蠻と認むべき點の多いことは、既に明かなる事實であつて就中、南九州に住んだ隼人族が、その風俗に於て、印度ネシアン族なる南洋土蠻のボルネオ族に類似せること、即ち黥面文身の風習があつたことや、その用ひた楯に頭髮を附し、赤白土を以て彩色を施したことや、犢鼻褌をあてたことや、舞踏を好んだこと等、いづれもボルネオの風俗に酷似してゐる。而して我が日本人の血管内に、南洋土蠻たる印度ネシアン族の血液が多く流れてゐることも、人類學上明白なる處で、日本人の中、顏面が短く、鼻梁が低く、口大にして唇厚く、顴骨突出し、鬚髯に乏しいものは、則ち此の種族の血液の濃厚なるもので、九州、中國より東國に亙り、主として太平洋の沿岸に多く住んでゐる。此の如き民族は、前記の隼人種族とその祖先を同うするもので、南洋土蠻の後裔たる以上は、その始めて日本島に移入した有史以前の時代に於ては、その母國の風俗を守つて包皮切斷や生殖器崇拜を行つてゐたであらう。然るに智力武力

共に優秀なる天孫民族が日本島に渡來して、此等の先住民族を征服し、或は同化してからは、包皮切斷の風習も何時しか廢絶に歸し、たゞ其の遺風として、少年時代より機械的に包皮を下方に牽退して、龜頭を裸出するに留るに至つたのであらう。而して此の慣習が遂に一般の日本人に普及して、包莖を恥ぢ、或は之を嫌ふやうな第二の慣習を生むに至つたのではあるまいか。日本人間に多年行はれてゐた涅齒の風習も、また今なほ一般に廣く用ひられてゐる犢鼻褌の型式も南洋傳來のものである。

　前記足立博士の論文中に、播磨の一地方に於ては、今なほ包皮切斷の風習が行はれてゐると云ふ記事があるが、これは南洋方面から移入した先住民族の遺風であらう。『播磨風土記』を讀むに肥人の名が往々散見する。肥人は熊襲隼人と其の種族を同うする南洋系の異民族と認むべきものであるから、肥人が嘗て散在した播磨の地方に於て、今に至るも包皮切斷の風習が殘つてゐるのは、敢て異とするに足らないと思ふ。這般の事實に徵しても、日本民族の陰莖龜頭裸出は、先住民族たる南洋系種族に行はれた割禮の遺風たることが想定し得られる。

虐待性好淫者ザード侯爵と
殺生關白豐臣秀次

性慾倒錯の一たる虐待性好淫症、即ち「ザチスムス」Sadisnusの名詞の源となつた佛國のド・ザード侯爵 Marquis De Sade と、我國の殺生關白豐臣秀次とを比較して此二人の惡魔のやうな行爲と、文藝に通じて其の氣質の溫雅であつた事との矛盾を明かにするのは、多少の興味が無いでもない。

抑々「ザヂスムス」なる性慾倒錯は、異性に暴虐を加へ苦痛を與へて、性的快感を惹起する變態性慾の謂で、即ちクラフト・エビングの云つた如く、異性に對する暴行的殘酷行爲の衝動により、又は通般行爲を思念して快感をおぼゆる異常の性的興奮を稱し、或はフエーレーの云つたやうに「殘酷と暴行と性的快樂との聯台」の謂である。此の如き變態性慾を「ザヂスムス」と名づけたのは、佛國の貴族、ザード侯の行爲及び其の手に成つた「ローマンス」の內容に基くのである。

抑々ド・ザードは千七百四十年、佛國は巴里の名門に生れ、千八百十四年、七十四歲の高齡で世を去つた貴族である。彼の靑春時代は騎兵士官として七年戰爭の役に從つたことがあり、

又文學、哲學、歷史、社會學等に多くの趣味を有し、聖書に對しても明晰なる批評眼を具へてゐた程の能才であつた。彼の愛讀した哲學書はラメットリーの唯物論で又マキアヴェリーの學說等も根本的に研究してゐた。此の如き多才多學の人物たるにも拘はらず、その行爲は全然常規を逸し、青年時代より放蕩淫逸なる生活を送つた。その動機は失戀のためで、彼の父は同じ名門の二十歲になる令孃を彼の妻にあてがつた處が、彼は妻の妹に對して燃ゆるが如き戀情を抱き、その結果、尼寺に託せられた妹を盜み出して之と同棲し、一時は幸福なる生活を送つてゐたが、不幸にして情婦が夭死したので、大に失望し、悲哀の極、放蕩三昧に日を送ると共に、その性慾にも甚しき異常を來し、途上で偶然彼に慈善を乞うた妙齡の婦人ローザ・ケルレルなるものを鞭韃して鮮血淋漓たらしめ、又婦人の集會した席上に於て、壯淫劑たる「カンタリヂン」を混じた菓子を與へて、多數の中毒者を出したやうなことがある。此の如き殘酷の行爲を恣にする處から遂に牢獄に禁錮せられた。彼は二十七年間を禁錮生活に送り、その瞑目する迄、いろんな小說を作つた。いづれも異性を虐待凌辱して、性的快感を滿足せしむる變態性慾的事例を露骨に描寫したものである。その作中の主人公は性慾の猛烈なる淫蕩男子で、その犧牲となるものは、上流の婦人が多く、賣笑婦の如きは割合に少い。而して其の描寫するものは、男子が婦人を鞭韃毆打し、或は男子及びその友人が相手の女に毒を與へて之を苦しめた上にも、公衆の面前で之を犯したり、或は女を殺傷して血液の流出するのを樂しげに眺めたりして、絕

大の快樂を感ずる殘酷非道の光景である。その著書の題目及び刊行年月を擧ぐれば左の如し。

1) Justine (1781)
2) Les 120 journeés de sadome on l' ecol de libertinage (1785)
3) Aline et valcour on le Roman Philosophique (1788)
4) Juliette (1796)
5) La philosophie dans le boudoir (1795)

上記の小説は、エリスの評した如く『性慾倒錯辭典』ともいふべく、又『十八世紀の變態性慾書』とも云つて可なるもので、その中にも、第五の小説は最も世に名高く、一名 Les instituteurs libertins（放蕩教師）と稱せられてゐる。而して上記の小説は、いづれも彼れ自身の淫蕩慘酷なる性的生活を根據として作つたものである。

然るに吾人が茲に是非共銘記すべきことは、ザード侯が右の如き殘酷なる性慾倒錯者たるにも拘はらず、その氣質は至つて優柔で、さながら女の如く、又其の音聲も甘えるやうな媚を含んだ猫撫聲であつたといふ事實である。猶其の上にも既に記した如く文學、哲學にも趣味を有する人であつたことを記憶しなければならぬ。

我國に於ても私の見る處を以てするに、ザード侯に比較すべき有名の人物を史乘に求むることが出來る。それは則ち殺生關白と稱せられ、畜生塚の主人公として二十八歲の壯齡を一期とし、高野山の露と消えた豐臣秀次である。彼は少年時代より屢々養父秀吉の軍に從つて殊功を奏し、二十四歲の弱冠にして關白職を襲いだ程

の人物であつたが、その人と爲り淫蕩放縱で、色を漁るに貴賤を論せず、且つ殺生を好み、屢々侍臣を手刄し、夜は微行して街上の路人を斬殺し、或は城樓より銃又は弓を以て行人を射殺し、或は罪人の死刑に處せらるゝことあれば之を大板上に臥せしめ、自ら手を下して之を樂みとなし、或は罪なき孕婦の腹を剖いて胎兒の宿つた樣を見、その行爲の惡逆殘忍なる處から殺生關白といふ渾名を得た。「日本西教史」にも彼の行爲を記して『人を殺すを嗜む蠻行ありて、之を無上の樂みとし、若し罪人の死に處せらるゝあれば、自ら劊手のことを行ふを常とせり。關白の居館を去ること一里半の高地に刑場を設け、その周圍に土塀を築き、中央三間の大案板を置き、その上に人を臥せしめ、之を剉切して興となし、或時は之を立たしめ、兩段に割下し、その最も快とする處は、罪人の四肢を一々切斷するにあり。その狀恰も鳥類を剖割するに異らず、而して其の最も殘酷なるは孕婦の胎を割きて其の子を看るの一事なり。』云々とある。彼に性慾の倒錯のあつたか否かは史乘に徵することは出來ないが、その血を好んで人を殺傷するを快とした顯著なる事實や、又右大臣晴季の女の寡婦となつたものと其の娘とを同時に妾とした如き非倫の行爲等に徵すれば、その性慾にも異常があり、「サヂスト」なるべきことが推想せられる。

然るに秀次が上記の如き殘酷無道の行爲を擅にした人物たるにも拘はらず、文學の趣味に深く、又父母に孝であつて、且つ才識が俊秀であつたことは、吾人の銘記すべき事柄である。彼が六國史、類聚三代格等を朝廷に献じ、大和にある諸寺の僧侶に命じて、源氏物語を謄寫せしめ、

五山に扶助料を給して聯句會を再興し、又自らも屢々聯句會に觀月の宴を催して、風流韻事を嗜んだことは、亦以て彼が如何に文藝を愛したかを立證して餘りある『白石紳書』には秀次が或る謡曲の故事に就いて、世雄坊といふ僧侶の言の誤を正したことを記し『備前老人物語』には彼が和歌の趣味に深かつたことを賞してあり又彼が書を善くしたことは『書工便覽』に明記せられてある。又彼が皇室に忠誠であつたことは黄金五千枚を朝廷に献じたことが『御湯殿日記』に記してあるを見ても明かであり、又實父三好吉房に孝心深かつたことは、當時の名醫秦宗巴を尾張に派して其の病を診せしめ、且つ父を養ふに十萬石の俸を以てしたことに徴しても分る。又祖母大政所が病に罹つた時には、畿內の諸神社に各千貫文を捧げて平癒を祈つた。されば『日本西教史』中にも秀次を評して『壯年の貴人に稀なる良質を具へ、其の才識俊邁にして義に篤く、實直謹愼の人なり。』と嘆賞し、又彼の嗜好を記して『文事は其の最も嗜む處にして之に優るの樂は無し。』とある。

以上叙說した如く、ザード侯と豊臣秀次との二人は、略ぼ類型の人物である。ザード侯が婦人のやうに優しい氣質で、且つ文學、哲學に通じてゐた如く、秀次も亦忠孝の心篤い武將で、その最も嗜むものは文藝であり、又美術の方面にも長じてゐた。然るに他の一面に於ては、兩者共に女色を好み、荒淫放縱なるのみならず、血を流し人を虐げて之を快樂とするが如き、殘酷無道の行爲を擅にした。實に奇怪極る一大矛盾である。併し「ザヂスムス」の人間が概して温

纖優婉なる男子に多き奇異の事實を想へば、這般の矛盾の謎は容易に解き得られる。

抑々人を殺傷して快感をおぼゆる「ザヂスト」は案外にも氣質の優しい温和なる人間である。此の事實はエリスの記述した實例に徴しても明かで、之に依れば、途上に於て短劍を以て一婦人を刺した「ザヂスト」の一給仕人は、女子の如き音聲を有し、又その外貌も可愛らしい小供のやうであつた。又殺人淫樂者たるライデルといふ男は至つて恥しがりの内氣な性質であつて、人前で放尿することも出來なかつた。又マリーの實驗した一「ザヂスト」は彼と共働した女子を絞殺せんとしたものであるが、至つて内氣な性質で、一寸したことにも顔を赤くする程の氣の弱い男であつた。又キールナン、マイエルの實驗した既婚婦人は同性愛を好み、その教育した一少女を「フォーク」及び鋏で傷つけ、總身に百餘の創を負はせた程の殘酷を敢てしたが、併し彼女の平素は貞淑温雅で、誰れしも賞讃せざるは無かつたといふことである。又モルの説に依ても、「ザヂスト」の多くは神經質性の體質で、纖弱なる女性的性格のものなることが興味ある點だと云つてゐる。

上記の如き事實から觀察すると、ザード侯及び殺生關白の二人に認めらるゝ矛盾の性格と行爲とは、その實矛盾に非ずして畢竟「ザヂスト」の一特徴なることが明かである。之に關して憶ひ出されるのは、谷崎潤一郎氏の傑作の一たる『少年』で、果して事實に據つたものか否かは知らぬが、「ザヂスト」の色彩甚だ顯著なる塙信一といふ少年が『附添ひの女中を片時も側から離したことの無い評判の意氣地なし、誰も彼も弱

蟲だの、泣蟲だのと惡口をまいて遊び相手になるものゝ無い坊っちやん」であつたと云ふ記事は、上記の所説に裏書きするものである。併し溫和柔順なるもの、纖弱なる女性的性格の所有者が、好んで殘酷極まる行爲を敢てし、なまなましい血潮の泉のやうに溢れ出づる有樣や、苦しみのために悶え狂ふ狀態等を見て、一種名狀すべからざる非自然の快感をおぼゆるのは何故であるか、這般の疑問に就いて、未だ確實なる解決を與ふることが出來ないのは私の遺憾とする處である。

露國に於ける去勢

露國では、宗教上の迷信のため「カストラチオン」を行ふ者の多いのは、人の知る所であるが、此の去勢派の開祖はセリパアノフといふ者である。千七百六十年頃から露人に其の名を知られ、當時其の本山は聖彼得堡にあつた。此の派は數十年前までは盛んに行はれたもので、睪丸を去り、又去られた者は聖人になると信じ、此の聖人が十四萬四千人に達すれば、始めて救世主あらはるべしと唱へ、盛んに他人を說いて去勢を施し、甚だしきは暴力に訴へてまで、之を强行したことがあつたが、露國政府は開祖セリパアノフを捕縛し、之を西比利亞流刑に處したといふことである。

江戸時代に於ける性的犯罪の刑

江戸時代に於ては、男子は十五歳、女子は十三歳を以て成人と認め、結婚年齢と定めた。これは畢竟往古の大寶令の規定をその儘踏襲したものである。先づ强姦罪に對する刑法より述ぶれば、十三歳以下の幼女を犯したものは、遠島に處し、十三歳以上の女子を犯したものは、重追放に處し、幼女强姦に對する刑より一等を減じたものである。今幼女强姦に關する判決例を『御仕置裁判帳』『科條類典』及び『德川禁令考後聚』の中より左に抄出する。

（一）十一歳の幼女强姦例

（寛文三年八月二十日の判決例）

下谷新町家主
馬持金右衛門屋馬士
沖　右衛門

右の者儀、親の元、缺け落致し、御當地へ出て、宿金右衛門方日雇に相成り罷在、酒たべ酔ひ、涼み居候處、當十一歳に相成候同町吉右衛門店三四郎の娘ちよ、遊びに罷越候を、明店へ連れ參り、聲立て候につき手拭ひを口へ割り込み、押して不義致し、陰門を五分程破り、其上、檢使の節、品能く相聞え候樣、相違の儀共申立候段、不屆につき、遠島可申處、此度東叡山に於て、

心觀院様二十一回忌御法事の御赦に門前拂ひ（徳川禁令考後聚）

（二）九歳の幼女强姦例

（享保三年三月の判決例）

八官町木戸番人　久　助

此者を南鍋町二丁町目七郎右衛門店、佐次兵衛、請人に立て、番人に出置候同町八右衛門店三郎兵衛方に、武藏尾久村九兵衛の娘きちと申す九歳に罷成候ものを預り置候處、當月七日、此者、きちに無體の密通いたし、病氣つき候故、引き取り養育致候様に申候得共、合點不致候由、三郎兵衛訴訟申候に付き、當月十六日双方召出し、吟味の上、相違無之、誤り候由久助申レ之、右娘儀は此者請人佐次兵衛、並びに家主七郎右衛門方より急度養生致し、毎月様子訴へ出づる様申付け、此者事善七に預け遣はし、今日内寄合へ召出し、列座へ令レ聞、先達而申付候通り、右娘は三郎兵衛方に差置き、養生の儀は此もの宿並に家主方より養生致候様に申付け、南鍋町名主文藏儀は先達て召出し候節、當人共延口願候剋、罷出で可伺處に、打ち捨て置き、腰かけより罷歸り候段、不屆に付、今日召出し、外の公事合とは違ひ候の儀、粗末の仕形に付き、押込に申付、此者は右の通り法外なる仕形に付牢舍。

右の者依二御差圖一遠島申渡す。（科條類典）

（三）九歳の幼女强姦例

（寛文十二年二月の判決例）

壹人甚左衛門、是は神田鍋町立昧店のもの

家主玄昧の娘九歳に罷成候を手習ひ致へ申すとて、昨二十八日の晝、右の女子、年にも不ㇾ足處に、無體に無作法仕り、彼の女子致ニ被開ー大血を引き、十死一生の由、玄昧訴訟申候、人外なる仕形に付、穿鑿の上、牢舍。

右の者三月十四日死罪。

上記の實例に徴すれば、幼女強姦は遠島の刑に處し、更に之を死に致したるものは死罪に處することになつてゐる。

有夫の婦の强姦は、その刑罰甚だ重くして死刑に處し、また輪姦した場合には、首謀者を獄門、同類を重追放に處することになつてゐる。即ち『御定書百箇條』中、寛保二年の追加に、

夫ある女、得心無ㇾ之に押して不儀致候者は死罪、但し大勢にて不義致候はヾ頭取は獄門、同類は重追放。

とある。

姦通は夫婦の倫常を重んずる儒教的思想の盛んであつた當時代のことゝて、極めて重刑に處した。『御定書百箇條』の寛保三年追加に、

主人の妻と致ニ密通ー候者は、男は引き廻はしの上、獄門、女は死罪。

主人の妻へ密通手引いたし候ものは死罪。

とある。而して一方に於ては、姦通の現行犯を見つけた時には、姦夫姦婦を四つ斬りにしても敢て差支なきことを本夫に許してあつた。しかし、姦通は當時代に於ても親告罪であつたから本夫の心次第で姦通の罪を宥すこともあれば、姦夫の方より金を出させて謝罪せしめたこともある。『間男は七兩二分』と云ふ諺の因緣は頗る振つたもので、最初は各藩に於て姦通罪のため

に死罪に處せらるゝ者があれば、一人毎に七両二分宛を高野山に納めて、菩提を弔つたのであるが、姦通事件の內濟が多くなるに從ひ、姦夫の方が死罪になつた積りで、高野山に寄附する金額をば本夫に提供して、謝罪するやうになつて了つたのである。これぞ即ち『間男は七両二分』の諺の由來であつて、天保時代に出てた大津繪に『高いも安いも色の道、密夫(まをとこ)は七両二分、おいらんは三歩で、女郎衆は一歩に二朱、ごろ寢は四百、切見世で鐵砲はなすが百文云々』とあるのを見れば『間男七両二分』の諺は既に天保以前より起つてゐたことを知るべく、且つ姦通を以て女郎買同樣、一定の費用を以て行ひ得られるやうに信じた非倫敗德の思想が、社會の暗々裡に廣く行はれたことを推測し得られる。

當時代の法律は本夫に不義を成敗する特權を與へてあつたから、若し姦夫姦婦が手を携へて出奔するやうなことがあつた場合にも、本夫は彼等の行衞を探し出し、見つけ次第、重ねて置いて四つにすることも出來た。所謂『妻敵討(めがたきうち)』と云ふのが是れで、享保以前には隨分多く行はれた。本夫が妻敵討をなすの際、若し姦夫のみを殺した時は姦婦を死罪に處するが、萬が一姦夫を取り逃した時には、姦婦の處分は本夫の心任せにすることに規定せられてあつた。近松の戯曲『笹野權三重帷子』や、『堀川浪の鼓』の如きは、妻敵討を材料とした悲劇である。

重婚罪に對しては同じく『御定書百箇條』に次の如く規定してある。

離別狀を遣はさず、後妻を迎へ候者は所拂ひ、但し利慾の筋を以ての儀に候はゞ家財取上げ江戸拂ひ。

情死に對しては之を嚴禁するの方針を取り、享保七年、情死を主材とした戯曲讀物を禁じ、情死を仕損じたる物は、先づ三日間曝しものにし、次で非人に下し、また死亡した者は野外へ裸體として放棄し、同じく曝しものにした。しかし此の法度は年を經ると共に弛廢し、非人に下したる情死の仕損じ者を、親族から非人頭に金を出して良民にする風を生じ、之を足洗ひと稱した。儒醫井上金峨の「病間長語」に這般の消息を傳へて、「今の制には男女共にそのまゝで乞食に下すばかりなり、有司は公に知り玉はざらん、その夜の中に金を出して乞食の手より贖へば、また以前の素人となりて夫婦となるといへり」とある。又遺骸を曝し者にする法度も遂に全廢せられた。「南水漫游拾遺」に、「寛政五年二月十九日、阪町にて心中あり、男女の死骸を千日前の墓所に曝せし處、陰門の毛多き評判にて見物夥しく、その後、心中のさらし物止む」とある。これは大阪のことであるが、江戸でも同様の事情があつて、遺骸をさらすのを止めるやうになつたのであらう。

四胎

一時に四胎を分娩することは甚だ稀有である。されば往古の皇國の歷史にもこれを明記した。天武天皇紀に曰く、林坊新羅女、牟久賣、一產二男二女と。孝謙天皇紀に曰く、下總國穴太部阿古賣、一產二男二女と。

男性假半陰陽者アレキシナの日記中より

男性假半陰陽 Die männlichen Scheinzwitter とは、男性でありながら、其の外陰部の形態が恰も女性の如き外觀を呈する者の謂で、即ち陰莖の發育が小さくして、さながら陰核の如く、左右の陰嚢相癒合せずして其の間に空隙を殘し睪丸は陰嚢內に下降せずして、鼠蹊管若くは腹腔內に留止するが故に、その外陰部の狀態は女子に於けるが如く、その甚しきものは殆ど之と區別することの出來ない程酷似することがあるそれ故、實際は男性でありながら、分娩當時より女子として命名せられ敎育せられるので、本人自身も女性なりと信じ、女子の職業に從事するやうになり、又性慾も男子でありながら女性の如くにも男子を戀ひ、婚嫁することもある。併し又他の一面に於ては、女性の生活をして居りながら、その性慾のみは男性的傾向を有し、女子を愛慕する者も尠く無い。マルチニーは、四十七歳の産婆が屢々妙齡の婦人を强姦した一例を報告したことがあるが、その所見に依れば、該産婆の陰核は甚だ大きく、小陰唇の發育弱く、大陰唇の內には、能く還納し得べき睪丸を觸れたので、男性假半陰陽なることが判つた。又千八百八十四年、佛國醫學會に供覽せられたデユリアといふものは、其の容貌溫和柔順で、長い

頭髪を有し、乳房が能く發育した等、女子に同じく、又其の陰部も一見すれば女子のやうであるが、併しよく注意して見ると、陰核は異常に大にして二十五ミリメートルの長さを具へ、且つ強く屈曲し、膣の開口部には處女膜なく、膣の長徑は九ツォールあつたが盲嚢に終り、子宮を觸れず、又卵巣も無く、月經は一回も來潮しなかつた。處が、大陰唇の深部に於て、兩側共に睪丸でなければならぬ者を觸れた。而して未だ嘗て男子に愛着したこともなく、或男と接したことはあつたが、毫も快感を覺えなかつた。これも亦明かに男性假半陰陽である。

さて茲に述べんとするアレキシナといふものは、二十二歳まで女子として尼寺に於て教育されたものであるが、併しその死亡するに至る迄は、疑ひもない男子たることを示し、且つその感情も明かに男性的であつた。ローランの記述した處に依れば、彼は十五六歳許りの妙齢の女子と交際し、之に接觸する毎に殆ど抑制すべからざる程の性的興奮を感じ、又往々春夢に襲はれ、その際精液の射出を感じ、朝に至つてその寢衣に斑點の附着するを發見したやうなことがあつた。法醫學者タルヂユは、處女として生活したこの半陰陽者アレキシナの日記より、性的感情に關する記事を拔抄して、之を學界に報告したことがあつた。今之を左に譯出して見よう。

「處女に於ける あらゆる 美しさが現はれてくる年頃となつても、私の身體は思春期の人々のやうに豐膩快活とならなかつた。私の蒼白い病的の顔色は、年久しい苦惱のさまを語つてゐるのだ。私の容貌は稍角張り、上唇と頰の一部と

には粗毛が生へ、日を逐うて濃くなるので、人がそれを見て私を嘲笑する。そのため私は鋏を時々剃刀に代へて薄毛の尖を切り取つてゐたが併し鬚髭は次第々々に太くなつて、遂に人眼にも明らかに見ゆる許りになつた。又私の身體には活字を植ゑた如くに毛が生へてゐるので、常に注意して腕を掩ひ隱し、非常に暑い時でも、決して腕を露出せねやうにしてゐた。私は可笑しい程、それを苦に病んだのである。此くの如くなるにも拘はらず、私は甚しく愛情に渇して同じ年わかい女に憧憬し、胸の内には絶えず熱烈なる焔が燃えてゐた。私が始めて深い仲となつたのは、一つ年上のテクラといふ處女であつた。快活で、そして心優しい性質で、病的の上にも野呂間な私とは全く違つてゐたけれども、二人の中は鴛鴦の如くに睦まじく、少しの間も相離るゝことの出來ぬ程であつた。』

處がその後になつて、アレキシナは他の女友サラといふものに愛を傾けるやうになつた。前のテクラに對しての愛はプラトーン的の方であつたが、今度の愛は最早や肉的の情調を帶びてゐた。彼は次の如くに記してゐる。

『私は夜の祈禱を終つて後、サラの寢床に行き恰も母がその子供に對するやうに、手まわりの事をしてやるのが何よりの樂みであつた。そして毎夜サラの衣服を脫がしてやるのが、私の慣習となり、若し彼女が自身獨りで其の衣服を脫ぐやうなことがあると、私は嫉妬の念に堪へられない程であつた。實に子供らしい馬鹿げた樣なことであるが、それを思ひ止まつて了ふことが出來なかつた。私はサラをペットの上に寢かしてから、その傍に跪き、私の額を彼女の顏に

あてゝ接吻した。かくしてサラが心地よげに眠り始めると、私は熾烈なる情火に燃えながら、その可愛らしい姿を眺めいるのが常て、いつも其の傍より立ち去ることが出來ない程であつた私が彼女に對して抱いた感じは、友愛の情でなくて、實に戀愛の心であつた。私は夜中屢々眼覺めて盜むが如くにサラのベットの處にまで忍び行き、愛に燃えつゝある我が唇を彼女の美しい顔に近づけながら、うつとりとして見つめることがある。こんな事をした夜分は、十分に夜明けの鐘が鳴つても、ベットより起きることが出來難かつた。いつも八時少し前になると、サラは他の室に往つて衣服を着かへることになつて居るので、私は之に伴うて同じくその部屋にゆき、彼女に身まわりのことを手傳つてやる。私は名狀し難い愉快を以て彼女の波の如き頭髪を梳り、帶をしめ、直ちに吾が唇をその露出した乳房に當てがつて接吻する。その時、私は彼女がその愛らしい顔に紅葉をちらすのを幾度も見た。ある夜、私は彼女に同衾を請うた處が、直ちにその許しを得た。之を記するには言葉のない程て、あまりの喜ばしさに狂氣になつたやうな感じがした。私は彼女と同じベットの中で長らく睦ましげに語り合つた。それから後、彼女ば到頭私の所有物となつて了つた。』

以上はアレキシナの告白の一節を譯したものであるが、之を見ても、女子として敎育せられ又自らも女性と信ずる男性假半陰陽者に於てもその性慾のみは普通で、女子を愛慕する者のあることが分る。之に依つて考へるに、世に屢々認めらるゝ女子同性の愛の中には、其の一方の相手が眞の女性に非ずして、上記の如き男性假半陰陽者なるが如き事實も含まれて居るであらう。這般の點に注意して調査したならば、或は多少興味ある結果を得らるゝかも知れない。

女　嫌　ひ

女嫌ひ Misogynie, Abfall vom Weibe といつても、色々の種類があるから、便宜上、左の五種に區別して聊か私の觀る所を述べて見よう。

性的冷淡に由る女嫌ひ

第一種の女嫌ひは、性慾の缺乏に基くもので、此の如き者の多くは先天性精神障碍に因るのである。這般の實例は、クラフトエビング、ハムモンド、フォーレル等より報告せられたが、併し男子に於て性慾の全然缺乏するものは先づ極めて稀有といつてい〻。但しフユールブリングルの説に依れば、男子に於ける先天性性慾の缺乏は、他の學者の思惟する程に稀なので無いとのことである。世の中には極端な女嫌ひがあつて、女の匂ひを嗅いでさへ嘔吐を催うすといふやうな男子もあるが、併し此の如きものを以て必ずしも性慾の缺乏せるものと看做すことは出來ない。その中には後に述ぶる處の性慾顚倒や、或は一種の强迫觀念に屬する潔癖等に基く者も尠く無い、性慾の缺乏したものは女嫌ひと云ふよりも寧ろ女に冷淡無頓着なもので、所謂「性的冷淡 Sexuelle Kälte, Frigidität と稱せらるべきものである。

性慾顚倒に由る女嫌ひ

第二種の女嫌ひは、性慾顚倒のものに認むる

處で、即ち異性を愛せずして同性を愛するものである。世に所謂女嫌ひの中には之に屬するものが最も多い。這般の性慾異常なるものは、如何に佳人麗姫を見るも毫も心を動かさず、且つ一般に女性を嫌惡するものである。但し同性の愛には先天性及び後天性の二種があるが、後天性のものに於ても、久しく之に耽るものは遂に女嫌ひになつて了ふ。希臘古代の學者ヘシオード、シモニデス、ユリピデス等が女嫌ひであつたのは、イワン、ブロッホの云つた如く、當時希臘に廣く行はれたる男色と密接の關係あつたことは殆ど疑がない。

事情境遇に由る女嫌ひ

第三種の女嫌ひは、自己の事情境遇から女嫌ひになつたもので、ショーペンハウエルが女子を熱罵し、之を嫌惡すること甚しかつたのは、少年時代より實母との仲が惡く、毫も母愛の温味を解してゐなかつたのと、また一つには壯年時代に黴毒に感染したがためである。又ストリンドベルグの女嫌ひも、其の名作『馬鹿者の懺悔』Beichte eines Toren に徴して知らるゝが如く、その一身の境遇事情に關係があり、又『男女と性格』Geschlecht und Charakter を著して女性を罵倒したワイニンゲルも、婦人に對して不幸不愉快なる經驗を有つてゐたからである。

自己の學說に基く女嫌ひ

第四種の女嫌ひは、自己の學說や觀察に基く女嫌ひで、例へば、精神病學者メビウスが、女子の生理的精神薄弱なることを論じ、或はハインリッヒ・シュルッやエヴアルド・マイエルが男性的文明を讃美し、或はベネデクト・フリードレンデルが男子間に於ける同性の愛或は少くとも

生理的交情を嘆美して女性を排斥したるが如き類である。

自己の性癖に基く女嫌ひ

第五の女嫌ひは、自己の性癖に基くもので、例へば女子を外面如菩薩内心如夜叉、五障三従の惡人と信じ、或は女子を不潔汚穢視して、之に接するを嫌惡するの類である。此の如きものは主として感情の強い神經質の男子に認むる處で殊に潔癖の著しい者の中に女嫌ひを見ることが多い。

女嫌ひの實例

以上は、私の勝手に分類した女嫌ひの種類であるが、さて茲に吾國近古の雜書隨筆の中から女嫌ひの若干例を擧げて見よう。

『賤の小田卷』に曰く、——志道軒は女と出家とが嫌ひにて、婦人出家の中、來りて聞く人に交り居れば、段々と當て口をいひ出して、後は居堪らぬやうになる故、彼が辻には婦人坊主來らずと。

『梧窓漫筆拾遺』に曰く、——龜田鵬齋の語りし備前の僧士井上嘉膳は、婦女を惡みて一生不犯なり。姉に逢ふにも一間を隔てゝ尊敬せり。これは非常の行なれども、世人好色の戒ともなるべし。婦女を惡みけるは、後梁の先主蕭登に似たり。一生不犯なるは唐の陽城の兄弟に同じ。

『隨意錄』に曰く、——尾張人岡材雲八者、性惡二婦人一、衣服飮食、猶婦女之所レ製者則、知二其臭一、而不レ欲レ衣二食之一云々。

『甲子夜話』に曰く、——信州を領せる或侯の婦女を殊更に嫌ひて、其の匂ひをも厭ふと云ふ。それ故、奥方もあれど對面せらるゝまでにて、各別に離牀し、すべて女は近づき寄せぬとぞ。

又領邑に鯨漁を業として富める者あり。女嫌ひにて、下女など厨下に奔走するの外、身近くに女なし、然れども妻なしと云ひては吝嗇の譏を受くとて、京都又は近領富家の娘を妻に迎ふるに、もとより別居して、たまさかに呼び見るのみの體ゆゑ、妻も倦み果て遂に別れ去るとぞ。

以上の諸例は果して性慾の異常に因るか、或は神經質性の癖習、潔癖に因るか、固より明かで無いが、兎に角、女嫌ひの稀有で無いことは此等の實例に徴しても明かである。現代に於ける有名の人では、西本願寺の前法主大谷光瑞氏が女色を好まず、本願寺に奉仕してゐた奥女中や其他の女子を殆ど解雇して、身邊の世話を美少年や雛僧にさせたと云ふことは、世に隱れもなき事實で、光瑞氏の性的生活の普通でないことは明かである。

巨大なる陰嚢象皮病

昔安政の頃、常陸の國に、大睾丸の男とて世に傳へられたのは、異常に巨大なもので、「桃源遺事」に其の圖を掲載したが、水戸の人、本間竹翁の記にも曰く「狸の睾丸八疊敷の諺はあれども、曾て之を見しものなし。常陸の大睾丸（鷹場村庄治平）はさる空言にあらず。實に近世の一偉觀なりし。本人現存中は拙者年々見物にゆけり。一見したる所、とても睾丸とは見うけられず。宛ら巖石の前に人の坐するに似たり。二巾の前掛にて之を掩ふも左右五寸程づゝ溢る厠にゆく時は妻子之を畚（ふご）に乗せて擔ふ。實に、五大州中無双の大睾丸なるべし。」云々と。

變態性慾要說（一）

本篇は變態性慾に關する學說の概要を一般讀者に知悉せしめんがため、特に簡潔明瞭に叙說したものである。

緒論

變態性慾 Anomalien des Geschlechtstriebs, Psychopathia sexualis とは主として變質者及び精神病者に認めらるゝもので、普通の人間の性慾と異る處は、其の發現の時期 Zeit 其の分量 Quantität 及び性質 Qualität の相違にある。

抑々健全なる人間に於ては、男子は十五六歲女子は十四五歲で生殖機關が成熟し、性慾の發現するものが通常であるが、然るに時としては未だ此の時期に達せざる小兒時代に於て、旣に性慾の發現するものがある。之を稱して性慾の早期的發育 Praekozität der Sexualtriebsentwickelung といふ。又性慾が常人に比して遙かに強く、或は弱く、或ひは全然缺乏するが如きものを稱して性慾の分量的異常 Quatitative Anomalien des Sexualtriebs といひ、又異常の方法によつて性慾を滿足するものを性慾の性質的異常或は性慾倒錯 Qualitative Anomalien oder Perversionen des Sexualtriebs と云ふのである。

第一章　性慾の早期的發育

これには二種を區別する。一は性的早熟

Frühreife Geschlechtsentwickelung, Praekozität der sexuellen Entwickelung といひ、他は早夙性發情 Pubertas praekox といふ。

性的早熟とは、小兒時代に於て既に生殖機關が成熟し、從つて第二次性徴も顯著に發現して男子ならば鬚髭を生じ、音聲も濁調を帶び、又性慾も、發揚興奮して異性に戀着し、女子ならば、月經を通じ、乳房も腫大し、異性に接觸して姙娠し分娩するものである。此の如き異常は小兒時代に於て生殖機關の發育を抑制する松菓腺（大腦と小腦との間に介在せる内分泌腺）に破壞性腫瘍、就中、畸形腫 Teratom が生じて其の機能の廢絶するがために惹起するのである。

早夙性發情とは、生殖機關及び爾他の體部も發育成熟せざる小兒でありながら、獨り性慾のみが早くから發現するを云ふ。蓋し性慾は食慾と同じく、生れながらに存する本能であるから小兒時代に於ても一定の體部、就中、陰部、直腸、尿道、口唇、皮膚等の刺戟によつて、性慾の興奮することのあるのは敢て異とするに足らない。併し其の特に著しく發揚興奮して、まだ幼兒でありながら既に手淫を試み、或は異性を戀ひ慕ふが如きは、精神病性體質のものに於て認められる。

第二章　性慾の分量的異常

第一節　性慾の缺乏及び減退（性的無感覺 Sexuelle Anaesthesie 或は「アナロフヂージー」Anaphrodisie）

生殖機關の發育通常で、而も性慾の全く先天性に缺乏するが如きことは男子には甚だ稀有である。而して今日までの經驗に徴すれば、他の

身體的及び精神的異常に併發するものであるから、變質現象 Degenerationserscheinung と認むべきものである。之に反して女子に於ては先天性に性慾の缺乏すること決して稀でない。又必ずしも精神病的神經病的症狀を伴ふこと無く、身體及び精神狀態は全然通常なるに拘はらず、獨り性慾のみが缺乏することがある。此の如きは畢竟先天性に性慾發育が抑制せられて、小兒の如き狀態に留まるものであるから、オイレンブルグは之に精神的性的小兒症 Psychosexualer Infantilismus といふ名を與へた。

性慾の缺乏に反し、比較的屢々男女を通じて認めらるゝものは性慾の微弱 Geringe Entwickelung des Sexualtriebs であつて、就中、女子に於て見ることが多い。エッフエルッの説に依れば、性的に冷淡なる女子は總女子數の十%以上を算すといひ、又グットッアイトは四十%にも達すと云つた。さりながら是れ必ずしも病理的原因に基因するものに非ずして、身心共に通常なる女子に於ても性慾の微弱なるものが尠く無い。男子に於ても同樣である。但し性慾其者は在つても、色情の缺乏及び高度の減退は病理的原因より起ること多く、就中、房事過度、生殖機關の障碍、酒精、「モルヒネ」中毒、糖尿病腦脊髓病、神經衰弱症、「ヒステリー」等に起因することが多い。而して色情の缺乏減却其者は別に健康を害することも無いが、男子では結婚を妨げ家庭の快樂を缺き、女子では破鏡の嘆を招くことゝなる。

女子にして性交の快を感せず、色情の微弱なるものは、先天性の原因に基くこともあるが、又後天性の原因によつて生殖機關に障碍を來た

し、知覺に變化を呈するより起ることも多い。例へば、手淫に耽つた結果、膣粘膜の知覺鈍麻となり、或は男子の性交方法が粗暴にして快感よりも疼痛を訴へしむるが如き類である。男子の色情薄きものにあつては、その多くは陰萎或は生殖機關に異常あつて、交接或は生殖の不能を伴ふものである。

第二節　性慾の病的亢進（性的感覺過敏 Sexuelle Hyperaesthesie）

夫れ性慾の強度は各人の年齡、體質、生活法周圍の影響等の異るに從つて同一でなく、又健全なるものに於ても特殊の原因、例へば永い禁慾により、或は酒類の飲用により、或は色情的刺戟（房事の想像、淫猥なる圖書等）によつて、一時性に亢進することがある。併し茲に述べる處の性慾の亢進は、或は發作性に起り或は永久に持續し、殆ど常に淫猥なる觀念を伴つて脊髓に於ける生殖中樞の興奮及び之に起因する生殖機關の反應（男子では陰莖の勃起、女子ではバルトリン氏腺分泌增多及び陰核勃起）を來すものである。但し性的感覺過敏の度猶輕症なるものでは、自己の意志を以て淫猥の念を抑制し、猥褻行爲を愼むことが出來るから、未だ道德的乃至法律的罪惡を犯すに至らないが、重症なるものに於ては、全く自制心を失ひ淫猥の念全く意識を司配し、精神は溷濁朦朧となつて衝動的に猥褻行爲を演じ、時と場所とを顧みず、又その相手の老幼美醜を問はず、若し異性の見當らぬ時には或は手淫を試み或は雞姦を企て、全く狂暴の狀態に陷るものがある。此の如き重症の性慾亢進を稱して「サチリアージス」Satyriasis（男子に於て）「ニンフオマニー」Nymphomanie

（女子に於て）といふ。這般の病症は男子では屢々癲癇、進行性痲痺、躁病、初期の脊髓癆等に來るもので、その起るや多くは發作的である。女子では「ヒステリー」、重症の神經衰弱症、腦脊髓病等に來り、又往々更年期に發生することがある。

「サチリアーシス」に罹つた男子は强姦、其他狂暴醜陋なる猥褻行爲をなし「ニンフオマニー」を患つた女子は自ら貞操を破り、賣笑婦の如く多くの男子に接するも敢て耻としない。モルの記した所に依れば、或る有名なる貴婦人は、途上遭遇した未知の男子を挑み、之を自邸に伴ひ歸つて、その飽くなき情慾を滿足したといび、又或る女は其の燃ゆるが如き色情を滿足せんがために、好んで賣笑婦の群に入つた。世に所謂淫婦と稱せらるゝものは則ち此種の女性であつて、その性慾は發作性或は持續性に著しく發揚し、受動的位置より脫して、自ら進んで男子に迫り荒淫度なく、羞恥感覺が殆ど全く缺如した病的女性である。羅馬古代の女皇メッサリナ、露國女皇カザリナ第二世の如き、齊文帝皇后の如き、我國江戶時代に有名であつた俳優三代目阪東三津五郎の妻お傳の如き、蓋しその最も顯著なるものである。

されど又男女共に生殖機關に於ける局所的疾患より、屢々性的興奮を惹起することあるを記憶しなければならぬ。男子に於ては攝護腺の慢性炎症、尿道攝護腺部の充血等により、女子に於ては外陰部及び膣の痒疹等によつて著しく性慾の發揚亢進することがある。その他、女子では子宮の疾患よりも往々性慾の亢盛を來すことがある。ベルネルは性慾の發揚亢進した更年期

の婦人に於て子宮の屈曲、纖維腫等を認めた。

第三章　性慾の性質的異常

第一節　性慾顛倒 Konträre Sexual-empfindung(同性愛 Homosexualität)

男子が女子を愛し、女子が男子を戀ふは自然の情である。然るに世には之に反して異性を嫌忌し、同性を愛するものが尠くない。此の如きものは屢々身心の通常なる人に於ても見る處で、唯その性慾のみが顛倒するのみである。しかも其の甚しきものに至れば、男子にして女性と感じ、女子にして男性と感じて同性を愛慕し、その言語、動作、服裝等悉く此の顛倒した感覺に相當するのみならず、その身體の狀態もまた、他性の身體に類似するものもある。即ち男子ならば、其の體格纖弱で鬚髯の發生少く、皮下脂肪多くして一見女型に類する體質である。此の如き男子を稱して「アンドロギニー」Androgynie といふ。女子ならば骨骼筋肉の發育强く、乳房小にして骨盤狹く、往々鼻下、頤部に粗毛が生じ、男型の體質に類似してゐる。此の如き女性を稱して「ギナンドリール」或は「ウイラゴ」Gynandrier, Virago と云ふのである。

同性愛には先天性と後天性との二種がある。先天性のものは生來同性に愛着心を有するもので、此種の性慾異常を除けば身心の通常なるもの多く、必ずしも疾病或は變質狀態に基因するものと認められない。而してその大多數は、思春期或はその以前より早く性慾顛倒の徵候を現はし、又その多くのものは自ら感傷的或は神經質の人間たることを知覺するものである。後天性のものは種々の原因動機より同性愛に陷るも

ので、生來その性慾に異常のあるのでは無い。故に此の如きものを稱して假性同性愛 Pseudo-Homosexualität と云ふのである。

同性愛の謎を解くに當つて看過すべからざることは、小兒時代に於て何人も屢々同性に對する愛情の起ることである。未だ思春期に達せざる間は男女共にその日夜親しく接觸する同性の朋友教師等を愛慕する傾向がある。併し健全なる心性を有するものでは、次第に此の如き傾向が消失して異性を愛するやうになるが、之に反して心性に異常があり、或は遺傳素質を有するものでは、猶依然として同性に對する愛情の傾向の留存することがある。思ふに同性愛なるものは性慾の分化 Differenzierung の不充分なるに基つく一種の異常と目すべきもので、モルは同性を愛するものを稱して精神的性的兩生體 Psychosexuelle Hermaphrodisie と云ひ、之を區別して兩性愛 Bisexualität と純然たる同性愛 Vollständige Homosexualität の二者とした。前者は異性を愛すると共に同性をも愛するもの、後者は專ら同性のみを愛するものである。

（甲）男子に於ける性慾顚倒（男色 Uranismus, Urningtum）

これには三種の別がある。第一は異性の他に同性をも愛するもの、即ち兩性愛と稱すべきものである。但しその中には異性に對する愛情が同性に對する愛情よりも強いものもあれば、又兩性に對する愛情の程度の殆ど同等なるものもあるが、併し最も多く認められるのは同性愛が異性愛よりも濃厚なるものである、第二は純粹の同性愛であつて、全く同性のみを愛するものである。その中、自己を受動的位置に置くもの

即ち被動的鷄姦者 Passive Paederasten にあつては多少その身體に女性的色彩を帶びてゐる。第三は精神上にも變化を伴ひ、その思想感情が女性的型式を呈するもので、此の如きものを「エッフエミナチオ」Effeminatio（女性化）といひ、同時に身體の形質も亦女性に類する時は、之を「アンドロギニー」Androgynie といふ、即ち男子でありながら、皮下脂肪に富み、筋骨の發育弱く、皮膚纖弱であり、その歩行、狀態、音聲の調子等に至るまで女子に類似してゐる。

男子に於ける同性愛は主として鷄姦によつてその性慾を滿足するものである。之には原動的 aktiv と被動的 passiv との二種がある。前記の第一及び第二種の同性愛では原動的鷄姦を行ひ第二及び第三種の同性愛では被動的鷄姦を行ふものである。所謂男娼 Männliche Prostituirten には第三種の同性愛者が尠く無い。我國の江戸時代に於て『陰間』『色子』等と稱せられた男娼の多くは、その身心共に女性的型式を帶び、その服裝も女子に於けるが如く、同性愛を好む男子の需要に應じて醜業を營んだものである。

以上は先天性素質に因る同性愛に就いて述べたものであるが、後天性のものに至つてはその原因種々であつて、或は荒淫漁色の結果、異性の肉に飽いて新奇の快を貪ぼらんがため、或は異性に接近する機會なきがため、或は友情親密にして苦樂を共にせんがために同性愛に傾くので、前述の先天性のものと全くその本性を異にしたものである。（以下次號）

本誌次號豫告

▽「マソヒスムス」に關する說話
▽墮胎專門
▽貴婦人墮落の原因に關する心理的考察
▽男嫌ひ
▽變生男女の話
▽黴毒に傳染せしショーペンハウエル
▽變態性慾要說（二）

本誌定價表

壹部（一ヶ月分）	金參拾五錢	稅壹錢
六部（半ヶ年分）	金貳圓拾錢	稅共
拾貳部（一ヶ年分）	金四圓拾錢	稅共

▣注意
□御註文は總て前金御拂込のこと
□なるべく振替にて御送金のこと
□特別號は定價超過分申受のこと

本誌廣告料

表紙二、三、四面	金五拾圓
普通面一頁	金參拾五圓

大正十一年四月廿日印刷
大正十一年五月一日發行　第一卷第一號

編輯發行者　東京市外北品川御殿山七一八　中村蓊
印刷者　東京市芝區南佐久間町二ノ一四　渡邊素一
印刷所　東京市芝區南佐久間町二ノ一四　內外印刷合資會社
發行所　東京市外北品川御殿山七一八　日本精神醫學會
〔電話高輪一〇四三番〕
〔振替東京三一一七七番〕

大賣捌（東京堂、東海堂、北隆館、參文社、上田屋、至誠堂、盛春堂、共盛社、）

主幹 文學士 中村古峡

【大正六年十月創刊 毎月一回一日發行】

月刊雑誌 變態心理

定價 一部 金五拾錢税壹錢
半年分税共 金參圓
一年分税共 金五圓八拾錢

△本誌は日本唯一の變態心理學研究雑誌にして、每號諸種の靈的現象を始め天才、偉人、精神病者、不良少年、犯罪者等の心理に關する有益にして興味深き諸專門學者の研究を發表す。

△心靈學、變態心理、精神病理、犯罪心理、群衆心理、精神療法、催眠術、變態性慾等の智識に通曉せんと欲する者は、是非とも本誌を讀まざるべからず。

△特に敎育家、宗敎家、法曹家、醫士、文學者、家庭父兄諸君の必讀を薦む何となれば、是等の人々は其の任務上、最も深く人間の變態心理に精通し置くべき必要あれば也。

變態心理合本

第一卷 定價壹圓八拾錢 税十二錢
第二卷 定價壹圓六拾錢 税同前
第四卷 定價貳圓貳拾錢 税同前
第五卷 定價貳圓五拾錢 税同前
第六卷 定價參圓五拾錢 税同前

東京品川御殿山 日本精神醫學會 電話高輪一〇四三番 振替東京三一一七七

變態心理合本 第壹卷

裝釘美 六〇〇頁
改正定價金壹圓八十錢
送料不要

内容一斑

論説——支那に於ける靈的現象（幸田文學博士）正態と變態（上野文學士）迷信と妄想（一—五）（森田醫學士）觀念は生物也（一—二）（福來文學博士）所謂心靈現象の研究法に對する吾人の希望（石川醫學博士）意識障碍と犯罪（杉江醫學士）干支と易（遠藤文學博士）印度神變術（武田早大教授）其他

研究——頭蓋骨の興味（挿畫十二葉入）（菅原文學士）フロイド精神分析法の起源（久保文學士）習慣性犯罪者に就いて（佐藤政治）二重人格の少年（一—二）（中村文學士）自働現象の話（一—二）（小熊文學士）錯覺就中主觀的錯覺に就て（永井醫學博士）迷信としての犯罪者の脫獄（寺田文學士）心の繪圖（挿畫十九葉入）（菅原文學士）混亂せる夢の性質（小熊文學士）禪の悟りに就て（入谷文學士）アドラーの補償說と神經病（久保文學士）其他

雜錄——酩酊者の變態心理（佐多千葉醫學士）植物の心理（松島理學士）輪廻轉生に關する傳說（一—二）（三枝十一）植物の感情（松島理學士）最近の歐米催眠術界（小熊文學士）變態心理學上より見たるオルレアンの少女（佐多千葉醫學士）最近歐米の精神治療學界（小熊文學士）少年犯罪者の殖民地（ドストエフスキ）周圍の變化と動物の體色（挿畫二葉入）（谷津博士）人の心を狂はせる植物（松島理學士）兒童の變態心理に就て（高島平三郎）潛在意識（自署入）（シャストリ）支那人の特性に就て（堀田延千代）相貌に由る性格鑑別法（一—二）（小西學士）生贄と人身御供の傳說（三枝十一）敎育心理實驗（村上文學士）錯誤より出でたる悲劇（中村文學士）其他

人間的證券——汽車只乘の巧い少年（宇佐美學士）歸國すると惡心の出る男（宇佐美學士）彼等の一家（一—二）（神野牧師）二狂人（中村文學士）余の見たる鬼權（宮島資夫）余の偽らざる告白（流々生）小笠原に送られた少年（宇佐美學士）其他

其外毎號掲載されたるもの——變態心理日誌、近代の珍書圖書考料、最近の新聞雜誌拔萃等

東京品川御殿山

日本精神醫學會

振替東京三一七一七番
電話高輪一〇四三番

變態心理合本 第四卷

裝釘美 六三〇頁
定價 金貳圓貳拾錢
送料不要

內容一斑

論說――大本教の迷信を論ず（中村主幹）過激思想發生の原因（淸水慶大敎授）大本敎徒の心理解剖（白楊生）

講話――神祕の現象に就いて（森田醫學士）夢の本態、夢の叙述、夢と關係ある諸種の現象（每號連載）（森川醫學士）潜識とは何ぞ（每號連載）（小熊文學士）植物の變態心理（松島理學士）化物屋敷の研究と實例（連載）（大川定次郞）少年犯罪者の研究（山崎法學士）ルイ朝時代の愛史と生活（菅原文學士）在外朝鮮人の民族的發達（菊池長風）

研究――賣笑婦の生立と地方的風俗（北野博美）夜を世界とする女（連載）（向井章）代表的性格不良の犯罪者（刈屋哲公）死刑因の懺悔（刈屋哲公）靈魂の座所に關する東西兩洋人の思想（高峰醫學士）社頭より觀たる迷信（渡邊哲州）

紹介――變態心理學の研究範圍（ウイリアム●マクドウゴル）所謂心靈療法の基礎（安東禾村）「酒と女と歌」（高山松濤）

雜錄――盆の牡丹餅中まで米だ（大井二九郞）巧手の犯罪と性的衝動（ヒロミ生）探偵畫を眺めつゝ（ヒロミ生）婦人解放論と男性の惱み（ヒロミ生）姦婦殺しの話（連載）（ヒロミ生）A君の話（ヒロミ生）怪しき女の後を追うて（影山靜夫）小說中の女（影山靜夫）眞夜中のロハ臺（影山靜夫）魔醉劑に罹つた時（杉村浩）催眠術應用に由る逃亡者の追跡（菅谷宿娟）未亡人の心理、一、現實界を離れて（Y夫人）二、眼覺めたる生活（H夫人）三、過ぎし日の夢を續けて（T夫人）十五の假名を使つた犯人（川崎法學士）一婦人の告白（山百合）宗敎性妄想患者の一例（中平田良一）

人間的證券――西宮の殺人少年（向井章）自殺者の心理（西巢治）亡き友の告白から（久里島新一）一狂女、中村文學士）花江ちやん（中村文學士）男性化せる女（筑紫二郞）旅役者の手記（北野博美）

雜纂――質疑應答（小熊文學士）屍き違へたる神祕主義（石上敬治）名競の糸に就いて（のぶひさ）太古と近代の舞踊（エテル●ウルリン）日蓮宗の國難經（一法華宗徒）

最近の學說――現代學界の名家の卓說を採錄臤列したり。

其他――現代の縮圖 讀者欄、詩歌等趣味津々たる記事を滿載しあり。

東京品川御殿山
日本精神醫學會
振替東京三一一七七番
電話高輪一〇四三番

變態心理合本第五卷

裝釘美六五〇頁
定價金貳圓五拾錢
送料十二錢

內容一斑

講話——不死論（富士川醫文學博士）現代社會の病的組織（生田文學士）平安明時代の戀愛生活（青木文學士）狂氣とは何ぞ（中村文學士）生物學上より見たる死（永井醫學博士）夢と迷信（森田醫學士）賣淫の起源に關する二三の考察（北野博美）アイヌの生活（金田一文學士）婦人の犯罪（勝水敎誨師）人類の性慾生活と賣淫の發生（北野博美）異常生活（富士川醫文學博士）アイヌの信仰と傳説（金田一文學士）賣淫の發生と社會的宗敎的關係（北野博美）人種改良學と婚姻法（穗積法學博士）苦痛の解剖（後藤文學士）どんな人が自殺するか（森田醫學士）早熟兒童に就いて（久保文學士）

研究——天才研究ニイチエの天才觀（連載）（生田文學士）□犯罪研究竊盜と其の職業觀、殺人の公認、惡に對する虛榮（連載）（寺田文學士）藝術研究新エバと新アダム（菅原文學士）□狂人研究狂人の戀、上奏者S君、彼の入院前後、花骨牌を撒いた男の話（連載）（中村文學士）□變態性慾研究變態性慾の分類、性的暴行の一例、正常より異常へ、性慾と闘爭、ピグマリオニスト、悲慘な夫婦生活（連載）（北野博美）□實社會研究木賃宿の人々、駈落者と歌本賣り、浮浪者の一日、政治運動屋の心理、活動寫眞を見る人（連載）（影山靜夫）

論說——生物の電氣現象中牟田良一）心理學上より見たる同盟罷業（下澤瑞世）神隱しに會つた子供（連載）（中村文學士）賣笑婦の生活（北野博美）賣笑婦生活と其の環境（北野博美）

紹介——超常心理と下意識（ウイリアム・マクドウゴル）宗敎的催眠現象（ハヴエロツク・エリス）

雜錄——婦人潮家出娘の告白（TCK女史）女學生と先生（TCK女史）或る妻の手記より（つゆ香）結婚と性の生活（みなみ）□文藝欄科學と藝術の提携（野の人）創作に扱はれたる異常性格（信一生）讀んだまゝ感じたまゝ（野の人）人間生活の種々相（信一生）□人間的證券疑問の囚人（KK生）狐憑になるまで（守山退耕）賭博病（向井章）支那浪人と稱する男（若月羊之助）□不思議な現象夢中精神感應の實例（戸館康一郎）狐に化かされた實例（某氏）木が唸つた話（江森清松）北海道夕張の幽靈問答（中村淸）

雜纂——乳母の言葉（ヒロミ生）旅の長野より（KY生）平凡人の通信（KY生）大戰後の兩性問題、喫煙室（名なし草）

創作——見えない人々（狂人劇）（アンドレ・ド・ロルド）憑かれた人（短篇小說）（山上晃一郎）斯る人々（長篇小說）（每號連載）（沖野岩三郎）

最近の學說——諸大家の學說を採錄網羅したれば、現代學界の大勢を窺ふに足る。

現代の縮圖——社會の表裏に於ける一切の出來事に綜合的批判を加へ、現代の人間生活の趨勢が那邊にあるかを知らしむる本誌獨特の記事なり。

其他——編輯の後に、讀者欄等、悉く本誌の立場を明かにし、趣味津々たる記事を以て滿されあり。

東京品川御殿山
日本精神醫學會
振替東京一一七七番
電話高輪二〇四三番

變態心理合本 第六卷

總布裝七六〇頁
定價金參圓五拾錢
送料不要

内容一斑

論説——性格の種々（今村醫學博士）創作の一心理（小熊文學士）ヒステリーの話（森田醫學士）勞働と精神病（高峰醫學士）催眠學理一斑（中村文學士）催眠術治療の價値（森田醫學士）催眠術に關する法律問題（山崎法學士）ツボアの擬證說得法（石川醫學博士）病的催眠現象（中村文學士）氣質と催眠現象（清水研史）退縮行爲に關する研究（田中香涯）其他

研究——賣笑婦の心理研究（北野博美）狂人研究（ＨＢＫ）變態性慾研究（北野博美）實社會研究（岩崎六郎）監獄雜感（勝水淳行）月經と婦人（向井實）監獄部屋（岩崎六郎）唯物思想に誤られたる死刑囚（勝水淳行）宗教雜話（渠信次郎）其他

紹介——心靈現象研究の意義（ベルグソン）意識の分裂（ジャストロウ）催眠暗示の有效なる病症（ゲリツシ）精神分析法解說（中村文學士）

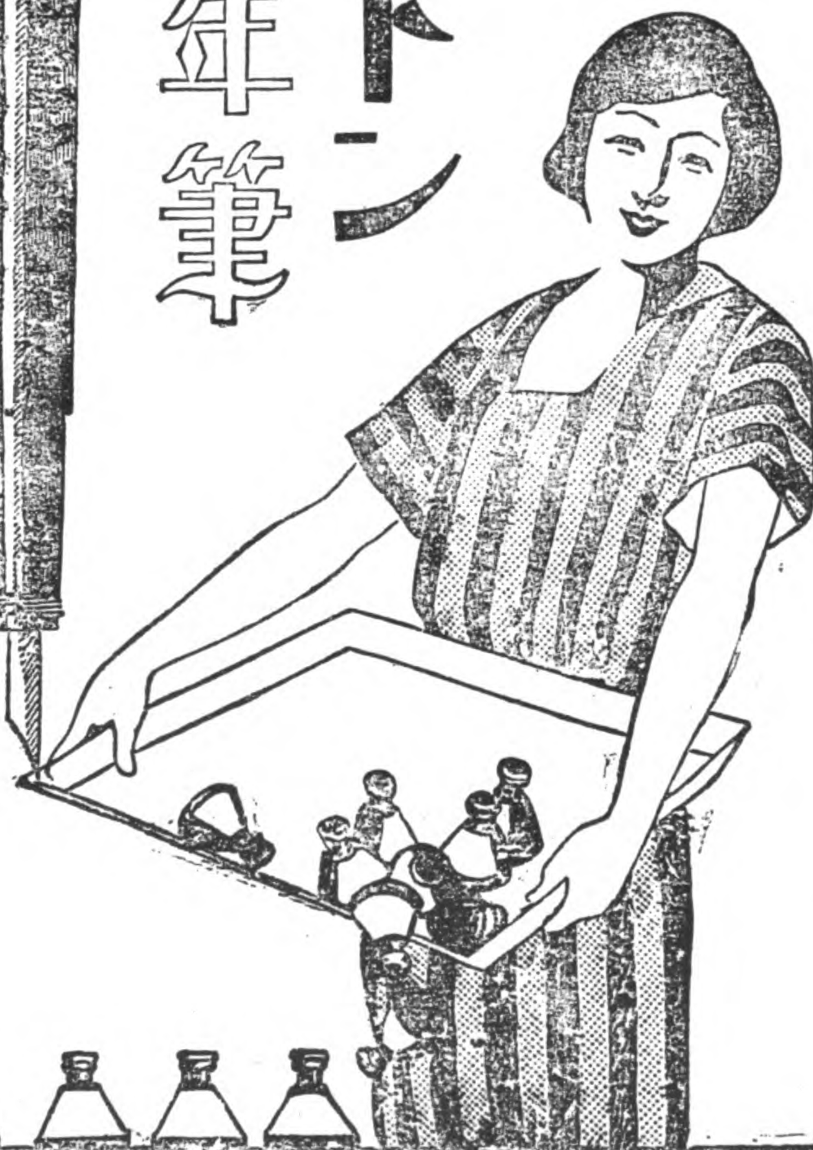
迷信研究——偏執病者の思想（富士川醫文博士）正信か迷信か（高島米峰）軟心派と硬心派（川合貞一）逆步的文明教の二要素（井上文學博士）憂ふべき病的思想（磯野資洋）宗教の眞生命（覺法學博士）眞理は最後の勝利者也（野上文學博士）大本教に就いて（姉崎文學博士）宗教の起源と精神病（精醫學博士）安んぜざる傾向（杉村楚人冠）其他

迷信解剖——太靈道の靈子術解剖（山村イチ子）江間式氣合術の正體（平田元三郎）大阪の精神療法界（笑康醉人）所謂靈界を見下して（三好秀太郎）太靈道田中守平に與ふ（山村イチ子）余が綾部生活の二年（宮飼陶羊）大本教に欺かれたる告白（淺羽生）出口王仁さんと僕（高野正明）大正日々新聞を笑ふ（眞眼生）其他

其他——人間的證券、最近の學說、現代の縮圖、雜錄數十項、何れも趣味津々たる記事に滿てり。

東京品川御殿山
日本精神醫學會
振替東京三一一七七番
電話高輪一〇四三番

變態性慾第壹卷第壹號
大正十一年四月廿六日第三種郵便物認可
大正十一年五月一日發行(每月一回一日發行)
定價金參拾五錢



大正十一年四月廿六日第三種郵便物認可
大正十一年六月一日發行(毎月一回一日發行)

性之問題研究の最高級雜誌

變態性慾

前大阪醫大病理學敎授 田中香涯氏執筆

六月號

目次

東京 日本精神醫學會 發行

滋強飲料

カルピス



カルピスの一杯に
初戀の味がある

疲勞の後の一杯
浴後の一杯
散策の後の一杯
病床の一杯
醉ざめの一杯

小壜(八合分)	八十五錢
大壜(一升八合分)	一圓六十錢
德用壜(三升分)	四月より發賣

平和博にカルピス喫店あり
カルピス菓子付一杯金十錢
第一會場染織館に近く文化村の郊外

◆販賣所 全國酒店・食料品店・藥店
◆發賣元 日本橋際 國分商店
◆製造元 ラクトー株式會社

哲學的冥想を加味したる新心理觀察!!

文學士 寺田精一先生新著

惑溺と禁慾

（精巧寫眞版三十餘枚入）

總紙數約五〇〇頁

定價金貳圓八拾錢

送料金拾貳錢

——（目次一斑）——

東京品川御殿山

日本精神醫學會

振替東京三一一七七
電話高輪一〇四三番

□慈恵院醫專教授
□精神病科專攻
醫學士 森田正馬先生新著

神經質及神經衰弱の療法

四六版總布裝函入美本

總紙數五百五十頁
定價貳圓九拾錢
送料拾貳錢
滿鮮臺支・參拾錢

好評嘖々

精神醫學の最高權威

本書は著者が過去廿年間の眞摯なる研究と實驗とに基き神經質並に神經衰弱に對する在來の學説と治療法とを根柢より覆へしたる新著にして、其の獨創の見解に富める事と其の治癒實例の豐多なる事とは、此種著作中恐らく本書の右に出づるものなからん。醫士は以て自家療法の參考に資すべく、病者は其の自衛上好箇の指導者を得たる思ひあるべく、又一般人士は以て絶好の精神修養書となすべし。敢て大方諸士の一讀を薦む。

□發行所

東京品川御殿山
振替東京三一一七七

日本精神醫學會

電話高輪一〇四三番

文學士 中村古峽氏著

變態心理の研究

四六版布裝頗美本
紙數四百八十頁
定價金貳圓五拾錢
送料金十二錢

忽ち七版

本書は其の內容の種類に依つて、上中下の三篇に分たる。——

□上篇……には催眠現象・潛在精神・二重人格・透視と念寫・幽靈の出現。狐狸の憑依等、諸種の變態心理現象を一般の讀者にも理解され得るやう極めて丁寧親切に說明す。

□中篇……には著者多年の經驗中から、精神治療に關する實例數種を詳細に報告したるものにて、就中二重人格者に對する諸種の施術法幷に夢の新實驗等は全く著者の創意に屬す。

□下篇……には精神病者の心理描寫二篇幷に狂人の興味ある手記繪畫二十餘種を收む。

著者の文章は世既に定評あり、讀者は小說を讀むが如き興味のうちに、此の新科學の新智識に通曉することを得べし。

□取次所 東京市外品川御殿山 振替東京三一一七七

日本精神醫學會



マソヒスムスに關する說話

（一）

『戀するものは奴隷なり、囚人なり、義勇的使僕なり。』 Liebende sind gewöhnlich Sklaven, Gefangene, freiwillige Diener. とあるやうに、戀愛には異性に屈し異性に媚び、その歡心を求むる傾向のあるのが普通であるが併し這般の傾向の非常に顯著となつたが上にも、異性の膝下に跪伏して全然その囚虜とならんことを欲し、甚しきは異性より罵詈嘲弄せられても、また毆打鞭韃せられても、また刄物で切りつけられても、少しもそれを苦痛とも思はず、却つて之を甘受することによつて大なる性的愉快を感じ、そのため故意に種々の手段を弄して異性の虐待凌辱を受けんとするが如きものに至つては明かに病的であつて、有名なる精神病學者クラフト・エビングは、此の如き性慾倒錯に「マソヒスムス」Masochismus なる名稱を與へ

た。それは墺國の文學者レオポルド・フォン・ザッヘル・マゾッホ Leopold von Sacher-Masoch の奇異なる性行、及び其の創作の內容に因んで斯く命名したのである。

私は、玆に「マゾヒスムス」に關する說話を叙說するに當り、先づ順序として此の淫慾倒錯症の名稱の源となつた、墺國の文士ザッヘル・マゾッホ其人の性行閱歷に就いて、その梗概を語らねばならぬ。

(二)

ザッヘル・マゾッホは、千八百三十六年、ガリチアのレムベルグに生れ、その血管內には、西班牙、日耳曼及び露西亞人の血液が流れてゐた。彼の祖先は、ドン・マチアス・ザッヘルと云へる西班牙の貴族であつて、十六世紀の頃、カール第五世の下に戰つたことがある。彼れの父はレムベルグの警察長で、小露西亞の貴婦人シャルロッテ・フォン・マゾッホと結婚し、十一年後に始めて彼を生んだのである。

彼は生來甚だ虛弱で、到底生長することが覺束ないとまで疑はれてゐた程であつたが、母が故鄉の小露西亞から頑健な乳母を雇ひ入れてから、稍强壯となつた。彼は此の乳母から生命と健康とを得たのみならず、また彼の精神をも得たのである。彼は乳母より陰鬱なスラブのお伽噺と傳

說とを敎へられ、小露に對する愛情を注ぎ込まれた。元來彼の血統から見ても、彼は半スラブ人で、東西兩洋の人種の血の混合した田舍に住まつてゐた。彼の十二歲の時、即ち千八百四十八年血腥い革命の起つた爲め、家族一同プラーグに轉住することゝなり、此地に於て彼は始めて獨逸語を習ひ、之を操ることが頗る達者となつた。

彼は既に小兒時代に於て、特に殘酷なる記事や死刑の繪畫を見るを好み、また殉死に關する口碑傳說の記してある書物を愛讀した。思春期に達した頃には、いつも彼を苦しめる殘酷なる一婦人の姿を夢に見た。元來ガリチアの婦人は、その夫を支配して自身の奴僕同樣たらしめるが如き風習がある。彼は十歲の時、始めて此の有樣を實地に目擊した。彼の血緣に當る一婦人に某伯爵夫人があつて、其の纖手に一家の全權を握り、夫の伯爵を頤使してゐたが、此の狀景はそれを親しく目擊した彼に對して、終生忘るゝこと能はざる印象となつたのである。

伯爵夫人は、顏こそ美しいが、不貞腐れのお轉婆であつた。然るにマゾッホ少年は、夫人の美容と、その纏へる高價の毛皮とに憧れて、夫人を讃美してゐた。夫人も其の從順に服從するのを喜んで、彼に化粧室に入るのを許したことも屢々であつた。或日、彼は夫人の前に跪いて、其の穿ける上草履を脫がした折、いきなり夫人の足に接吻した。夫人は微笑しながら、其の足で彼の

顏を輕く銜いた。彼はそれを甚しく嬉しく且つ幸福に感じた。

一日、彼は其の姉妹と共に隱れん坊の遊戲を爲し、夫人の寢室內に忍び込んで、壁に懸けてある衣服の後に身を隱した。處がその刹那に、伯爵夫人がその情夫を伴うて寢室內に這入つて來た彼は依然身を隱しながら其の樣子を凝視してゐると、夫人はソーファアーの上に身を橫へて情夫と痴々繰り初めた。すると間もなく主人の伯爵が二人の男を從へ、非常な勢で室內に飛び込んだ。伯爵が、夫人とその情夫とのいづれか一方へ身を振り向けんとする間もなく、夫人は突然ソーファアーから飛び上つて拳を振り上げ、主人の橫面をしたゝかに毆りつけた。伯爵の顏からは、鮮血がポタリ〳〵と流れ落ちた。そのうちに夫人は一條の鞭を手に取つて、主人を始めその連れの男を室內より追ひ出した。情夫も其の權幕に恐れて遁げ出した刹那、壁に懸つてある衣服が落ちたので、今まで其の後に隱れてゐたマゾッホの全身が不意に暴露した。夫人は彼を一目見るなり、彼れを牀上に投げつけ、兩膝で彼の肩を固く押へて、無慈悲にも散々毆打した。彼は非常な痛みを感じたが、併し之と同時に大なる愉快をおぼえた。

夫人の暴行のなほ止まぬうちに、伯爵は歸つて來た。少しも怒つたやうな顏もせず、却つて悄然として、いかにも臆せるが如くに夫人の前に跪き、どうか宥してくれと哀願した。その間に彼

は遁げ出したが、なほ振りかへつて夫人が散々伯爵に劍つくを喰はせてゐる有様を見た。彼は室外に出たものゝ、兩人の樣子が知りたくて堪らぬので、足音を忍ばせながら密かに戸扉に身を寄せ、耳をすまして室内の模樣を伺つて見ると、鞭のピシ〳〵と鳴る音、伯爵の唸き聲、夫人の伯爵を打つ音とが相和して手に取るが如くに聞えた。

上記の光景は、元來神經過敏な彼れの頭腦に深い印象を留め、彼の感情生活に著しい影響を與へた。彼の一生の間、彼に取つて婦人が愛の對象たると共に憎惡の對象となり、美と殘酷との兩性を具有する者のやうに映じたのは、少年時代に親しく目擊した上記の光景に深く心を動かしたからで、其の處女作として名高い小說 Der Emissar の女主人公は、實に伯爵夫人をモデルにしたものである。美しい毛皮と鞭とを持つた美人に對する愛着の情は、常に彼の心より離れたこと無く、屢々之を夢に見、また彼の空想と著作とを支配した。

なほ此外に、彼れの腦裡に固着して永くその思想に影響を及ぼした女性は、彼の十三歲の時、即ち千八百四十八年の革命戰に際し、皮革製の帶にピストルを挾んで、保砦に彼を助けた妙齡の勇婦であつた。

（三）

マゾッホの父は演劇が好きで、自宅内に舞臺を設け、ゲーテーや、ゴーゴルの作を上演した。彼の文藝趣味は既に幼年時代から父の感化を受けて培養せられたことが多い。彼はプラーグ及びグラーツ大學に入つて、十九歳で卒業し、獨逸史の講師となつてグラーツ大學に教鞭を執る身となつたが、文學に多大の趣味を有し、遂に之に沒頭するやうになつたので、軈て大學の職を辭し專心文藝の創作に從事することゝなつた。千八百六十六年には伊太利戰役に從ひ、ソルフエリの戰に於て勇敢に鬪つたので、墺國元帥より感狀を賜つた。しかし彼は軍隊を退いてから小說の著作に身を委して、漸次其の文名を世に知らるゝに至つた。

彼は其の間にいろ〳〵の女に戀をして、失望したり、悲慘な目に逢つたりしたことが多く、自身の經驗を土臺にして、"Die geschiedene Frau, Passionsgeschichte eines Idealisten" といへる創作を公にしたこともあつた。彼の小說の女主人公といへば、意地が強く、女權を振りまわして、男を壓服凌辱するのを愉快とする女性である。處が、グラーツに彼の小說を愛讀する一人の女があつた。ローラといつて手袋縫ひを職としてゐる賤しい身分であるが、文藝趣味を有する怜悧な女で、彼の小說の女主人公ワンダー・フォン・ヂュナエフの名を假りて彼に手紙を贈り、彼の理想とする女性の性格を眞似て其の意に投合するやうに持ちかけた。そこで彼れは當時婚約した一處

女のあつたにも拘はらず、ローラと會見したい氣になつた。彼は手紙の文句から想像して乾度貴婦人だらうと信じたからである。自身より身分の高い、そして勝氣な女性に身をまかせて、其の言ひなり次第になり、頤の先きで使はれるのが、彼に取つては何よりも愉快である。ローラは彼と會見した後も、深くその身分を包み、貴婦人らしい態度を見せてゐたので、彼の戀情は愈々募り、婚約した一處女を振り捨てゝ、ローラと割りなき中となり、一子をも儲けたので、結婚式を擧げたのが千八百七十三年であつた。

然るに結婚後間もなく、二人の仲には秋風が吹き初めた。ローラは彼の性質が病的で、空想的で、働き甲斐のないことに氣がつき、また彼もローラが自分の夢想したやうな貴婦人で無いことを發見したので、兩人共非常に失望した。また、彼は結婚後其の病的性慾を赤裸々に暴露し、ローラに向つて鞭で自分を撻つて呉れと幾度も繰返して要求した。然しローラは之に應じない。そこで彼は下婢に鞭撻を命じて滿足を買ふやうになつたので、ローラは彼をして強いて下婢を解雇せしめた。こゝに於てか、彼は手をかへてローラに絶えず歡心を求め、媚を呈するやうになつたが、併し女の方では、それを馬鹿にして彼の氣に入るやうに勉めないので、家庭の狀態は益々不和と不愉快とを加へて來た。併し、どう説き伏せたものか、彼は遂にローラをして殆ど毎日のや

うに自分を鞭で毆打せしむるやうに仕向けさせた。然るにこれだけでは滿足が出來ないので、今度は更に數歩を進めて、ローラに向つて思ひ切り不貞操の眞似をして吳れと命じ、且つ彼れ自ら筆を執つて『妙齡の一美人、好男子の紳士と交際を求む』といふ廣告を新聞に出し、ローラに姦通をさせた。こゝに於てか、ローラはいゝ氣になつて、散々醜態を演じ、財產を浪費し、果ては、ローゼンタールといへる新聞記者と手に手を取つて巴里に駈落をなし、彼との緣を切つて了つた。

彼の第二の妻は、秘書及び翻譯者として雇ひ入れたフルダー・マイスターといへる處女であつた。ローラとは打つて變つた溫順貞淑な女であり、また彼も前妻のために非常な憂目を見たので第二の妻には心の底から愛情を捧げ、その仲に二人の小供をも儲けて、極めて睦まじく世を送るやうになつた。されば、彼の晩年は比較的平和で、時々前妻のローラから、侮辱、脅迫の手紙が舞込むだけであつた。また彼は其の父のしたやうに、自宅に舞臺を設けて屢々演劇を試み、妻に主人公の役目をあてがつて面白く樂んだ。しかし彼の健康は其の頃より衰へ初め、千八百九十四年ナウハイムに轉地療養することになつたが、病狀は次第に增惡して、千八百九十六年の三月遂に永眠した。

（註）ザッヘル・マソッホの性行は、彼の同情者とも云ふべきシユリヒテグロルの書「ザッヘル・マソッホとマソヒスムス」Schlichtegroll, Sacher-Masoch und Masochismus. 1901, 及び彼の前妻ローラ（假名ワンダ）の作「私の生活の懺悔」Wanda, Meine Lebensbeichte に詳記せられてある。

以上はザッヘル・マソッホの略傳であるが、其の奇異なる性行と創作の內容とは、クラフト・エビングをして異性　奴隷囚虜となり、其の虐待侮辱を受くるを快とする病的性慾に「マソヒスムス」なる名稱を附せしめた。併し這般の性慾は固よりマソッホだけで無く、夙に往古より多くの人々に認めらるゝ處で、史乘、隨筆及び小說の中には之に關する記事や思想を看出すことも尠く無い。

（四）

希臘の大哲學者アリストテレースが「マソヒスト」であつたことは、此の哲學者が四つ這ひになり、その上に一の鞭を手にした女の跨つてゐる繪畫のあるに徵しても明かである。(Aristoteles als Masochist, Geschlecht und Gesellschaft) また、オーウエーの作 Venice Preserved に於けるアントニオは著しい「マソヒスト」の傾向を有し、鐵血宰相ビルマルクの如き人でさへ、その艶書中には僅かに「マソヒスムス」の色彩を帶びた文句を書いた。

中世紀時代に於ける騎士詩人の大部分はいづれも、「マソヒスト」と認むべき者であつた。彼等

の戀の對手は封建諸侯の夫人であつて、奴隷的態度を以て其の膝下に屈從し、其の愛を得るが爲めには生命をも投げ出した。グイレム・フオン・サンクト・ディディルは、其の上衣に夫人の房々とした髪の觸れたゞけでも、彼女に一身を捧げて悔いなかつた。フリードリッヒ・フオン・アウヘルフルトは、その愛する夫人のために、甲冑なしに他の騎士と仕合ひをして重傷を負つた。ウルリッヒ・フオン・リヒテンスタインの如きは、夫人の浴した水を湯にして飲んだ許りでなく、其の氣に入るがためには一本の指をも切り落し、また唇に手術を施して其の形を變へた。

佛國大革命の導火となつた民約論の著者ルッソーも「マゾヒスト」であつたことは、其の名著『懺悔錄』Confessions の中にある少年時代の一記事に徵して明かである。人の知るが如く、この『懺悔錄』なる著作は、ルッソー自身が其の閱歷を赤裸々に叙述した露骨の自傳であるが、彼が八歲の幼童の時、牧師ランベルシエーの家に在つて、その娘なる三十歲の處女に鞭韃せられ、快感を覺えたと云ふ一叙事は、疑ひもなく、ルッソーの變態性慾を物語るものである。

左に此の一節を譯載しよう。

「牧師ランベルシエーの令孃は、私を可愛がること、さながら慈母の如くであつたが、併しまた私に懲罰を加へることもあり、甚しい時には私を鞭笞することもあつた。最初鞭を以て私を嚇

かした時には、彼女が何の狀をなすやも知らなかつたので、私は非常に恐れたが、一たび鞭笞せられてからは、私は之によつて受くる苦痛が豫想に反して甚しくないのを喜んだ。加之、鞭笞を受ける每に、令孃の無情を怨むの心が起らないのみか、却つて之を愛慕する情が一層增して來た。それ故、私は此の刑罰を受けるのが何よりの喜びで、故意に惡戲をなした。令孃の鞭笞によつて受ける所の疼痛と羞恥とは、私に一種の快感を與へるからである。(中略)當時八歲であつた私に與へた三十歲なる處女の鞭笞は、遂に私のために特殊の性情を定めるやうな意外の結果を齎らした。私は甞て感覺した鞭笞の疼痛に基く快感以外には、他に何等の快感を求めようとも欲しなかつた。私は久しく此の快感の慾望のために困しめられ、美しい處女の姿を見る每に、心中にラムベルシエーの令孃を描いて、斷えず私を鞭笞せしめたのであつた。』

是に由つて之を觀れば、ルッソーの「マゾヒスト」たることは明かである。それから彼がチューランに滯在した折、往來の婦人や下婢に向つて自己の陰部を暴露し、他より受くる所の侮辱及び羞恥の感によつて、同じく快感を覺えたと云ふ一節も、また彼の「マゾヒスト」たることを自證するものである。

「私はその旺盛なる性慾を遂行することが出來ないので、奇異なる方法を以て益々之を刺戟した

私は眞つ暗な並木の陰或は僻陬の場處を選んで、其處に佇立し、遙に行路の婦人を望みつゝ、いやらしい滑稽なる態度を示した。實に馬鹿げ切つてゐるが、併し私の快樂は殆ど名狀することが出來ない程である。（中略）私は一日、庭の背後にある暗い處に立つてゐた。すると、其の家の下女が水を汲むべく井戶に近寄つて來た。私はそれを窺つて、猥褻と言はんよりも寧ろ滑稽な喜劇を演じて見せた。彼等の中には見て見ぬ振りをする者もあれば、笑ふ者もあり、また侮辱を受けたとて大聲で私を罵るものもあつた。私は直ぐ身を挺して暗所に向つて遁げ去つた。』されば、ルッソーの陰部暴露 Exhibition は、畢竟その「マソヒスト」なるがためで、即ち『いやらしい滑稽な態度』を見せて、異性から笑はれ罵られるのが愉快であつたからである。

（五）

前記ルッソーの如くに他から鞭撻せられて性的快感を覺ゆる一種の「マソヒスムス」をば、他動的被打症 Passive Flagellation と云ふが、之に關する奇異なる事實として第一に擧ぐべきものは十三世紀及び十五世紀時代に行はれた「カトリック」敎徒の苦行である。人の知るが如く、「カトリック」敎は肉を卑しみ靈を尊び、中世紀時代には、難行苦行をなして肉體を苦しめ、之によつて現世の慾望を脫すべく敎徒に勸說し、且つ盛んに之を實行せしめたが、此の苦行の中には身體を

毆打鞭撻するものもあつた。然るに何ぞ圖らん、脫俗の方便として行はれた苦行が、却つて敎徒の性慾を挑發興奮せしむるが如き反對の惡結果を招致することゝなつた。之に就いて最も著しい實例と稱すべきは、比丘尼マリア・マグダレナー・パッチー及びエリサベット・ゲントンの兩女が、他より打たるゝ毎に性慾の興奮の絕頂に達し、淫猥極れる狂態を恣にしたことである。此の事實はクラフト・エビングの名著『プシコパチア・セクスアーリス』Psychopathia sexualis 中にも擧げてある。其の記する處に依ると、パッチー尼は尼院の長をして其の兩手を縛せしめ、臀部を露はして杖で毆打せしむる苦行をなすに至るや、忽ち情熱火の如く燃え上り、聲を張り上げて絕叫した。『よし、よし、この火焰は我身を焚きつくさんとす、願くば之を煽ること莫れ、我れは斯る死を望ます、快味の多きに過ぐればなり』と。かくして彼女の意識は恍惚として、淫猥なる幻覺に襲はれ、殆ど破戒せんばかりであつた。クラフト・エビングは婉曲にして、しかも莊重なる文字を以て其の狀を次の如くに記した。

So ging es immer weiter. Der Geist der Unreinheit aber blies ihr die wollüstigsten und üppigsten Phantasien ein, sodass sie mehrmals nahe daran war, ihre Keuschheit zu verlieren.

ゲントン尼も毆打を受ける毎に、絕大の快を感じて、神と交る幻像を見、しきりに愛！愛！を

連叫した。

抑々身體の鞭韃が性慾を發揚興奮せしむることに就いては、夙に往古より人の知る處で、既に千六百三十九年にはマイボーム、千七百八十八年にはフランソア・ドッペーが醫學上より之を研究したことがある。また十六世紀時代に於て、英國にては性慾を刺戟發揚する手段としての鞭韃が汎く世に行はれ、倫敦の妓樓に於ては之を好む嫖客の求めに應じて、賣笑婦が韃を執つて其の客を打つ風習さへ行はれた。近世に於てもなほ鞭韃の風習が行はれ、しかも其の方法が巧妙精緻となつて、之を職業とする者さへ現はれたが、其中にも特に有名であつたのは、ゼアース・バークレー夫人で、此の女は鞭韃に用ゆる一裝置として、所謂『バークレーの馬』Berkley horse と云へるものを作製し、鞭韃を好む變態性慾者の愛用する處となつた。啻に英國ばかりでなく、他國就中、佛國に於ても、鞭韃の風習が盛んに行はれ、第一流の妓樓には之に要する裝置を備へつけたことがある。

鞭韃が性慾を發揚する手段として、汎く歐洲に行はるゝやうになつたのは、ォイレンブルグの說に依るに亞剌比亞の醫士によつて輸入せられたのが初めであると云つてゐる。亞剌比亞醫士の勸めによつて、女王レオノラ・フォン・マンツアが夫婦間の情交を濃厚ならしめんがために、其母

をして自身を鞭笞せしめたことは、同氏によつて記述せられた。併し波斯、及び露國の一地方に於ても、夫が其の妻を毆打して、益々愛情を深うする風習がある。

鞭韃を好むものには二種がある。一は性慾の沈衰せるがため之を刺戟發揚する方法として鞭韃せしむるもの、他は「マゾヒスト」で、異性の虐待凌辱を受ける表徵として鞭韃を要求するもので之によつて性的興奮と快樂とを覺えるのである。

（六）

近世に至つては「マゾヒスムス」を主材とする小說や詩作の世に出でたことも尠く無い。此種の小說は、多くは佛國より出でた。その中にもドオルランジユの創作 L'Homme a paasion には、シセツト侯爵の顯著なる「マゾヒスト」的行爲を深刻精細に描寫してある。侯がその愛婦の宅を訪ふと、小兒のやうに振舞ひ、小兒の衣服を裝ひ、人形を弄び、また愛婦を女教師に見立てゝ言葉を習ふ稽古をする。そして故意に不熟練不成績の所作をやつて愛婦に毆打せしめ、之に向つて哀を請ふのが何よりも愉快である、と云ふやうなことが叙述せられてある。その外、世に名ある此種の創作には、同じく佛國に於けるミルボーの手に成つた Le jardin des supplicesで あるが、なほこれ以外に Les callipyges, Jupes trousses, Mémoires d'une Danseuse 等の如き小說がある。

また「マゾヒスムス」の色彩顯著なる詩としては、ゲーテーの Lillys Park が著名であるが、近代に出たものには、ドロローザの詩 Le jardin des Supplice が名高いやうである。その他、ハイネ、ブラーチン等の詩人の作にも、此種の詩作が看出される。

吾國往古の小說及び詩歌には「マゾヒスムス」の情調の特に鮮明なるものを看出すことは出來ない。しかし近頃になつて、谷崎潤一郎氏の如き、性慾倒錯を主材とする特殊の小說家が現はれ、「幇間」「捨てられる迄」「饒太郎」等の如き「マゾヒスト」を主人公とした創作を見ることが出來るやうになつた。

貴婦人墮落の原因考察

茲に『貴婦人の墮落』といふのは、新聞の社會記事に屢々見ゆるが如く、貴婦人にして俳優狂ひをなし、或は自働車の運轉手と姦通し、或は多年冊づいた夫を振り棄てゝ、學生上りの男の許へ趨るとか云ふやうな性的行動を指すのであつて、私が茲に這般の事實に對して、聊か科學的考察を試みたいのは、貴婦人の墮落事件が、同族或はより以上の男子との姦通の下に行はれずして却つて自身より位置の低い、財力に乏しい、年の若い男子との間に私通姦通の行はるゝことの多い理由を説明せんがためである。之に就いて、私は二種の方面より考察したい。一は變態性慾の方面から、一は心理的方面から。

變態性慾の中に、性的崇物症 Sexueller Fetischismus（吳博士は之を『節片淫亂症』と譯せられた）と云ふのがあつて、異性の容貌、姿態、人格、才能、趣味等に戀するのでは無く、その身體の一部分、例へば頭髮、眼、手足、乳房の如き、或は其の所有品、例へば手巾、靴、指輪、襯衣の如きものに憧憬し戀着するやうなものがあることは、周知の事實であるが、此樣な普通の性的

崇物症の外に、異民族の人相、肌色、體臭、文身、言語、服裝等に對して、好奇的戀着心を抱くが如き異樣の變態性慾がある。イワン・ブロッホは之に種族性崇物症 Rassenfetischismus といふ名稱を與へた。這般の事實は種族を異にする男女間に於て屢々認めらるゝ處で、歐米の男子が黒奴、印度、亞剌比亞、日本、支那等の有色人種の女子を好んだり、或はそれと反對に、是等有色人種の男子が歐米白人種の女子に戀着するが如きことの尠く無いことは公知の事實である。

十八世紀の時代に於て、既に巴里市には黒奴の女子の青樓があり、殊にナポレオンの埃及遠征後には、黒奴の男女が澤山巴里の都に流れ込んで、白人の男女と戀愛關係を結んだやうなこともあつた。人種的偏見の強い米國に於ても、種族性崇物症が多く行はれ、有色人種の年若い女性が奇妙にヤンキーの愛着心を惹起したり、また虚榮心の根強いアメリカ女、就中、シカゴの婦人の中にも、黒奴に戀するが如き者もある。また之と反對に、黒奴が白色婦人に愛情を抱いて強姦を企て、そのため屢々リンチ刑が行はれることもある。

此の如く異種族の間に、種族性崇物症の行はれるやうに、社會的地位を異にする男女間にもまた同樣の變態性慾が行はれるやうに想はれる。卑賤なる男子が高貴の婦人を戀ひ、高貴の女性が卑賤なる男子を愛するやうな事のあるのは、恰も有色人種の男子が歐米の婦人を戀ひ、歐米の婦

人が有色人種の男子を愛するのと其の揆を一にする現象と看做すべきもので、それは互ひに社會的地位を異にする對手の動作、言語、服装、粧飾等が愛情を喚起する要素とあるからであらう。私は此の如き一種の性情に對して、『地位性崇物症』Standfetischismus といふ名稱を下したいと思ふ。

畏友宮武外骨氏は、嘗て『男子には上淫を好む性情があつて、王侯の妃をも犯したいと思ふものであるが、吉原の遊廓では政略上この性情を利用して、遊女に上﨟風の粧飾をなさしめ、それに權威と見識とを持たせ、太夫様、此君さまと敬稱して、客よりも上座に坐せしめ、客に對して低頭の禮式をなさしめず、ハリと云ふ意地と、フリと云ふ一種の拒否權を有せしめる等、故らに尊大の態度を取らしめたのである』と說かれたことがある。(外骨氏著『賣笑異名集』附錄『賣春考』)さりながら、私の見る處を以てすれば、男子が『上淫』を好むといふ性情は、一般男子の通有性と認むべきもので無く、一部分の男子に過ぎなからうと思ふ。卑賤の身にして高貴の女性に戀着する者のあることは固より往々見る處で、昔の戀歌の中にも、『虹とだに、嘆きは立ちも上らなん、雲の上にもかくる思ひを』などゝ云つたやうな歌もあるが、併し上淫を好む性情は、前述の如く『地位性崇物症』とも稱すべき一種の變態性慾と看做す方が妥當であらう。

貴婦人が自働車の運轉手や、學生上りの男や、俳優の如き社會的地位の低い異性に戀着して、世に仇し浮名を流す者の中には、上淫を好む男子のあるのと同樣に、下淫を好む女子の地位性崇物症に基くことも尠くは無からうかと想はれる。金殿玉樓に起臥して榮華の夢に飽きても、其の單調窮屈なる貴族的生活は、自ら其の好奇心を自己より地位の低い者の生活に向け、その服裝、擧止、言語、應對等に注意を拂ふやうになつて、遂に一種の戀着心を惹起するに至るやうになるのは、決して有り得ない事で無い。

以上は性欲的方面からの考察であるが、轉じて心理的考察を試みると、元來愛なるものには、「愛する」と云ふ積極的のものと、「愛せられる」といふ消極的のものとの二種がある。積極的の愛は自己よりも劣れる者、弱き者に向つて注がれるのが普通であつて、體力に於ても、財力に於ても、また智力に於ても、優者强者なる男子が、弱者劣者なる婦人を愛するのは、詰り其の背後に同情、惻隱、憐憫の念の存するからである。されば女子は元來弱者劣者として男子から愛せらるゝ地位にあるもので、女子が積極的に男子を愛すると云ふやうなことは理屈に合はない。古人の言にも「女は己を愛する者のために容くる」とあるが如く、女子は己を愛する男子によつて慰藉愉快、滿足を感じ、その男子を戀ひ慕ふのである。されば此の見地から論ずれば、男子の愛は積

極的の愛であり、女子の愛は消極的の愛である。併し女子は自己よりも劣者弱者なる子供を生むことによつて、始めて積極的の愛情を發揮することが出來る譯である。

然るに、女子にして己を愛すべき男子が薄情無情なるがため、消極愛を味ふこと能はず、また子が無くして積極愛をも味ふこと能はざる時は、愛せらるゝ異性を他に求むるか、或は自ら進んで愛すべき異性を求めねば、其の性情を滿足し得られない。併し多くの女子は、貞操と名譽とのために、自制して、不滿不快の生活を忍び、涙ながらに寂寞たる一生を送るのであるが、神經病性、ヒステリー性の婦人のやうな自制克己心に乏しい者は、到底此の如き寂しい陰鬱な生活に堪へることが出來ない。茲に於てか、自ら進んで積極的に愛し得べき異性をば、自分よりも弱者劣者なる地位の低い年の若い者の中に求め、私通姦通の罪惡を犯すに至るのである。

貴族の家庭の腐敗せることは周知の事實で、封建時代よりの因襲なる一夫多妻の制度は、今日に至つてもなほ公然行はれ、幾多の妾を置き、幾多の賣春婦に戯むれても、それは貴族に有勝ちな事として、誰も怪しむものは無いが、其の夫人に至つては、殆ど床の間の飾物同樣であり、また空閨に泣き勝ちである。何爵夫人といふいかめしい肩書はあつても、また榮華なる生活を送つてゐても、愛されることも無く、また愛すべき者も無い。さればとて、同族間に愛される異性を

求むることは出來ないから、自から進んで積極的に愛すべき異性をば、自分より地位の遙に低い弱者劣者に求めるやうになるのである。芳川鎌子の如き、柳原燁子の如き、實に其の好例と云つていい。

日本に於ける生殖器崇拜の起源及び成立に就いて（上）

（一）

生殖器崇拜 Phallus-Kultus の風習は吾國にも上古時代よりあつて、男女生殖器の形象を彫刻した木石或はその形象に類似した自然石（所謂陰陽石）を祀り、幸福、攘厄、結婚、豊饒等を祈るが如き風習がある。明治以來之を嚴禁することゝなつたが、維新前までは頗る盛んに行はれた就中、關東から奥州にかけて此の風最も著しく、生殖器を祀つた神祠は殆ど到る所に在つて、道祖神、岐神、賽神、幸神、金勢大明神等の如き神號を稱し、また、道鏡宮、陰陽石明神、淡路明神等のやうな神名もある。而して吾國往古に於ける生殖器崇拜の風習は夙に歐洲の學者間にも知られ、現にモル氏の性學全書 Moll, Handbuch der Sexualwissenschaften の中にも、ブッシユマンの執筆に成つた『生殖器崇拜』の章下に於て、吾國人の祀つた生殖器の神體等の圖畫をも挿みまた之を崇拜する習俗の一班を記してあるが、其の中にも次の如き一節がある。

『日本人の生殖神體は元來祠堂なく、郊外に在りて露呈するか或はその群列する時は天蓋を有するのみにして、人之を崇拜せり。かくして人民の禮拜場となり、之に詣でゝ祭祀をなせしが、近時に至りて、生殖器崇拜は最早や閉鎖せる靈場内に行はれ、この場内には光輝ある赤色或は金色に塗られたる男根の模造物ありて、祭壇上に安置するのみ。云々。』

右の記事は單に吾國に於ける生殖器崇拜の習俗の一班に過ぎないが、海外の學者間にも夙に其の知られた證左として、茲に引用したのである。吾國の生殖器崇拜の習俗に就いては、新井白石の『紳書』、橘南谿の『東游記』、喜多村信節の『嬉游笑覽』、菊岡沾凉の『本朝俗諺誌』等の古書を始め、姉崎正治氏の『中奥民間の信仰』、藤原相之助氏の『日本先住民族史』、加藤咄堂氏の『日本風俗志』等中にも記述せられてあるから、茲にはくだ〳〵しく擧證しない。ただ聊か卑見を述べたいのは、此の風習の起源と成立とに關する考察である。

(二)

抑々上古時代より生殖器崇拜の風習があつたことは無論明白なる處で『古語拾遺』に神代に於て蝗の害を防ぐがために男根の形を作つて其處に立てたといふ記事があり、(原文に曰く、宜以二手宍一、置二溝口一、作二男莖形一、以加レ之と。)また萬葉集卷十三の長歌の中に『五十師の原』(いしの

原）といつた地名があつて、之に關する本居宣長の說に『今石藥師の驛に石藥師とて寺ありて石の佛を祀れり。そは地上より自ら立てる大なる石のおもてに佛のかたを刻みつけたるにて、此の石あやさし石なり。これに依りて思ふに、佛を刻みたるは後の世のしわざにて、もとは上つ代よりあやしき石のありしによりて、いしの原とは名に負ひたるならん』とあるから、恐らくはそれは陰莖の形に類似した石で、旣に上古時代より崇拜せられたやうに想はれる。

然らば此の如き風習の起源は如何と云ふに、嘗て井上哲次郎氏は『史學雜誌』第二十一編第十號（明治四十三年度）に於て意見を述べられたことがある。同氏は和蘭の學者ニユーウエンフイスの『ボルネオ旅行記』Nieuwenhuis, Quer durch Borneo の中に『陰莖の形を怖ろしく大きく拵へて、惡魔を追ひ拂ふやうに立てゝ置く』とあるが如き記事を引證して、吾國の生殖器崇拜の風は、南洋より傳來したものであらうと推斷せられた。さりながら、生殖器崇拜の風習は固より南洋諸島のみに限らず、朝鮮、支那、蒙古等よりも生殖器崇拜の遺物が發見せられるから、我國に於ける此の風習を以て、單に南洋より輸入せられたるものと推定することが出來ない。併し日本の先住民族に於て、夙に生殖器崇拜と認むべき風習があつたことは、石器時代の遺物中に男根の形象に類似した石造物、所謂石棒の發見せらるゝことによつて之を推測することが出來る。ムン

ローも『有史以前の日本』Munro, Prehistorie Japan 中に於て、石棒の大部分を以て陰莖の形を表徴したものと認め、生殖器神として崇拜したものであらうと論じた。人類學者大野雲外氏も『先住民族論』(「人性」第十四卷第十一號）に於て、石棒を以て『生殖器の崇拜物として、其の當時に流行したものらしい』と言はれた。是に由つて之を見れば、我國に於ては、夙に石器時代の頃から生殖器崇拜の風習が行はれてゐたのである。處が吾國唯一の「アイヌ」學者として有名なる金田一京助氏の說に依れば、「アイヌ」には生殖器崇拜の風が全く無いと云ふから、我國に於ける此の風習が、最古の先住民族たる「アイヌ」に出でたものとも思はれない。然るに他の一面より觀察すれば、古來生殖器崇拜の風が、主に東國奧羽に盛んに行はれてゐるのは周知の事實であるから「アイヌ」と生殖器崇拜の風との間に、何等かの關係があらうかとの疑問を提起する者もある。殊に藤原相之助氏の如きは、其の著『日本先住民族史』に於て、古來生殖器神を「くなど」の神と云ふのは、アイヌ語の「クンネト」Kunnct 即ち「暗黑」の意より導かれた夜の義の言葉の轉訛したものであり、また一に生殖器の神體を「さえぐ」神と稱するのは、アイヌ語で女子生殖器を「サンゲ」Sange 或は「サンゲアパ」Sangeapa と云ふのから轉訛したものであらうと說き、生殖器崇拜の風は「アイヌ」より起つたものであると論定せられた。されど喜田貞吉氏の述べられた如

く、今日のアイヌ語と數千年前のアイヌの言葉とが同等のものと斷定することは出來ない。何となれば、言葉には非常な變遷があるからである。加之、言葉には暗合と云ふことがあつて、全く緣の無い國語の中にも、いろ／＼と工夫して「アイヌ」語に强いて附會すれば、說明の出來るものも多いから、單に國語の「くなど」神が、アイヌ語の「クンネト」に類し、また「さえぐ」神がアイヌ語の「サング」に類似したればとて、之に依つて直ちに生殖器崇拜の起源を「アイヌ」に歸することは輕卒の譏を免れまい。然らば何が故に此の風習が古來「アイヌ」の巢窟とも云ふべき奥羽地方に盛んに行はれたかと云ふに、之に就いて中西利德氏の『民族と歷史』第三卷第二號に揭載せられた所說は、大に私共の參考になるやうに思はれる。同氏の說に依れば、『日本風俗志』の著者の記述した如く、元來東北地方は古來交通不便にして、その統治者は中央各地に於けるが如く更迭すること多からず、土着の豪族も舊風を維持して文化の開發進歩甚だ遲々たりし結果、一たび東北地方に入つた風習は比較的變化を受くること少く、中央には、既に廢絕に歸した風習も、猶ほ此の地方では殘留して居るものも尠く無い。されば兼好法師の『徒然草』にも、都には無くなつた風俗の東國の地に猶ほ殘れることを記して『亡き人の來る夜とて魂祭るわざは此頃都には無きを、東の方にては尙ほ爲ることにてありしこそあはれなりしか』とある。是に由つ

て之を見れば、今猶ほ東北地方に面影を殘した生殖器崇拜も、曾ては都地及び他國に行はれたもので、それが一たび東北に入り込んだ後は、比較的變化を受くること無くして、そのまゝ殘存してゐるのであらうとある。斯く考へてみると、生殖器崇拜の風が、近世まで東北地方に盛んであつたのも、其の實はアイヌの遺風と看做す譯にもゆかない。またアイヌ語の中に生殖器神名に類する言葉のあるにしても、それは例の暗合偶合と言はれぬことも無い。

以上說述するが如く、生殖器崇拜が既に石器時代より行はれた事蹟の存するにも拘はらず、「アイヌ」の俗に出でたもので無いとすれば、同じ先住民族たる彌生式種族に此の風習の起源を求めねばならぬことになる。然るに所謂彌生式種族、即ち赫色素燒の土器に幾何學的線條を附したものを遺物として留めた石器時代の先住民族の本態に就いては、人類學者及び史學者間に異論があつて、今猶は解決を告げてゐない。鳥居龍藏、濱田耕作二氏の如き人類學者考古學者は、彌生式土器を遺した先住民族を以て、滿蒙、朝鮮より日本に移り來つた『原日本人』『固有日本人』と認め、之に反して、史學者喜田貞吉氏は、南洋系の種族で、所謂隼人族と同種のものであると論じてゐる。

されば私のやうな斯學の知識に乏しいものは、到底這般の人種學的疑問に容喙するの資格もなく、從つて上記の異論の何れが眞なるや否やも判斷することが出來ないが、併し前號の本誌に掲

載した「割禮の遺風と認むべき日本民族の龜頭の裸出」に於て説いた如く、日本民族の龜頭の裸出が、南洋より移入した印度ネシアン種族の風習に起源すべきことは、略ぼ推定するに難からざる所であり、また日本民族一般に用ゆる犢鼻褌も慥かに南洋傳來のものであつて、最初は日本に移入した南洋土蠻の後裔たる隼人族の締めてゐたのが、次第に一般の日本人に普及したことの殆ど疑ひなき以上は、同じく陰部に關する生殖器崇拜の俗も、其の一部は南洋より輸入せられたものと推定しても、恐らくは大過なからうと信ぜられる。前記の『古語拾遺』にある男根の形を作つて蝗害を防いだと云ふが如き風習は、井上哲次郎氏の示摘せられた如く、南洋ボルネオ島の蠻族間にも夙に行はれ、惡魔或は疫病を防ぐがためには、生殖器の像を立てゝ置くやうな風習がある。此地の土人は生殖器そのものは惡魔を畏怖せしむるものであるから、木を切つて其の形を刻み、或は階段若しくは橋の上に持つて來て、惡魔を追ひ拂ふ用に供することは周知の事實である。而して我國の先住民族の中には、南洋から移入した種族も尠く無いのであるから、生殖器崇拜の原始的風習の中には、南洋方面から輸入せられたものもあるに違ひない。併し、加藤玄智、鳥居龍藏、上田恭輔氏等の説に依れば、朝鮮、支那、蒙古等の地方からも生殖器崇拜の遺物を出だすから、亞細亞大陸方面より我國に移入した「原始日本人」からも此の風習の傳へられたことは固より否定し得られない。

黴毒に傳染したるショーペンハウエル

人の知るが如く、ショーペンハウエルは前世紀の獨逸の哲學界に一異彩を放つた學者で、厭世論を主唱し、人生を以て苦痛罪惡の巷と觀じた人である。而して他の一方には、有名なる婦人論を公にして、女性を忌憚なく攻擊したこともあり、七十有餘年の一生を通じて、獨身生活で身を終つた程の人物たるにも拘はらず、其の壯年時代に於て、俗人と雖も顰蹙する黴毒に罹つた事實は、嘗て獨逸の醫學者イワン・ブロッホの考證に依つて闡明せられ、且つ黴毒の傳染がショーペンハウエルの厭世思想に影響を及ぼしたことが認められるやうになつたのは、多少興味ある事柄である。

千八百二十四年五月二十一日、ショーペンハウエルが獨逸のミユンヘンより友人フリードライヒに宛てゝ送つた手紙の中には、次の如き文句がある。

一年前、當地に參り候が、其後六週頃より引續きに病起り、一冬を家にのみ暮らし甚しく惱み申候。一ケ月以來恢復致候へども、猶ほ神經衰弱に惱み、今し漸く君の御書信に對して返書を認むるにも、手打震ひて甚だ困難を感じ候。身體倦怠し、晝間は睡眠を貪ぼり、右の耳は全く聾となり候。されば、有名なる南

墺ガスタイン温泉に赴き靜養せばやと存居候
湯治を終り候はゞ再び當地に立ち歸るべく候
へども、此地獄の如き恐ろしき風土の地には
再び滯在致すまじく、ラインに行きて其處に
夏を過ごし、體力の恢復に從ふ所存に有之候
云々。(意譯)

(原文) Vor einem Jahre kam ich hierher, und etwas sechs Wochen darauf fing eine Verkettung von Krankheiten an, ... ich habe den ganzen Winter in der Stube zugebracht und sehr gelitten. Seit einem Monate bin ich hergestellt, aber noch so nervenschwach, dass ich, vor Zittern der Hände erst jetzt Ihren Brief und zwar mit vieler Mühe beantworten kann, mich matt dahinschleppe und bei Tage einschlafe:dabei ist das rechte Ohr ganz taub. Allen dieselben Uebeln soll das berühmte Bad Gastein in Süd-Oesterreich abhelfen... ...Nach der Badkur muss ich hierher zurück, werde ich aber diesem Höllenklima dann nicht wieder aufhalten, sondern an der Rhein gehen, dort den Sommer und die Wiederkehr meiner Kräft zu geniessen.

メビウスは、上記の手紙の文に徴して恐くは
室扶斯に罹つたのであらうとの推測を下した。
(Möbius, Ueber Schopenhauer. 1899) 然るに其
後、イワン・ブロッホは、ショーペンハウエルの
遺書を精細に調査して、その手控を見た處が、
鉛筆を以て次の如く記載してあるのを見出した
(Iwan Bloch, Medizinische Klinik. 1906)

赤降汞　十月十四日より
二、五グラン

四グラン　十月二十二日迄
〇、五グラン
四グラン　十月二十八日迄
同　十一月一日迄
同　十一月九日迄
同　十一月十三日迄
同　十一月十七日迄
同　十一月二十五日迄
同　十二月三日迄
同　十二月七日迄
同　十二月十一日迄
同　十二月十五日迄
同　十二月二十二日迄
六七半グラン
昇汞一六グラン

其の次にはインクで左の如く記してあつた。

余は二三回塗擦をなせり。初めの四日は每日次で一日休み、それより隔日、殆ど三十日間云々。

終りに鉛筆で『癒瘡木丁幾』と書簡袋に記載してあつた。

上記の事實に據れば、ショーペンハウエルが殆ど七十餘日に亙つて驅黴擦法を行つたことは明かで、從つて黴毒に罹つてゐたことが判る。プロッホの說では、最初は水銀軟膏の塗擦を行つたが、效果が見えなかつたがため、赤降汞を內服したのであらうと言つた。赤降汞は當時頗同陳舊なる黴毒に用ひられたもので、十六世紀時代の頃より使用せられたが、千八百〇八年に至つて、ペルグが再び之を賞用し、每日一グラン（〇、〇六瓦）を內服せしめ、十乃至十二週にして效を奏することを認めた。而して此の藥劑を

特に慢性頑固の黴毒に用ひて著効があつたと云ふことは、當時有名なる醫家フフエランドを始め、ホルン、リッテル等の認めた處である。またハツセも同樣に多數の陳舊頑固の黴毒患者に用ひて著しき効果を收め、且つ之と共に癒瘡木丁幾を用ひて、其の効力を强めたといふことである。是に由つて之を見れば、ショーペンハウエルが赤降汞を内用したのは、頑固陳舊なる黴毒のためであつたことが推測し得られる。この他猶ほ昇汞を用ひて其の量十六グラン（〇、九六瓦）に達し、また最後には癒瘡木丁幾をも用ひたのである。右の他、彼が遺して置いた手控の中には、醫士の往診を受けたことが百二十回、醫家の門を訪うたことが七回あつたことを明記してある。

彼の病は可なり長かつた。即ち千八百二十三年五月下旬、伊太利からミユンヘンに歸り、六週の後、即ち七月の中旬になつて、病が引續いて起り、そのため冬を家で送り、千八百二十四年の二月に至つて恢復した。さて『引き續いて病が起り』といへる文字あるを見ると、彼は黴毒の他、猶ほ他の急性症に罹つたことが明かである。如何なる症であつたか確かに分らぬが、メピウスは腸窒扶斯であらうと推定した。而して此の病のために右耳は聾となつたのである。彼が千八百五十六年五月一日、フラウエンステートに宛てた書翰に、今を去ること三十三年前（千八百二十三年）病のために、右耳は全く聽力を失ひ、左耳は常態に留まつたが、四年來より左耳の聽力も漸次減退したことを記してある。而して千八百二十三年、彼の右耳が聾となつたのは、果して黴毒に基因したものであるか否かは

固より明白で無い。

彼が黴毒に傳染したことは確實で、しかも上記の如く赤降汞を内用したのを見れば、餘程以前から黴毒を患つてゐたのが判る。此の藥は當時專ら慢性頑固の黴毒に用ひられたものであるから、從つて彼の病が慢性頑固の黴毒であつたことは明瞭である。斯く水銀療法を施した上、更に南墺ガスタインに赴いて湯治をなし、黴毒を根本的に治することを得た後は、爾來健康であつたが、遂に七十三歳に至つて肺炎に罹つて永眠したのである。

彼が慢性頑固の黴毒に惱んで甚しい苦痛を體驗したことは、彼の厭世思想に影響を及ぼしたことも尠くは無からうと思はれる。フォルケルトの說に依るに、彼の厭世觀は其の經驗上より割り出されたもので、其の靑年時代に於ける苦痛と戰鬪との響きであるとまで云つた。メチニコッフは十九世紀に於ける三大厭世家バイロンレオパルヂー、及びショーペンハウエルの人生觀は、その病に基いたものであると論じた。果してそれが事實であるか否かは明白で無いが、併し彼が黴毒、しかも頑固の黴毒に罹つたことが、少くとも其の厭世觀を助成したことは推測するに難くない。

彼が靑春時代殊に千八百〇五年より六年頃の時代は、性慾が頗る旺盛であつた。當時彼の作つた『快樂、地獄』○ Wohllust, ○ Hölle の詩は、彼が戀愛の憧憬者であつたことを物語つてゐる。此の點に就いて、メビウス・グリーゼバッハは多くの證據を擧げたことがある。フラウエンステートは述べて曰く『ショーペンハウエルは性慾の點に於ては、決して純潔なる人間では無

かつた。彼が私に白狀した處では、女色を好み伊太利にあつた頃は、啻に風土の美のみで無く女性の美をも愛玩した。彼の有名なる著作『愛の哲學』は、實に彼自身の經驗を基としたものであらう。然らずんばあの樣な論文を草することが如何にして出來ようか』と。

彼自ら告白した處に依れば、厭世觀を構成したのは實に千八百十三年から千八百十八年の間であつた。固より彼の生來の性格にも因つたものであらうが、併し又彼に深き惱みを與へた特殊の原因がその一要素になつたかも知れない。彼が獨逸のミユヘンに在つた時、手當したものの中に、下記のやうな文句がある。『あゝ快樂の一年は微風の如くに消え去りぬ。されど不幸の瞬間は苦惱の百年を齎す。』"Ach, ein Jahr des Genusses vergeht wie ein leichter Lufthauch, aber ein Augenblick des Unglücks bringt ein Jahrhundert von Leiden" と。想ふに『不幸の瞬間』『苦惱の百年』と云つたのは、黴毒に感染したことを指したのではあるまいか。而して彼が黴毒に感染したのは、ブロッホの說に依るに、千八百十三年伯林にあつた頃であらうと云つた『彼は愛は吾人の敵なり』 Die Liebe ist unser Feind と唱へた。實際上、彼は之を親しく自身に體驗したのであつた。しかし此の痛ましい體驗は、其の名著『愛の哲學』と『意志及び觀念としての世界』の中に美妙なる文藻となつて描き出されてゐるのである。



墮胎と墮胎專門

近時アルベルネッチーの統計的調査に依れば獨逸でも墮胎は益々多く行はれ、流產總數の十六、八％を占めてゐる。之をユスケルの三、一％ペンチーンの三、八％といへる過去の統計的報告に比すれば、近年に至つて墮胎數の四倍以上にも增加したことを知り得られる。併し慘敗國の獨逸のみでなく、凡て歐米諸國に於て、墮胎が盛んに行はれてゐることは公然の秘密と云つてもいゝ位で、ボアッサーの說に依れば、凡そ流產と稱する者の三分の二は墮胎であるといふ。これは多少誇張の言かも知れぬが、兎に角、文明國に於ける社會の裏面に、墮胎の罪惡の大に行はれつゝあることは掩ふべからざる事實であつて、米國の如きは殊に甚しく、グランドは凡て姙娠した女の三十五％は墮胎を行ふと云ひ、オルスハウゼンは流產した者の八十％は其の實墮胎であると云つたことがある。紐育市だけでも每年十萬の墮胎が行はれる割合であるとは、ジョン・クラー判事の言明した處である。佛國では、ベルチョンの統計に依るに、巴里のみでも之を行ふもの一年間に五萬人の多きに達する。ブロンデルは英國では墮胎するものを重刑に處するが故に、每年佛國に赴いて密かに墮胎する婦人の多いことを說いた。露國に於てもカルム

チコッフの説に依れば、流産の七十五%は墮胎であると云つた。

墮胎は文明に伴ふ罪惡の一であるが、併し半開未開の民族に於ても、古來より盛んに行はれてゐる。今日に於ても、印度では猶ほ汎く行はれ、またクッシユ半島では婦人が姙孕すれば屢々墮胎を行ひ、既に五回も行つたほどの婦人は公然之を誇るの風習ありとは、マクムルドの記述した處である。歐洲に於ても土耳古には久しく大に行はれ、少くとも一定の區域内に於ては之を許すが如き有樣になつてゐる。土耳古人は胎兒は五ケ月までは生活力なきものと思つてゐるから、何等躊躇する處もなく墮胎を行ふのである。古代の希臘に於ても公然その行はれたことあつて、プラトーン時代には產婆に之を許し、アリストテレスは女子が其の意志に反して姙娠した場合には、墮胎を行つても差支なしと云つた。十八世紀の頃、カムチヤッカの民族は、夫婦は子を儲けるよりも性慾を滿足するがためなれば、若し妻が姙娠すれば種々の方法を施して墮胎せしめたと云ふことは、ステルレルの記した處を見ても明かである。此の如き次第であるから、未開種族及び往古の時代では、墮胎を別に不德の行爲とも罪惡とも思つてゐなかつた。

我國でも中古時代の頃までは墮胎を罪惡とも考へなかつたと見え、之を公然和歌に詠んだ者さへあつた。『源順集』の中に『男のひとの國にまかる程に、子をおろしける女のもとに』と題して「たらちをの、歸るほどをも知らずして、いかで棄てゝしかりのかひ子ぞ」と詠んだ和歌がある。平安朝時代に墮胎が多く行はれ、且つ之を不德とも思つてゐなかつたことは『日本風

俗史』にも說いてある。

江戶時代には墮胎は盛んに行はれたもので、且つ之を專業とする者さへ現はれた。貞享六年刊行の西鶴の『諸艶大鑑』を見るに、その中に『生垣のうちに、張紙萬葉書きにして屋彌樣於呂志藥とありしとおかしく云々』とあり、また貞享三年刊行の『好色五人女』にも『この女、もと夫婦池の小さんとて、子おろしなりしが、此の身すぎ世にあらはれ、今はそのむごき事をやめて素麵など引きて一日暮らしの命のうち云々』と見え、また正德三年刊行の『榮華一代男』にも『腹とりの上手と申上ぐれば、こなたへと常のあいさつとあるも子おろしなり云々』とあるを見れば、墮胎するを一種の營業とした者のあつたことが明かであるが、此の外にも、墮胎專門として世に名高かつたのは、中條流の女醫であつた。

抑々中條流（また一に仲條流ともいふ）は、もと豐臣家に仕へた婦人科醫中條帶刀の流派であるが、其の女醫が墮胎を專門としたことは、いつ頃から起つたか確かでは無いが、延寶八年に幕府が墮胎を業とする女醫を嚴禁した町觸れを發したのに徵すれば、旣に延寶の頃より女醫が盛んに墮胎を專業としたことを推知し得られる。併し、墮胎專門の女醫を稱して中條流と云ふやうになつたのは、寶暦以降のことらしい。それは『末摘花』に掲載した川柳に、墮胎醫の代名詞として仲條を用ゐて居るのを見ても分る。而して此の女醫は其の家の表には『月水早流し』或は『朔日丸』と書せる招牌を公然掲げて、墮胎藥を販賣した外にも、手術を施したものである。其の方法は今日明かに考證すること

は出來ないが、機械的墮胎法であつたことは固より言ふ迄も無い。川柳に『仲條は孕み女の股をさき』『仲條へ行くに褌下女ねだり』などゝあるに徴すれば、手術を行つたことは明白である。中條流女醫が流行して淫奔なる婦人が闇から闇に子を葬つたことに就いては、當時代に於ける種々の記錄を見れば分るが、『松屋筆記』には、『今の世、中條流子おろしの術、都下に遍せり云々』と見え『類聚名物考』にも『今世にいふ女醫師にて中條流といへる墮胎、その他閨門の內諸病を療治す云々』とある。そして其の墮した胎兒は水子と云つて、本所回向院の墓地に葬つた。『醫事小言』に『當時女醫師が宅預りと唱へ、七月分、一兩二分を申受け、水子と稱して本所回向院へ二百目または一朱を添へて送る』と記してある。

幕府は天保時代にも禁令を發したが、固より左程の効果もなく、矢張り墮胎の惡風が行はれてゐたが、遂に明治元年の十二月に至つて天下に令して產婆が妄りに藥を賣り、或は墮胎を行ふを禁じたが、引き續いて法律が制定せられ、墮胎者及び之を幇助した者を嚴罰に處することゝなつた。

文明國の法律はいづれも墮胎罪に重刑を處する規定となつてゐる。併し社會の裏面に於て、此の種の罪惡が彼此到る所に行はれてゐることは掩ふべくも無き事實で、歐米諸國には我國の江戶時代に於ける中條流と同樣に、墮胎を專門とする婦人科醫、非醫者が多く、殊に米國、佛國の如き淫靡なる邦國に於て最も多いやうである。其の最も甚しいのは米國であつて、之を職業として行つてゐるものが殆ど到る處に見出さ

れ、また新聞雜誌の廣告欄には、公然墮胎藥なることを暗示した廣告も尠くないことは、トマース、レイハー等の夙に示摘した處であるが、ポームレイの如きは、米國の婦人は一疋の蛔を殺すことは躊躇しても、其の過半は何等憶する色もなく、腹の子を殺すことを恐れないと痛論し、亞米利加人の罪惡は實に墮胎であるとまで高調した。"Das Verhindern und zerstören ungebornen Lebens ist die amerikanische Sünde par excellenc." 亦以て如何に米國に於て墮胎が盛んに行はれ、且つ之を業とする者の多いかを推知することが出來る。『正義』『人道』を一手專賣とする米國の裏面が、此の如くに腐敗頽廢してゐることを知るならば、いかなる米國崇家も少しは夢が醒めるであらう。

此の如き有樣だから、嘗て米國醫學會は賞金を懸けて、墮胎が婦人の健康に害あること、また之を行へば刑に處せらるゝことを知らしむべき簡潔平易の文章を一般から募集したことがあつた。そして此の懸賞金を授與せられたのは、ストーレアといふ人が提出した"Why not" といふ短文であつた。此の一事實に徵しても亦以て米國婦人が品性德操に缺如し、平氣に墮胎の罪惡を犯して恬然たる有樣を想像し得られるではないか。

しし

吾邦の俗語で尿のことを「しし」といふ。これは唐土で尿を私といつたのから出たものである。左傳に「師慧過宗朝將レ私焉」といふ私は尿のこさを指したので、釋氏要覽註に「小便可云私」とありと「相川雜記」に見えた。

變生男女の話

古代の雜書隨筆の中には、男子が女子に化し女子が男子に變じた記事を見出すことが稀でない。是れ所謂『變生男女』なるもので、古人は甚だ不思議なる現象の一と看做してゐた。先づ女子が男子に變じた事例に就いて、二三の記事を擧げてみよう。

『視聽草』に曰く、

天草大浦村嘉左衞門娘

やな　二十六歳

右の者、これ迄女にて御座候處、男に變じ候段、去年中屆出で候に付、篤と相改め候處、出産の砌、常人と違ひ陰門の左右緣及び陰戸高く、七八歳までは右の程にて御座候處、十一歳よりして、緣、陰戸次第に太り十六歳より陰嚢の形になり候て、內に小さき玉有之、陰戸は陰莖の形に相成り、二十一歳より去る丑年迄に男子に相嫁し、右陰莖の頭より三分ほど下に小便の通り候處有之、且つまた以前には女の形に候處、當時は面體其他乳等も男の乳に御座候。尤も常の男と違ひ、少しく足細く相見え申候。尤も女の稼も仕候へども、唯今にては主に男の業を仕り、前斷の通り愈々男子に變じ候。云々。

「變生男子の說」に曰く、

牛込若宮町淸五郎店
又藏娘
さと十五歲

右さと儀、去る寅年七月中、市ヶ谷田町三丁目秀鍛堂游山と申す者の方へ奉行に差出し置き、當三月中暇を取り、又藏手元に差置候處、さと儀變生男子に相成候趣、風聞事實取調候所、父又藏儀は、遠州城東郡掛川在出生、母さよ儀は相州平塚郷馬渡村出生の由にて、家內四人ぐらしにて、娘さと儀は、十五ヶ年前、天保十二年出產致し、尤も同人は總領にて、二男は松之助と申し、當年八歲に相成候。娘さと儀、十一歲の頃より夜步行又は力業などを致し、常の女子とは違ひ立居振舞等至つて荒々しく、生得男子の樣なる氣質に有之候處、去る寅年七月中、前記秀鍛堂よし方へ奉公に差出候處同人方に門弟子にて十五六歲に相成候まさと申す者の寢所へ、さと儀兩度まで罷り越し、密通可致と內々申しける故、まさ儀納得不致、女にて左樣の儀仕掛け候は不審に心得、彼のまさ事、師匠よしへ委細相話し候につき、さとの臥り居候節、夜着をまくりて見候處、女子とのみ存居候さと儀、男根有之候間、大に驚き入り、同人へ樣子相尋ね候處、十一二歲の頃より男根相催ふし兩三年前より男に成候旨、母さよに相話候へば叱られ候故、そのまゝ打ち過ぎ置き候處、此節は全く男子に成り申候旨、當人申候に付、當三月中暇を出し、又藏方へ連れ歸り候へども、兩親共右の始末信用致しか

ね娘さとの臥り罷在候節、相改め候處、陽根陰嚢共に全く出來候故、驚き入り、母さよの在所へ預け候積りにて夫婦相談致候を異見等差加へ候者も有之候につき、母さよ在所へ遣候義は相止め、當月四日、さとの前髪剃落し、名を文吉と改めて男の姿と致し、渡世向の手傳ひ爲致候處、追ひ〳〵右の風聞承り傳へ、酒食に罷越候もの日々に多く、此節渡世殊の外賑しく候由（中略）陽根の儀は陰門の上に生じ、陰門の縁膨れて陰嚢に變り、玉も出來候由、至つて黑く、未だ陰門の形を失ひ不申、陰嚢は二つ有之候樣相見え、且つ兩三年前迄は、乳大きく候處、追ひ〳〵小さく相成り、此節は男の形となり言舌筋骨共に男子の如く變じ、變生男子と申すもの有之候由に御座候。

右の變生男子の評判は、當時江戸市中に高かつたと見え、『武江年表』卷の九にも此の事を記してある。

『窓のすさみ』に曰く、

備中國にて農家の女、嫁して程なく出だされければ、他へ嫁しけるが、また出されける程に父の家に居りけり。此の女十六七歳なりけるが、生れつき健やかにて男めきたり。心も剛にして、父が村里の夜使などに當りぬれば代りゆきて夜中といへども恐れざりけり。その隣りに同じ頃なる女ありしが、いつとなく懷妊しければ、父その夫をさま〳〵に問ひけるに、初のほどは隱せしが、後には彼の女と通じて斯くの如しといひけるに、父驚き、この事を告げて問ふに此の女、初は女なりしが、いつとなく男に

なりけるにぞ。さて互ひに爭ひて訴へ出でければ、奉行所にて仔細をたづね問はれしに、父の云ふやう、今まで男になりたるは存せざりしが、此女生れし時、陰戸の上に少し離れたる如く小さき物ありしが、年ゆきて更に存せず候。兩度まで出されしを何故かと存せしに、斯樣のことにても候はんかと申すに、その女に問はれしかば、父の申す如く、いつか年長ずるに從ひて男根となり、近頃は陰戸通じなく候と申せしかば、さらば養ひて婿とすべし。男子に變ずるは吉瑞なりとて賜物ありしとぞ。

「北窓瑣談」に曰く、

阿波國勝瑞村は德島より程近き所にて、余が門人橘春庵の住居の地なり。その隣村定方村に、つなと云へる女、十五六歲の時變じて男子となる。即ち綱平と改む。云々。

寬政甲寅春、備中國檜物屋の女子まつといへるは、一夜發熱して男子となる。年十七八歲なり。云々。

「豊芥子日記」に曰く、

水野權平治御代官所、尾州愛知米津村百姓五左衞門娘その事、二十七歲に罷成候所、當三月上旬より陰門强く痛み、寒熱有之候へども、持病の癪の由、陰門病み候儀おし隱し、一向申立てず罷在候處、四月下旬に相成り、陰門の內より男根生じ、追ひ〲全くの男根と相成り、音聲も男の如くに變じ、痛みも止み、眞の男に相成候に付き、巳むを得ず兩親へも話し、此上は月代剃り度由申候處、久々の病苦に迫り、不勝手の儀申候儀と、取り敢へず申候處、變生男子

の症と申す者に御座候。云々。

『閑田耕筆』に曰く、

女の男に化せしことは近年江戸某の士の家婢にありしと、珍しきことに言ひはやせしを、備中玉島近き邑に姉妹年を隔てゝ、共に男に化せしを正しく知る由、余の相識る彼の國の人の話なり。

支那の史書の中にも女子の男子に化した記事が往々ある。例へば『史記』に『魏襄王十三年魏有二女子一、化爲二丈夫一』とあり、また『易傳』にも『女子化爲二丈夫一、玆謂二陰昌賤人一爲レ王』とある。

以上擧げた諸例は、その中に想像や誤傳の混じたものもあらうが、いづれも男性假半陰陽者であつて、孩兒時代より女子として敎養せられまた本人も女子の生活をしてゐたのであるが、思春期乃至その以後に至つて、幼時發育不全であつた男性生殖器が發育成長し、從つて男子固有の第二次性徵を現はすに至つたものである。前號の本誌に掲載した『男性假半陰陽者アレキシナの日記より』にも記して置いた如く、男性假半陰陽とは、實際は男子であるが、その外陰部の發育が生來不完全であつて、恰も女子として取り扱はれるのである。併し思春期前後に至れば、生來發育が不完全であつた男性生殖器關が往々發育成長を始め、今まで女子と思ひまた女子と思はれてゐたものが、初めて男子固有の性徵を現はすに至ることがある。これが即ち所謂變生男子として、古人の不思議現象と看做したものゝ一つである。

上記の實例に反して、女性假半陰陽者、即ち實際は女性でありながら、外陰部の形狀が男子のそれに類するがため、男子として取扱はれた

者が、思春期及び其の後になつて、女性固有の性徵を發現することがある。所謂變生女子と稱せらるゝものがこれで、その一二の事例を古書より引用して見よう。

『和漢三才圖會』に曰く、

越後の人、年十八歳にして出家し、丹波大野原會下に至る。三年を經て後、京洛を過ぎり故郷を見んと欲す。暇を乞うて江州島郡枝村の旅泊に寓す。霖雨留ること兩三日或夜自ら化して女となるを夢むや、果して陽根縮りて陰戸となり、音聲容儀女なり。家主と淫して子を生む。云々。

されど右の記事中、陰莖が縮つて陰戸となると云ふやうなことは、固より妄誕無稽の說で到底信ぜられないが、恐らくは女子の性向を現はすに至つたがため、尾に鰭をそへて、かやうな想像的或は虚構的記事を附け加へたものかも知れない。これに類するものに次の如き事例がある。

『桂林漫錄』に曰く、

慶長年中、一老僧弟子を從へて某處に投宿す。その弟子、腹痛甚しく朝に及び、男根沒入して女となる。老僧詮方なく其家に托して去りしに、漸く身體顏色共に女の如くなり、遂に其家の妻となり子を生みしと云々。

男根が沒入して女となると云ふのは、これも前者同樣の無稽虚妄の談であるが、併し女性假半陰陽者が、思春期後に及んで、女子固有の特性を發現すべきことのあるのは固より否定せられない。支那でも男子が化して女子になつた事例がある。例へば『漢書』に『豫章有ニ男子一、化爲ニ女子一、嫁爲ニ人婦人一、生ニ一子一』とあり、また『皇

明通記』にも『陝西民李良雨、忽變爲㆓婦人㆒、與㆓同買者㆒苟合爲㆓夫婦㆒』とある。

校正を終へて

私は「性」の研究を專門とする者で無いが、病理學及び法醫學を專攻して、人間及び社會の光明の方面よりも寧ろ暗黑の方面を窺知することが多く、從つて「性」の研究にも多大の興味を感ずるやうになつた。世には人を殺傷し或は物品を盜奪し或は猥褻行爲を演じて、法に問はるゝが如き者甚だ多き中にも、性慾に異常ある者が尠く無い。されば變態性慾の本性、種類を究めて、犯罪行爲との關係や、また奇怪なる人事の眞相を明かにするの要あることを切實に感じ明治三十九年頃から「性」の研究に着手し、常に變態性慾に關する事項を熱心に研鑽した。爾來年を經ること茲に十六星霜、その間、淺學非才ながらも多少獲る處があつた。病理學、法醫學專攻の餘暇、變態性慾の研究から、一般の「性」の研究にも及んだ私は、「性」に關する知識をば相應に有つてゐる自信がある。

私一人で本誌に執筆することは、可なりの重荷であるが、努力のつゞく限り、古峽氏に迷惑を及ぼさゞる限りは、飽くまで執筆を繼續する覺悟である。性の研究の範圍は頗る廣い。私が十有餘年間、淺學短才ながらも研鑽した事項や蒐集した材料も可なり豐富であり、また今後とても外國より到着する參考書籍雜誌より、新資料を獲ることも容易であるから、他の寄稿或は助力を仰がずとも每月一回の發行で五十頁位の雜誌ならば、單獨の執筆も左程の困難苦痛を感じない。これ私が僭越をも顧みず、古峽氏の提議に應じて、獨力本誌の執筆を引き受けた所以である。

次號豫告

▽性慾の昇華に就いて

▽女性の犯罪と生殖機能

▽自然の防姙作用

▽日本に於ける生殖器崇拜の起源及び成立（下）

▽醫學上より觀たる獨身生活の利害

▽男娼考

▽變態性慾要説（二）

創刊號內容

▽發刊の辭▽性的早熟と早夙性發情▽月經の生物學的意義に關する一疑問▽割禮の遺風と認むべき日本民族の龜頭裸出▽虐待性好淫者ザード侯爵と殺生關白豐臣秀次▽江戶時代に於ける性的犯罪の刑▽男性假半陰陽者アレキシナの日記中より▽女嫌ひ▽變態性慾要説（一）

本誌定價表

壹部（一ヶ月分）	金參拾五錢	稅壹錢
六部（半ヶ年分）	金貳圓拾錢	稅共
拾貳部（一ヶ年分）	金四圓拾錢	稅共

注意
□御註文は總て前金御拂込のこと
□なるべく振替にて御送金のこと
□特別號は定價超過分申受のこと

本誌廣告料

表紙二、三、四面	金五拾圓
普通面一頁	金參拾五圓

大正十一年五月廿日印刷納本
大正十一年六月一日發行 第一卷 第二號

編輯兼發行者 東京市外北品川御殿山七一八 中村蓊

印刷者 東京市芝區南佐久間町二ノ一四 渡邊素一

印刷所 東京市芝區南佐久間町二ノ一四 內外印刷合資會社

發行所 東京市外北品川御殿山七一八 日本精神醫學會
電話高輪一〇四三番
振替東京三一一七七番

大賣捌（東京堂、東海堂、北隆館、參文社、上田屋、至誠堂、盛春堂、共盛社、）

變態心理合本 第壹卷

装釘美 六〇〇頁

改正定價金壹圓八十錢

送料不要

內容一斑

論說——支那に於ける靈的現象（幸田文學博士）正態と變態（上野文學士）迷信と妄想（一—五）（森田醫學士）觀念は生物也（一—二）（福來文學博士）所謂心靈現象の研究法に對する吾人の希望（石川醫學博士）意識障礙と犯罪（杉江醫學士）干支と易（遊佐文學博士）印度神變術（武田早大教授）其他

研究——頭蓋骨の興味（挿畫十二葉入）（菅原文學士）フロイド精神分析法の起源（久保文學士）習慣性犯罪者に就いて（佐藤政治）二重人格の少年（一—二）（中村文學士）自働現象の話（一—二）（小熊文學士）病覺就中主觀的病覺に就て（永井醫學博士）迷信としての犯罪者の脫糞（寺田文學士） 心の繪圖（挿畫十九葉入）（菅原文學士）混亂せる夢の性質（小熊文學士）禪の悟りに就て（入谷文學士）アドラーの補償說と神經病（久保文學士）其他

雜錄——諸町者の變態心理（佐多千葉醫學士）植物の心理（松島理學士）輪廻轉生に關する傳說（一—二）（三枝十一）植物の感情（松島理學士）最近の歐米催眠術界（小熊文學士）變態心理學上より見たるオルレアンの少女（佐多千葉醫學士）最近歐米の精神療法界（小熊文學士）少年犯罪者の殖民地（ドストエフスキ）周圍の變化と動物の體色（挿畫二葉入）（谷津博士）人の心を狂はせる植物（松島理學士）兒童の變態心理に就て（高島平三郎）潜在意識（自彊人）（シャストリ） 支那人の特性に就て（堀田延千代）相貌に由る性格鑑別法（一—二）（小西學士）生贄と人身御供の傳說（三枝十一）教育心理實驗（村上文學士）錯誤より出でたる悲劇（中村文學士）其他

人間的證券 ——汽車只乘の巧い少年（宇佐美學士）歸國すると惡心の出る男（宇佐美學士）彼等の一家（一—二）（沖野牧師）二狂人（中村文學士）余の見たる鬼權（宮島資夫）余の偽らざる告白（流々生）小笠原に送られた少年（宇佐美學士）其他

其外每號掲載されたるもの——變態心理日誌、近代の珍書幽本考料、最近の新聞雜誌拔萃等

東京品川御殿山 **日本精神醫學會** 振替東京三一一七七番 電話高輪一〇四三番

變態心理合本第二卷

裝釘美 五五〇頁
定價 金壹圓六十錢
送料 不要

內容一斑

論説——宗教より見たる物心關係(權田雷斧) 迷信と妄想(每號連載)(森田醫學士) 印度神秘術(每號連載)(武田早大教授) 犯罪と感化救濟事業(小河法學博士) 不良少年發生の原因(坂口警部) 浮浪少年と犯罪(勝水教誨師) 變態心理學研究に對する所感(倉橋文學士)

研究——囚人の歌(勝水教誨師) 妖怪研究(伊東工學博士) 不良少年の身體並に精神(杉江醫學士) 嗜好性恐喝少年犯の一例(山崎法學士) 統計上より見たる犯罪少年(黑田小田原分監長) ごろつきの心理(賀川豐彥) 强迫觀念(佐多千葉醫學士) 馬に關する空想(伊東工學博士) 酒亂の心理(三宅醫學博士) 幽靈思想の變遷(柳田法學士) 群衆の指導者に就いて(寺田文學士) 强迫觀念の心因(向井章) 法醫學上より見たる病的衝動(安東禾村) 少年受刑者の夢(刈屋哲公) 電氣娘の現象(小熊文學士) 性慾衝動と精神生活(北野博美)

紹介——妄想と疾病(向井章) 狂氣の心理(中村文學士) 精神醫としての基督(向井章) 精神薄弱と强迫觀念(葛西文學士)

雜錄——念寫實驗記(中桐早大教授) 蟻の家族制度(矢野理學士) 相貌に由る性格鑑別法(小西早大文學士) 十種の人格を持てる女(ドクトル・ウイルスン) 生靈の傳說(三枝十一)、不良少年の感化(留岡家庭學校長) ジョン氏讀心術合評(森田醫學士・大川定次郎・中村文學士) 催法と堀才吉君(島地東洋大學教授)、斷食中の精神狀態(村井弦齋) 支那人に對する日本小學兒童の感想(堀田延千代) 髑髏保存の遺風(三枝十一) 其他

人間的證券——彼の僞らざる告白(流々生) 棄兒に添へたる遺書(市場學而郎) 在監不良少年の通信(市場學而郎) 彼が流轉の跡(流々生) 僕の恐怖(和田生) 狂人の手記、電氣病容態書

其他——變態心理日誌、最近の新聞雜誌から、讀者欄等、趣味津々たる多くの記事に滿てり

東京品川
御殿山 **日本精神醫學會** 振替東京三一一七七番
電話高輪一〇四三番

變態心理合本 第四卷

裝訂美六三〇頁
定價金貳圓貳拾錢
送料不要

內容一斑

論說——大本教の迷信を論ず（中村古峽）過激思想發生の眞因（淸水慶大敎授）大本敎徒の心理解剖（白楊生）

講話——神憑の現象に就いて（森田醫學士）夢の本態、夢の敍述、夢と關係ある諸種の現象（毎號連載）（森田醫學士）潛識とは何ぞ、毎號連載（小熊文學士）植物の變態心理（松島理學士）化物屋敷の研究と實例（連載）（大川定次郎）少年犯罪者の研究（山崎法學士）ルイ朝時代の愛史と生活（菅原文學士）在外朝鮮人の民族的發達（菊池長風）

研究——賣笑婦の出立と地方的風俗（北野博美）夜を世界とする女（連載）（向井章）代表的性格不良の犯罪者（刈屋哲公）死刑囚の懺悔（刈屋哲公）靈魂の座所に關する東西兩洋人の思想（高峰醫學士）証明より觀たる迷信（渡邊哲州）

紹介——變態心理學の研究範圍（ウイリアム・マクドウゴル）所謂心靈療法の基礎（安東禾村）『酒と女と歌』（高頭松雄）

雜錄——盆の牡丹餅中まで來だ（大井二九郎）夏季の犯罪と性的衝動（ヒロミ生）探偵盤を眺めつゝ（ヒロミ生）婦人解放論と男性の惱み（ヒロミ生）姦婦殺しの話（連載）（ヒロミ生）A君の話（ヒロミ生）怪しき女の後を追って（影山靜夫）小說中の女（影山靜夫）眞夜中のロハ臺（影山靜夫）麻醉劑に罹つた時（杉村浩）催眠術應用に由る逃亡者の追跡（菅谷宿彌）未亡人の心理、一、現實界を離れて（Y夫人）二、眼覺めたる生活（H夫人）三、過ぎし日の夢を續けて（T夫人）十五の僞名を使つた犯人（山崎法學士）一婦人の告白（山百合）宗敎性妄想患者の一例（中平田良一）

人間的證券——西宮の殺人少年（向井章）自殺者の心理（西巣治）亡き友の告白から（久里島新一）二狂女（中村文學士）花江ちやん（中村文學士）男性化せる女（筑紫二郎）旅役者の手記（北野博美）

雜纂——質疑應答（小熊文學士）履き違へたる神秘主義（石上敬治）名號の糸に就いて（のぶひさ）太古と近代の靈師（エテル・ウルリン）日蓮宗の因緣樣（一法華宗徒）

最近の學說——現代學界の名家の卓說を採錄配列したり。

其他——現代の縮圖、讀者欄、詩歌等趣味津々たる記事を滿載しあり。

東京品川
御殿山
日本精神醫學會
振替東京三一一七七番
電話高輪一〇四三番

變態心理合本第五巻

装釘美六五〇頁

定價金貳圓五拾錢

送料十二錢

內容一斑

講話——不死論（富士川醫文學博士）現代社會の病的組織（生田文學士）平安明時代の戀愛生活（青木文學士）狂氣とは何ぞ（中村文學士）生物學上より見たる死（永井醫學博士）夢と迷信（森田醫學士）賣淫の起源に關する二三の考察（北野博美）アイヌの生活（金田一文學士）婦人の犯罪（勝水敎誨師）人類の性慾生活と賣淫の發生（北野博美）異常生活（富士川醫文學博士）アイヌの信仰と傳說（金田一文學士）賣淫の發生と社會的宗敎的關係（北野博美）人種改良學と婚姻法（穗積法學博士）苦痛の解剖（後藤文學士）どんな人が自殺するか（森田醫學士）早熟兒童に就いて（久保文學士）

研究——天才研究ニイチエの天才觀（連載）（生田文學士）□犯罪研究竊盜と其の職業觀、殺人の公認、惡に對する虛榮（連載）（寺田文學士）藝術研究新エバと新アダム（菅原文學士）□狂人研究狂人の戀、上奏者S君、彼の入院前後、花骨牌を撒いた男の話（連載）（中村文學士）□變態性慾研究變態性慾の分類、性的暴行の一例、正常より異常へ、性慾と鬪爭、ピグマリオニスト、悲慘な夫婦生活（連載）（北野博美）□貧社會研究木賃宿の人々、墮落者と歐本賣り、浮浪者の一日、政治運動屋の心理、活動寫眞を見る人（連載）（影山靜夫）

論說——生物の電氣現象（中牟田良一）心理學上より見たる同盟罷業（下澤瑞世）神隱しに會つた子供（連載）（中村文學士）賣笑婦の生活（北野博美）賣笑婦生活と其の環境（北野博美）

紹介——超常心理と下意識（ウイリアム・マクドウゴル）宗敎的催眠現象（ハヴエロツク・エリス）

雜錄——婦人狂家出娘の告白（TCK女史）女學生と先生（TCK女史）或る妻の手記より（つゆ香）結婚と性の生活（みなみ）□文藝狂科學と藝術の提携（野の人）創作に扱はれたる異常性格（信一生）讀んだまゝ感じたまゝ（野の人）人間生活の種々相（信一生）□人間的證劵疑問の囚人（KK生）狐憑になるまで（守山退耕）賭博病（向井章）支那浪人と稱する男（若月辛之助）□不思議な現象夢中精神感應の實例（戶館康一郎）狐に化かされた實例（某氏）木が唸つた話（江森清松）北海道夕張の幽靈問答（中村淸）

雜纂——乳母の言葉（ヒロミ生）旅の長野より（KY生）平凡人の通信（KY生）大戰後の兩性問題、喫烟室（名なし草）

創作——見えない人々（狂人劇）（アンドレ・ド・ロルド）憑かれた人（短篇小說）（山上晃一郞）斯る人々（長篇小說）（每號連載）（沖野岩三郞）

最近の學說——諸大家の學說を採錄網羅したれば、現代學界の大勢を窺ふに足る。

現代の縮圖——社會の表裏に於ける一切の出來事に綜合的批判を加へ、現代の人間生活の趨勢が那邊にあるかを知らしむる本誌獨特の記事なり。

其他——編輯の後に、讀者欄等、悉く本誌の立場を明かにし、趣味津々たる記事を以て滿されあり。

東京品川御殿山

日本精神醫學會

振替東京一一七七番

電話高輪一〇四三番

變態心理合本 第六卷

總布裝七六〇頁
定價金參圓五拾錢
送料不要

內容一斑

論說——性格の種々（今村醫學博士）創作の一心理（小熊文學士）ヒステリーの話（森田醫學士）勞働と精神病（高峰醫學士）催眠學理一斑（中村文學士）催眠術治療の價値（森田醫學士）催眠術に關する法律問題（山崎法學士）ダボアの擬證說得法（石川醫學博士）病的催眠現象（中村文學士）氣合と催眠現象（淸水靜文）淫猥行爲に關する研究（田中香涯）其他

研究——實矣婦の心理研究（北野博美）狂人研究（ＨＢＫ）變態性慾研究（北野博美）實社會研究（岩崎六郎）監獄雜感（勝水淳行）月經と婦人（向井章）監獄部屋（岩崎六郎）唯物思想に誤られたる死刑囚（勝水淳行）宗敎雜話（環信次郎）其他

紹介——心靈現象研究の意義（ベルグソン）意識の分裂（ジャストロウ）催眠暗示の消散せる諸症（ゲリツシ）精神分析法解說（中村文學士）

迷信研究——偏執病者の思想（富士川醫文博士）正信が迷信か（高島米峰）唯心派と硬心派（川合貞一）進步的文明敎の二要素（井上文學博士）憂ふべき病的思想（境野黃洋）宗敎の眞生命（覺法學博士）眞理は最後の勝利者也（野上文學博士）大本敎に就いて（姉崎文學博士）宗敎の起源と精神病（榊醫學博士）安んぜざる傾向（杉村楚人冠）其他

迷信解剖——大靈道の靈子術解剖（山村イチ子）江間式氣合術の正體（平田五三郎）大阪の精神療法界（矣庶醉人）所謂療界を見下して（三好秀太郎）大靈道田中守平に與ふ（山村イチ子）余が綾部生活の二年（宮飼陶羊）大本敎に欺かれたる告白（淺羽生）出口王仁さんと僕（高野正明）大正日々新聞を嗤ふ（眞眼生）其他

其他——人間的職券、最近の學說、現代の縮圖、雜錄數十項、何れも趣味津々たる記事に滿てり。

東京品川御殿山

日本精神醫學會

振替東京三一七七番
電話高輪一〇四三番

好評嘖々——再版出來!!

變態心理學講話集

裝釘並菊版三三〇頁
口繪寫眞二葉入
定價壹圓四十錢
送料八錢

（本書內容）

變態心理學概論 文學士 中村古峽

變態心理學に對する一般の誤解—常態と變態との區別—變態心理學の研究範圍—變態心理と潜在意識—變態心理現象の區分—一時的變態心理現象—持續的變態心理現象—變態心理學の任務及び貢獻

精神病の概念 醫學士 森田正馬

緒言—心身の關係—精神障礙—症狀的方面より見たる觀察—原因的方面より見たる觀察—經過、豫後方面より見たる觀察—治療的方面より見たる觀察—疾病の型、性質、本態、種類—精神病の研究法—精神病學の應用範圍—附錄臨床講義—變質性精神異常者—早發性痴呆

犯罪と迷信 文學士 寺田精一

序言—迷信の行はれる範圍—迷信家—犯罪者と迷信—犯罪と關係しての迷信—犯罪の原因としての迷信—犯罪行爲遂行の爲の迷信—犯罪の發覺を防ぐ迷信—犯罪者の日常生活と迷信

不良少年の精神分析 文學士 久保良英

はしがき—心的機制—幻影に由る心的機制—强迫觀念に由る心的機制—容易に分析される機制と分析の困難なる機制—兩親共他に關係した機制—竊盗に終れる心的機制—放浪に終れる心的機制—他の悪癖に終れる心的機制—結論

變態心理と近代文藝 文學士 生田長江

變態といふ語の意義—近代文藝に對する誤解—變態心理と近代文藝との關係

歐洲大戰の心理的側面觀 文學士 上野陽一

平和論者の夢—不可思議に堪へぬ大戰の勃發—ザッキンソン氏の大戰原因論—文明人の發生的觀察—文明人の解放—結論

愛の習俗 文學士 菅原敎造

戀愛の變化—結婚の性的要素—禁慾の齎らす變態現象—破戒僧尼の群—操の帶—自由戀愛の歌—愛の裁判と愛の法律—愛の共産主義—自由戀愛と禁慾主義—解放—表現—裸體畫の出現—自由戀愛の主張—微笑の恐怖—色情藝術の發生—宗教畫の色情化—色情藝術の推移—ルーベンス、フラマンの色情藝術—レンブラント、和蘭の色情藝術—工藝品としての色情藝術

東京品川
御殿山

日本精神醫學會

振替東京三一一七七番
電話高輪一〇四三番

變態性慾第壹卷第貳號
大正十一年四月廿六日第三種郵便物認可
大正十一年六月一日發行（毎月一回一日發行）

定價金參拾五錢

性之問題研究の最高級雜誌

大正十一年四月廿六日第三種郵便物認可
大正十一年七月一日發行（毎月一回一日發行）

變態性慾

前大阪醫大病理學敎授
田中香涯氏執筆

七月號

目次

東京 日本精神醫學會 發行



女性の生殖機能と犯罪（上）

緒言

古來東西各國を通じ、民法上に於ける女性の地位は、公權私權共に著しく制限せられ、男子と同等の地位を許容せられざるにも拘はらず、刑法に於ては刑の執行に關する區々の規定を除けば、男女間に殆ど何等の差異なく、女子の犯罪行爲も男子の犯罪行爲も、之に對する刑罰は共に同一である。さりながら醫學上の立場から見れば、女子は元來男子とは啻に其の身心の狀態を異にするのみならず、其の精神生活は絕えず生殖機能の影響を受けて變調動搖し易く、從つて犯罪し易き衝動の下に置かれてゐる。されば女子は刑事上の責任に於ても男子と區別すべきもので、卽ち幼年者に於けると同じく、女子に對しても刑法上特別の保護を與ふることは、これまた女性保護の一要件であらねばならぬ。されば玆に女性の生殖機能と犯罪

との關係とを論究し、刑事責任上に於ても男子との間に區別を設くの要あることを明かにしたい。

（一）

大病理學者ウィルヒョウは、『女子の身體及び精神のあらゆる特殊性、即ち約言すれば、吾人が眞正の女子に女らしいものとして嘆美尊敬するもののすべては實に卵巣の附庸物である』"Alle Eigentünlichkeiten des Körpers und Geistes des Weibs, kurz alles, was wir an dem wahren Weib weibliches bewundern uud verehren, ist eine Dependence des Eierstocks" と云つた。實に女子の女子らしき所以は、其の生殖腺たる卵巣の存在に基くので、長く美しき頭髪、軟く白き肌膚、豊膩艶麗の體質、玲瓏として玉を轉がすが如き音聲、柔和、從順、貞節の心情等、あらゆる女性美は、卵巣より血液中に送入する内分泌物質、所謂「性ホルモン」Sexualhormon が肉體及び精神の兩方面に顯著なる影響を及ぼし、以て女子に特有の體質と心性とを喚起するが爲めである。されば若し女子に就いて卵巣を摘出除去すれば、吾人が嘆美する女性美は總て消退して、其の體質は粗剛となり、音聲は濁調を帶び、鼻下、頤部には往々粗鬆の鬚髯を發生し、其の性質も歪曲慳貪となつて、醜しい男性的女子に變化するやうになる。此の如く卵巣は女子の身心に對して直接に著しい影響を及ぼすものであるが、猶ほこれ以外に他の内分泌腺と相互的關係を有し、就中、

甲狀腺とは最も親密の關係がある。人の知るが如く、月經時、妊娠時に甲狀腺の腫大するのは、畢竟卵巣の內分泌作用に起因するものである。而して甲狀腺の內分泌物もまた卵巣に作用して其の機能を皷舞するものであるから、若し甲狀腺を摘出除去すれば、從つて卵巣も萎縮變性して、其の固有の機能を失つて了ふ。而して甲狀腺の內分泌物は一面に於ては神經中樞にも作用して、精神作用、就中感情を刺戟するもので、レヴィ・ロートシルドの名づけた如く『感情腺』Glande d'emotion と稱すべき一種の內分泌腺である。されば其の內分泌が亢進すれば、著しく精神は發揚し、情緒は過敏となつて且つ變動し易く、自制心の減退することゝなる。此の如き精神の異常は甲狀腺の腫大より惹起する特殊の內分泌疾患、即ちバゼドウ氏病の患者に於て能く認められる。フランクル・ホッホワルトの說に依れば、此患者は著しく精神が興奮發揚して、躁暴性色彩を帶ぶるに至ることもあり、また其の思想行爲も突發的となり、性慾も亢進して、動もすれば房事過度に陷らんとする傾向がある。併し健全なる者に於ても、月經期には甲狀腺が多少充血腫大してその內分泌が增進するものであるから、月經期に於て女性の精神が興奮し、感情が過敏となつて、些瑣たることにも泣き或は悲しみ、情緒が變換し易くなるのも、其の原因の一部が甲狀腺の內分泌增進に關係あるべきことは殆ど疑ひがない。蓋し甲狀腺が常態であつてもその內分泌が亢盛

する場合には、精神は興奮し易く、感情は旺盛となつて所謂多血質的性格Sanguinischer Charakter となることは近時醫學者の認むる處で、彼の「ヒステリー」、神經衰弱症、精神衰弱症等の症狀の下に記述せらるゝ處の精神障碍、例へば些瑣たる刺戟によつても情緒の興奮し易きが如き症狀は、佛國の醫學者は之を目して、甲狀腺機能亢進疾患――良性甲狀腺內分泌亢進症Hyperthyreoidie bénigne と看做してゐる程である。

それから妊娠中には、甲狀腺の腫脹の外に、腦下垂體なる內分泌腺の變化、即ちその前葉の肥大を來すものである。特發性腦下垂體肥大を患ふる者の精神變化は、遲鈍及び安靜であつて、往々嗜眠に陷るやうなこともある。若しその肥大した腦下垂體を手術によつて除去すれば、患者は初めて長夜の夢より醒めた如く、精神は再び明瞭快活となつて來る。這般の事實より見れば、妊婦に往々認めらるゝ精神障碍、就中、鬱憂性狀態の如きは、妊娠に伴ふ處の腦下垂體前葉の肥大に基く精神變調も、幾分か之に加はつてゐることが想察される。

以上說くが如く、卵巢、甲狀腺、腦下垂體の間には相互ひに一貫した連絡があつて、其の內分泌物は共に身心の兩方面に著しき影響を及ぼすものであるから、女子の生殖腺たる卵巢は啻に女子の性生活の中心たるのみならず、他の內分泌腺とも相互的關係を有し、神經系統に顯著なる影

響を及ぼして精神生活を左右する以上は、女性に於ける心理的障碍なり犯罪行爲なりが、生殖機能と一定必然の關係を有することの多いのもまた自明の理である。

（二）

抑々女子に於て、其の生殖機關に手術を加へた後に屢々精神障碍の起ること、また卵巣の除去によつて女子の精神生活に較著なる變化の起ることは、夙に有名なる精神病學者クレペリンの記述した處であるが、ボッシーもまた女性精神病者の大多數は生殖機關に病理的變化を有する者なることを説き、その婦人科的に診療せられざるがために癲狂院に留置せらるゝのであるとまで極言した。此の如く女性生殖機關が精神障碍の發生に關係ある以上は、從つて犯罪の成立にも一定の影響あることは固より明かである。ハブロック・エリスは其の著書『犯罪人と犯罪』Verbrecher und Verbrechen に於て、女性犯人の生殖機關が屢々病的變化を呈せることを記し、また其の月經の殆ど不規則なるか或は全然缺如せることを説き、ロンブロソーの名著『犯人及び賣笑婦としての女子』Das Weib als Verbrecherin und Prostituirte には、有名なる女性犯人の多數には月經の異常があり、また既に八九歳の頃から月經を通じた者もあつたことを記してある。それから獨逸の法學者ワインベルグが『法學と精神病學との境域問題』第六卷 Juristisch-psychiatrische

Grenzfragen. Bd. 6 の紙上に公にした論文中、その親しく觀察した一人の女性犯人に就いて記述した處を見るに、此の女は三十歲位で、これ迄再三窃盜罪を犯したものであるが、その既往歷を質して見ると、二十四歲頃迄は至つて正直勤勉で、世の模範的婦人と稱しても可なる程の女性であつたが、一旦卵巢の病に罹つて醫師に之を摘出して貰つてから、其の性質が一變して毒婦となり、再三窃盜萬引の罪を犯して牢獄に囚へられるやうになつたと云ふのである。ネッケの『女子に於ける犯罪と妄想』Verbrechen und Wahnsinn beim Weibe といふ一論文を讀むに、女性犯人の精神狀態を仔細に檢查した結果として、癲狂院に送つた者が二十乃至二十五%あつたと記してあるが、若し更に一步を進めて、その生殖機能の方面をも檢查したならば、或は其の多數の者に生殖機關の異常變化をも看出したかも知れない。

女性に於ける生殖機能と犯罪との關係の中、その最も明白なるものは、月經期に於ける犯罪である。月經期に於ては、卵巢の黃體より分泌する特殊の化學的物質は、一面に於ては血管系に作用して、之を擴張せしめ血壓を下降せしむるものであるから、腦髓に於ける血液循環にも變化が起つて充血狀態となり、また他の一面に於ては、前記の如く甲狀腺にも作用して其の內分泌を亢進せしむるが爲め、月經時には平素精神の健全なる者と雖も、其の異常變調を來し、殊に遺傳素

質ある者、神經病性の者に於ては、屢々顯著なる病的症狀を發するに至ることがある。されば月經時に於ては輕重の別こそあれ、精神の障碍を來すが普通であつて、通常多く認めらるゝものは、感情の亢進及び變動である。即ち些瑣たる刺戟でも情緒が興奮して、或は泣涕し或は憤怒し、また氣分も速かに變換し、心が落ちつかず、不機嫌不快活となることが多い。また平素は心情の通常なるものでも、强迫觀念の襲ふ所となつて、そのため强迫的衝動、例へば放火、自殺、偸盜等の行爲を演じ、また性慾も一般に亢進し、殊に病的女性では、著しく發揚するがため、破倫猥褻の行爲に出づることも稀でない。

月經期に發現する精神病、所謂「月經性精神病」Menstruationspsychose は概して壯年の女子に認むること多く、既に三十歳以後に至れば稀有である。而して遺傳性素因を有する者、或は情緒の感動、酒類濫用及び身體の疾患等の誘因ある者に發生するものであるが、其の症狀は種々であるにしても、その中、最も多く認められるのは、鬱憂病、躁病であつて、後者に於ては屢々性慾の亢進を伴ふものである。チーヘンの說に依れば、遺傳素質ある者には月經の起る前に當つて、系統的嫉妬妄想が起ることがある。また既に以前より精神病に罹つた者は、月經の際、その精神障碍が一層强くなつて來る。この事實に就いては、ボアモン等の見た處であるが、シュラーゲル

は精神病に罹つた女子の三十三％は月經時に於て、その刺戟興奮性甚だしく増進し、またその際屢々起るものは癲癇發作であつて、旣に慢性の躁鬱病に犯さるゝ者は、益々その病性の增惡することを認めた。

（三）

上記の如く、月經時には精神機能が障碍せらるゝがため、種々の犯罪行爲が演せられる。これは平素健全なる女性に於ても認めらるゝ處で、感情の過敏、自制力の減退、强迫的衝動等のため、自然に犯罪行爲を演ずるやうな危險が起るのである。ロンブロソーは警官に抵抗したため拘引せられた八十名の婦人中、九名を除くの他は、いづれも月經期の者であつたことを記し、レグラン・ソーユは巴里に於て萬引を犯した五十六人の女子の中、三十五人は月經期中の者であつたことを述べ、ペルマンは十七歲の少女が月經期に際して放火を企てたことを記し、クルーゲルスタインは百七人の自殺婦人に於て、いづれも月經の跡があつたことを認めた。また精神病的素質を有する女性が、月經期に精神障碍を發して、法を犯した實例に就いては、クラフト・エビングは身心の發育共に不完全なる一女子が、月經時に其の夫を殺害したことを記し、チユークは酒類を濫用した一女子が月經期に於て其の娘を殺したことを見、マビユは重症なる遺傳を有する婦人が月經

時に於て衝動的に窃盜行爲をなしたことを記し、ボールは月經時に際して常に急性精神病を發する一婦人が、その息子を殺したことを述べ、コウレフスキーは痴鈍なる一女子が月經期に際し、自宅に放火したことを記し、フイロインヂクスは高度の神經病性遺傳素因を有する一婦人が、月經の際、性慾が異常に興奮して同性愛情を催うし、之を拒絕した女友を殺害せんとした一例を報告し、アンエルは重症の遺傳素質ある一婦人が月經時に當つて、十歲以下の男兒を誘誑して猥褻行爲をなしたことや、また平素は性慾通常なるも、月經時には、その過敏旺盛となつて監視を要すべき者のあつたことを記述した。

さりながら月經期の犯罪には萬引が最も多い。ラクエルは精神の健全なる女子と雖も、月經時には往々昏朦狀態となつて、萬引の罪を犯すことを述べ、之を以て一種の病的行爲と看做したが、デユビユアソンの說に依るも、大商店に於て萬引をなした百名の婦人は、皆悉く月經期に際會した者であつた。而してラクエルの記した處に徵すれば、大商店では、身分の善き婦人の萬引が多く、その盜む處の商品は殆ど實用的價値の少きもの許りで、若し店員や警官の發見する處となれば直ちに之を自白して其の罪惡を懺悔し、或は犯人の家宅を搜索するに、件の物品が巧みに隱匿せらるゝとのことであるが、併し此の如き女性は一般に窃盜の强迫的興味を有する一種の病的女

性であつて、始めから物品を窃取せんとの考から商店に入るのでは無く、商店に陳列した物品の中、迅速に手に取り且つ隠し易いものを一見すると、之を窃取せんとする心が忽ち起つて、之を抑制することが出來ず、遂に萬引を犯すのである。デユピユアンソンが萬引女百二十人に就いて調査した處に依るに、精神の全く常態であつた者は僅かに九名であつて、他は悉く病的異常の女性であつた。即ち八人は腦硬化、十三人は先天性精神薄弱、九人は錯覺を有する癲狂、二十六人は神經衰弱、三十七人は「ヒステリー」で、殘りの十五人は月經姙娠に因る精神障碍であつた。

レツプマンは『大商店に於ける窃盗』Ueber Diebstähle in den grossen Kaufhäusern なる著書に於て、月經の萬引に及ぼす影響を説き、またグツテンも自己の親しく檢査した萬引女の殆ど總てが、月經期中のものであつたことを述べたが、其の原因は茲に詳説する迄もなく、月經期には健全なる女子でも、一時精神作用の變調を來し、自制力の減少するがためで、月經時の女性が平素の時よりも催眠術に善く感ずるのを見ても、クルーストンの云つた如く、刺戟に感應する性質が大となり、暗示感性の亢進せることが判る。新聞の社會記事には、中流以上の婦人でありながら、萬引の罪を犯す者のあることが屢々載つてあるが、此等は月經期に際會して一時精神機能の障碍を來し、自制力の減少した結果に出づる者が、其の多數を占めてゐるに違ひない。デユピユ

アツンの記述した下記の一例の如きは蓋しその適例の一である。それは或富豪の細君であつて、平素は精神機能常態なるも、月經期になると異常が起つて來るので、主人は細君を戸外に出さぬやうに家の内に閉ぢ込め、自ら嚴重に監督してゐたのであるが、然るに或日のこと、その細君は主人の一寸外出した留守を窺うて戸外に飛び出し、自分は平素魚肉を食せざるにも拘はらず、臺所より網を取り出し、魚問屋に行つて魚を買ひ、歸宅の途に就いたが、不圖或商店の前を通り過ぎた處から、その內に這入り、衆人の見てゐる前で、二個の櫛とコルセット締を盗み、門口にまで急いだ處、敷居に躓いて倒れたため、萬引したことが分つて警官に拘引せられたが、其の申立には、自宅を出てからは凡て夢の如く、何事も覺えて居らぬとのことであつた。この一實例は月經期に於ける精神障碍の結果、昏朦狀態の下に犯した萬引であることは殆ど疑が無い。(此項未完)

自然の防姙作用

（一）

產兒制限論の論議せらるゝ今日、私は表記の題目の下に、如何に自然が賢き注意を以て一定度まで姙娠を防遏するかと云ふ生物學上の事實を叙說して見たい。今玆に之を說くに當り『細胞毒』Zytotoxin及び『特殊防禦醱酵素』Spezifische Abwehrfermenteに關する知見を一言するの要を感ずる。

試みに人間または動物の血液內に、異種の細胞或は蛋白質を注射すると、その動物なり人間なりの血液中には、該細胞或は蛋白質を破壞溶解する特殊の物質が發現する。是れ實に自然の防禦反應と稱すべき現象で、細胞を溶解するものを『細胞毒』、蛋白質を「ペプトン」化するものを『特殊防禦醱酵素』と稱するのである。例へば、甲動物の血管內に乙動物の肝臟細胞を注入すると、其の甲動物の血液中には、乙動物の肝臟細胞を溶解すべき特殊の物質、即ち細胞毒が發現し、また或動物の血管內に他動物の成分たる蛋白質を注入すると、其の動物の血液中には、注入せられた蛋白質を分解すべき特殊の醱酵素が發現する。併し這般の現象はまた同種の動物に於ても認め

らるゝ處で、必ずしも異種動物間に限つたことは無い。されば上記の事實に於けると同じく、一の動物の精蟲をば他種或は同種動物の血管内に注入すると、其の動物の血液内には精蟲を溶解する細胞毒即ち「精液毒」Spermatoxin が發現する。此の事實は既にメチニコッフ、ランドスタイネル等の證明した處である。されば一の動物の睾丸越幾斯を雌性動物の體内に注入して、精液毒を發生せしむるならば、其の雌をして一時不姙症たらしむることが出來る筈である。這般の見地より、サヴィニー、カスタノー、ヴエネマーは相期せずして前記の實驗を試み、一時性不姙を惹起せしむることが出來た。而して一昨年の末に至り、ライプチッヒ大學生理學教室のチットレルは專ら家兎に就いて研究し、雄兎の精液を雌兎の靜脈内に注射すると既に六乃至八日にして其の血液は精蟲を速かに凝集し、且つその運動を停止するのみならず、此の時期に於て雌兎の全く不姙となることを認めた。但しこれは固より一時性であつて、軈て時日を經過すると再び姙孕性が恢復するものである。

以上は精液毒に關する研究であるが、他の一面に於ては、精蟲の成分たる蛋白質を溶解する特殊の酸酵素が、血液中に發現する實驗的研究もある。それはワルドスタイン及びエクレルの研究であつて、即ち動物を交接せしめた後、雌の血液を取つて檢査して見ると、交接後、早きは既に

數時間、遲きも二十四時間後に、精蟲に對する特殊防禦酸酵素が現はれる。それは交接によつて精蟲が雌の生殖機關より血液内に進入するため、雌の身體内には精蟲の蛋白成分に對する特殊の酸酵素が形成せられるので、今その雌の血清を取つて睾丸越幾斯に加へると、其血清中に存する特殊酸酵素は越幾斯の蛋白成分を分解して、「ペプトン」及び「アミノ」酸を形成するものである。

(二)

以上述べた處を概括すれば、男性生殖素たる精蟲が女體の血液内に進入する時は、女體は之に對する反應として、精蟲を溶解する『精液毒』また精蟲の蛋白成分を分解する特殊防禦酸酵素を形成し、此等の物質が血液中に現出して其の存在する限り、爾後進入する精蟲は之によつて殺滅せらるゝのである。されば性交によつて女性生殖機關内に射出せられた精液の一部分が吸收せられて女體の血液内に入り、上記の如く、精蟲に對抗して之を殺滅せんとする特殊の物質が形成せられ、其の血液中に存在する間は、爾後女性生殖機關内に射出せらるゝ精蟲を殺滅して姙娠を自然に豫防することは固より論を俟たない。想ふに頻回異性に接する賣笑婦、及び房事過度なる夫婦に不姙の多い理由は諸種の原因あるにしても、前記の如き生物學的機轉にも基因すべきことは蓋し理の看易き處である。

上記の見地より觀れば、女體は性交後男性生殖素に對する防禦性物質を生じ、一定時日間は性交を行つても姙娠を豫防する働きを自然に具へてゐる。換言すれば、性交によつて男子の征服を受けた女性は、之に對する復讐として男性生殖素を破壞殺滅するのである。

性交後に於ける自然の防姙作用は單に一時性であるが、女子が一たび姙娠すると、その分娩するまでは、幾回性交を行つても決して再び姙娠することは無い。それは如何なる理由に基くかと云ふに、姙娠後、卵巢内の黃體及び間質腺の內分泌物が、卵子の發育成熟を抑制するからである。此のことは夙にビアート及びプレナンが始めて唱へた處であるが、ヘルマン・スタインは卵巢黃體より製出した物質を家兎及び鼠の雌に注射したが、其の卵巢內に於ける卵子は成熟することも無く、また排出せらるゝこともなきを認め、ネースルンドも姙娠した牝牛の卵巢黃體より製出した越幾斯を雌兎に注射して、一時之を不姙たらしむることが出來た。而して最近に至り、ハーベルラントは姙娠後半期にある動物の卵巢をば他の雌動物の體內に移植した後交尾せしめたが、一定期間は毫も姙娠すること無きを認めた。此等の實驗に徵すれば、姙娠動物の卵巢には卵子の發育成熟を抑制する特殊の內分泌物が形成せられ、之がために姙娠中に再姙しないことが判る。されば姙娠動物より卵巢を取つて、其の越幾斯を製出し之を注射したならば、一定の時日間姙娠を豫防することが出來る譯である。

性慾の昇華に就いて

(一)

「昇華」Sublimierung とは元來化學上の用語で、熱を受けた固體が液體とならずに、直ちに氣體に變化することを云ふのである。然るに精神分析法の創唱者たるフロイドは、此の化學上の用語をば人間の性的本能の變形作用に襲用し、元來は性的であつた慾望が性的ならざる他の方面に轉向して、之に新しい興味を有つやうになる働きを昇華作用と名づけた。それは恰も物質界に於けるエネルギーの變形保存と同じであつて、即ち一のエネルギーが他のエネルギーに變ずるが如くに、性的本能もまた他の方面の事柄に變じて、而も間接に其の慾望を滿足することが即ち玆に謂ふ處の昇華作用である。

抑々性慾の代償或は等價 Aequivalent として純肉體的なる性的行爲の代りに、詩歌、美術、宗敎等の如き精神的創作物の現はるゝことに就いては、夙にイワン・ブロッホの論じた處で、同氏は此等の想像的所產物をば性的行爲の等價 Aequivalent sexueller Akt といひ、人間の想像的生

活 Phantasieleben は性慾の自然的實行が減少した際に於て、性的等價を供給するものであると云つた。然るに、フロイドは性慾が他の方面の事項目的に振り向けられて、それに新しい興味を有つやうになつた無意識の轉向變形に對して『昇華』なる名稱を附したのである。併しその根本的事實に於ては、ブロッホの所謂性慾等價の說と左程の逕庭も無く、唯之に對する說明を新たに附加した迄である。

性慾の昇華は、先づ職業の選擇に於て之を證明することが出來る。生來「ザヂスムス」(虐待性淫亂症)の傾向を有する者が屠殺者或は外科醫等となり、或は「エキスヒビチオン」(陰部暴露)の傾向を有する者が、年長じて後、俳優或は競技家等となつて無意識にその慾望を滿足するが如きは、變態性慾の職業的昇華と稱すべきものであるが、併しまた他の一面に於て正常の性慾も之が滿足せられざる場合には、異性を愛する代りに、人間或は社會全體を愛するが如き利他的活動に變化するに至ることがある。例へば慈善、看護事業に一身を捧ぐるが如き、國家に對して熱愛忠誠の至情を盡すが如き、即ち此の類である。英國有名の政治家ピットが獨身生活を以て世を終りながら、國家を以て自已の妻なりと言明し、專心國政に盡瘁したが如き、實に此の好例の一である。また愛すべき子なく愛さるべき夫も無き老孃寡婦が、猫、犬の如き小動物を愛する傾向の

あるのは、異性に對する愛情が動物に振り向けられた結果であつて、歐洲に於て動物の生體解剖に反對する婦人の多くは大抵此種の女性である。

(二)

性慾はまた宗教信仰の方面にも轉向することの多いものである。之を古今の事實に徴するに、青春の身にして塵世を見限り、身を寺院に投じて僧となり、尼となるの動機には、失戀に基くことが尠く無い。是れ畢竟生有の性的本能に基く感情を宗教信仰の方面に振り向け、現實に熱愛者を失つた代償として、擬人的なる「ゴツト」、佛陀、基督等に愛着し、燃ゆるが如き熱情を之に捧げてゐるのである。歐州に於ては神に對する愛を天上の愛 Himmelische Liebe といひ、男女間の愛情を地上の愛 Irdische Liebe と云ひ、兩者の間には愛の對象に一身を委して熱烈無限の愛情を捧げる點に於て共通性を有つてゐるから、所謂地上の愛が天上の愛に轉向するのも決して異とするに足らない。我國に於ても、昔から『法悦』と云つて、僧尼が佛を專念し三昧の境に入る時には、性的感覺と同様なる快感に襲はれると云ふことであるが、エリスの説に依るも、熱烈に敬虔に神に奉仕してゐる時、遺精する僧侶があり、また神の禮拜中、情熱に苦しむ婦人もある。思ふに禁慾生活をなした僧尼の中にも、所謂法悦の三昧に入つて肉慾の代償を得てゐる者が隨分多

いかも知れない。

熱烈敬虔なる基督教信者として世に知られたツインツエンドルフ（十七世紀時代の人）の生活は、性慾の衝動及び感情が全く宗教の方面に轉向せられた顯著の實例の一である。彼は少年時代より燃ゆるが如き同性的愛情を抱き、基督を以て自己の精神上の新郎といひ、また「ザヂスムス」的傾向があつて、基督の創傷を脳中に想像することによつて最高の快感を覺えた。彼が行つた宗教的儀式、即ち同胞間の接吻、寢ず番、愛の馳走等は、いづれも基督をば彼の性的生活の對象とする情熱の要求から起つたものに外ならない。これと揆を同うするものは、女性としては、ゴットフリード・ケルケルの作『ドロテアの花籠』Dorotheas Blumenkörbehen に描かれた「ドロテア」である。彼女は一時テオフィルスといふ男を愛してゐたが、併しその戀の到底成就することが出來ないのを悟つた時、その燃ゆるが如き愛をば基督に轉じた。其の後テオフィルスが再び彼女に近いた時には、最早や彼女は此の男に露微塵の愛情をも有せず、唯天にある新郎の基督が、如何に不死の美しさを以て彼女の來るのを待ちつゝあるか、いかに彼女に無窮の生命の薔薇を與ふべく準備しつゝあるかを語るのみであつた。

（三）

さりながら詩歌、藝術等の精神的創作物が、性慾の昇華或は等價として現はるゝと云ふ所説に就いては、多少の異論がある。之に關して少し許り管見を披攊したい。

抑々詩歌、藝術が性慾、愛情を根抵とし、或は之によつて助成せらるゝことは固より疑ひなき處で、クラフト・エビングも「性慾の基礎なくして、藝術詩歌のあるべき筈は無い。藝術詩歌は愛情に於て空想の温熱を得るもので、これ無くては眞の藝術の創作は不可能である。また詩と藝術とは色情の火に於て、その焰と熱とを得るのである。是れ詩人藝術家の好色なる所以である」と云ひ、メチニコッフも「藝術家の才能と性的生活との間に密接關係あることは眞である。詩人歌人はその感ずる愛情によつて其の藝術に結びつけられる」といひ、メビウスも「性慾は精神的生活に必要なるもので、これ無くしては學才も技能も發達しない。第一流の藝術家の創作が、多くは性慾の旺盛なる壯年時代に出來上つたことは周知の事實である。固より老年に至つても、其の技術、知識、經驗は依然として留存し、從つて創作に從ふことは出來るにしても、併し神彩に缺けてゐる。學者は愛のために研究を妨げらるゝこともあるも、藝術家に於ては、却つて創造力が鼓舞せらるゝものである」といつた。

審美思想が思春期に至つて始めて完全に發現することや、愛情が青年の感情思想を刺戟鼓舞し

て詩的空想に耽らしむることや、また多くの藝術家詩人の生活に於て、愛が其の創作に有力なる刺衝を與へることは、明白なる事實であつて、ゲーテーの傑作なる「ファウスト」や「ウエルテル」等が、彼の戀愛生活に於ける出來事と一定の關係を有つてゐることは固より疑ふの餘地が無い。また他の一面より觀察するに、これ迄世に知られた去勢者 Kastraten の中には、卓越した藝術家は一人も無く、唯詩人としてはアベラルド一人のみである。それとても四十歳に至つて去勢したので、爾來その詩作を廢止したのであつた。

（四）

さりながら、イワン・ブロッホの述べた如くに、詩歌藝術を以て性慾の代償等價と看做すのは詩人藝術家の天才を無視し、また其の優越なる創作の價値を傷つけるものである。蓋しレーウエンフエルドも說いたやうに、天才の創造力は必ずしも性的衝動に由來するもので無い。唯性慾なり愛情なりが、詩人藝術家の創造力を鼓舞することは疑ひなき事實としても、而も其の創作の內容に對しては必ずしも影響を及ぼすもので無く、時としては却つて創造力を銷磨することがある。それは戀愛の不幸に終つた場合で、此の如き詩人に創造力の永續したやうな事實は殆ど無い。女流詩人アンネット・フオン・ドロスト・フユルスホッフは、其の愛したレウイン・シユッキングが

ルイゼ・フオン・ガルと婚約を結んだ後は、其の詩作力を全く失つて了つた。美術家に於てもまた此の如き事實が認められる。巨匠ミケランゼロは其の熱愛したヴイクトリア・コロンナーの永眠した後、彼は彫刻に用ゆる槌は猶ほ之を振ひ能ふも、獨り『美』を作るべき『天の槌』——創作力——は全く消え失せ、彼は恰も火の消えた炭のやうになつたと短詩に詠じたことがある。

詩人藝術家が其の愛する對象を嘆美するがために創作することは、固より明かなる事實で、例へばペトラルカの短詩篇、セクスピアの「ロメオ、チユリー」、シルレルの「ドン、カルロス」、ゲーテーの「ウエルテル」「フアウスト」等の如きは、其の戀愛生活の所產物と目すべきものであつても、併し單に愛情や、性慾のみでは此等の創作は出來ない。如何に愛情濃く、性慾强き者であつても、藝術的素質なく或は其の發育せざる者ならば、到底それが藝術的產物として現はれる筈は無い。天才には創造の衝動がある。其の源泉は必ずしも性慾で無い。唯それが創造力を刺戟鼓舞するに過ぎないのである。

日本に於ける生殖器崇拜の起源及び成立に就いて（中）

（三）

我國の古傳說には、生殖神話が可なり多く、その中には生殖器崇拜の表徵と認むべきものも尠く無い。この事に就いては旣に江戶時代の學者佐藤信淵も注意した處で、其の著『鎔化育論』に於て其の所見を述べてゐるが、私共の見る處を以てするも、イザナギ、イザナミの陰陽二神が天の浮橋に立ち、天の瓊矛を以て滄溟を探り、その矛鋒の滴が凝つてオノコロ島となつたと云ふ神話は、天の瓊矛が男根を象徵し、矛滴の滴が精液を意味したものと看做すべく、また陰神二神が「ミトノマグハイ」をなして大八州の國土を生んだと云ふ神話も、國土の發生を神の生殖力に歸したものに外ならぬ。其他、我國の神話には、女陰（ホト）に關する說話が多く、スサノオの命が天斑馬を逆剝に剝いで服屋の中へ投げ込んだ時、織女の一人はホトを衝いて死んだと云ひ、天照大神が天岩戶に隱れた時、アマノウスメの命が裳緒をホトにまで垂れて踊つたといひ、イザナ

ミの尊の屍體のホトに折く雷がゐたと云ひ、大物主神が丹塗の矢に化けて、セヤタトラ姫のホトを衝いたと云ふやうな神話は、女陰を男根と共に神祕視した上古時代の思想のほのめきと看做していい。神社の前にある鳥居が女陰の象徴であることはスタールも言つた處で、鳥居に類する建物が滿州方面にも認めらるゝ事實に徴すれば、女陰崇拜の風習が大陸より輸入せられて、上古時代から行はれたことを想定するに難く無い。

男根を岐神（フナド或はクナドの神）として崇拜したことも上古時代より行はれたらしい。元來岐神は『日本紀』に依るに、イザナギの尊の投げた杖から成つた神で、出雲國讓りの際、經津主神の率いる皇軍の嚮導となり四方を鎭定した神である。道の嚮導をしたのであるから、岐神といふ名が負はせられ、それが更に道路の守護、行人の安寧を司ざる神となり、惡魔の來るのを塞ぎ止むる『塞の神』（サヘの神）となり、それが轉訛して『幸の神』（サヒの神）となつて、幸福、除災、開運、良緣、出産等を祈る對象となつたものらしい。而して岐神を一に道祖神と稱するのは、『共工氏の子遠游を好む。故に死後祀つて以て祖神となす』とある支那の傳説に影響せられたもので、道の嚮導に當つた岐神と遠游を好む祖神とを混同し、或は附會して道祖神と稱するに至つたのである。既に奈良朝時代の頃よりフナドの神（岐神）を道祖神と唱へ、平安朝時代に入つ

てよりは、更に「サヘの神」「サヒの神」（幸の神）と呼ぶやうになつた。而して岐神、道祖神はまた一に石の神（シヤクの神）と稱せられ、最初は石を以て其の神體となし道の岐に立てゝ祀つたもので、其の石は即ち男根の形に模したものであつた。何故に石を以て神體としたかと云ふに、恐らくは上古時代には石を以て邪神を防ぐ神祕力あるものと思つてゐたからであらう。それはイザナギの命が千曳石を以て邪神となられたイザナミの命を防ぎ、大國主神が五百引石を戸に立て掛けて、スサノオの命を防がれたと云ふ神話に徴しても明かである。此の如く石が邪神を防ぐといふ神祕力と、一方には男根が禍害を防ぐといふ神祕力とを信ずるの念は相倚り相待つて男根の形に類似した自然石或は男根の形を彫刻した石を神體として道の岐に立て、啻に道路守護の神としてのみならず、除災、開運、良縁、安産等を祈る神として之を祀るに至つたのである。

我國の岐神、道祖神に類する性的崇拜物は朝鮮にもある。それは縣道、郡道といふやうな道路に、里程を隔てゝ屹立した石製或は木製の奇怪なる容貌をなした圓柱狀の建物で、所謂天下大將軍、地下女將軍と稱せらるゝものであるが、これが生殖器崇拜の變形物たることは殆ど疑ひが無い。また朝鮮には官衙の守護神として、府君堂といふ堂宇が全道を通じて到る處にあり、その內には石製木製の男根を奉祀してある。此の如き事實に據つて推考すれば、我國の岐神と連絡あるべきことは明かで、恐らくは大陸に於ける生殖器崇拜の風習も上古時代より我國に輸入せられて、岐神崇拜の起源となつたのではあるまいかとも思はれる。

男娼考

男娼 Männliche Prostitution とは、同性の愛を好む男子の需要に應ずる職業的賣笑者である。歐洲の大都會には之を見ること尠からざれども、吾國に於ては今日此の如き不倫の醜業者は無い。しかし江戸時代には天保の末頃までは、江戸、京阪の都市に蔭間、色子等と稱した男娼があり、且つ之を置く處の娼家もあつて、一時は公然盛んに醜業を營んだものである。

抑々男色の陋風は夙に上古時代より行はれたもので『日本紀』神功皇后紀の章中にある『阿豆那比之罪』(あづなひの罪)といふのは男色のことを指したものらしい。(『日本紀標註』參照)奈良朝時代を經て、平安朝時代に至つて甚だ盛んとなり、僧侶及び貴族間に美童の寵愛せられたことは周知の事實であるが、併し男娼が始めて現はれたのは鎌倉時代で、同時代に成つた『續門葉和歌集』の序文の中に『迷尋童郎之戀志、過栗阪野之兒店』とあるを見れば、當時栗阪野に美少年を置いた娼家のあつたことが明かである。さりながら鎌倉時代より室町時代の末にかけて男色の風盛んであつたものゝ、前記以外に男娼と認むべきものを古記錄に徵することが出來ないから、恐らくは男娼が世に在つたにしても人眼に立つ程多く無かつたに相違ない。

然るに江戸時代の初期に至つて、公然男娼が現はれ、僧侶武士等を顧客として非倫の醜業を營む者が、年を逐うて増して來た。男娼の起りは所謂若衆歌舞伎で、その初めは女歌舞伎に對抗して起つたものである。元和元年京都に於て、段助といふ者の創めた男芝居が若衆歌舞伎の嚆矢で、之に次いで寛永元年には、猿若勘三郎が江戸に中村座を開いた。而して寛永六年、女歌舞伎が禁ぜられた結果、若衆歌舞伎は大に勢を得て益々世に流行するやうになつた。併し若衆歌舞伎なるものの起つたのは藝術本位では無く、從來より男色が行はれて、之を好む者が僧侶武士中に多く、且つ武士道の慣習として此の不倫の惡風を奨勵する傾向のあつたが爲め、機を見、利を射るに巧みなる者は、その以前、佐渡島歌舞伎が遊女を餌にして嫖客を釣つた顰に倣ひ、美少年の歌舞伎を催うして、當時に於ける人心の弱點に投じたのである。されば若衆歌舞伎は上流より下流を通じて愛玩せられ、美少年の色に溺るゝ者多く、風俗を亂すの虞甚だしくなつたので、幕府は慶安元年『踊子役者衆道の義に付、無體成儀堅く法度に被仰付候間、若し違背仕候はゞ穿鑿の上、急度曲事に可被仰付候』といふ立札を出した。併しこの位では到底滔々たる男色の惡風を如何ともすることが出來なかつたので、遂に江戸の町奉行は斷然若衆歌舞伎を禁ずるに至つた。それは承應元年のことで、當時如何に美少年俳優が歡迎せられたかは、『京童』に『これに魂を奪はれて、有頂天になりて通ふ。それのみならず、大名高家へ召し出され、御酒盛りの御相手に酌などになり云々』とあるを見ても明かである。曩に女歌舞伎を禁

止して風俗の紊亂を防止せんとした當局者は、更に若衆歌舞伎が流行して、その弊害の殆ど女歌舞伎と同樣なるに驚き遂に之を禁止するに至つたので、猿若、村山、山村の三劇場に對し興行停止の嚴令を下したのである。

當時幕府の措置は全然劇場を根本的に撲滅するにあつた。それは啻に男色の弊風甚だしきのみならず、また他の一面に於て姦通が行はれ、某侯の室が俳優と通じて情死を圖つたやうなことも起つたからである。されど劇場の營業者にとつては、歌舞伎の禁止は一大打擊であるから、屢々嘆願に及び、翌年三月に至つて漸く再營業の許可を得たけれども、幕府の方では物眞似狂言盡といふ名の下に歌舞伎の興行を許すと共に、男色の弊風を杜絕するがため、俳優をして其の前髮を剃らしめ『野郎』と改稱せしめた。茲に於てか、若衆歌舞伎の代りに野郎歌舞伎が現はるゝやうになつた。當局者が彼等の前髮を剃去せしめて野郎頭にしたのは、言ふ迄もなく恰も今日の婦人に髮を剃らせたやうなもので、頭童の美色を奪ふものと思つたからである。併し俳優の方でも決して拔目なく、剃立頭の沒趣味を掩はんがため、前髮の跡へ色染の布帛を卷き、或は置手拭といつて、色絹を鉢卷のやうに額に當て、或は前髮鬘といつて付鬘をなして舞臺に現はれた。そこで幕府は再び令を發して、『野郎並女形俳優仕候者、鬘を掛け申間敷候。但し手拭、綿帽子などは苦しからず』と達した爲め、紫色の縮緬を以て剃立頭を掩ふやうになり、却つて優美の度を加へた。所謂野郎帽子といふのが是れである。

元祿の頃よりまたもや野郎の賣笑が大に行は

るゝやうになり、娼妓の如く金に代へて男色を鬻ぎ、その服裝容姿も女子のやうに專ら優弱なるを旨とし、果ては頭髮までも女に擬する者さへ現はるゝに至つた。此の如く男娼の始めは芝居役者で、客の招きに應じて茶屋に來り色を賣つたものであるが、當時は之を稱して舞臺子或は色子と云つた。西鶴の『男色大鑑』に『子供に始めて近づきになるも、芝居歸りを濱の水茶屋の噂に呼びこませ、かりそめの盃して聲のある子には小唄所望して思ふまゝの遊興、その後、遊び仲間より集めて銀一兩贈れば、釣髭のある男、太夫殿より禮に來て、只今は千萬忝なき仕合せと、三つ指つきて長口上申したりと、大笑ひして暮せしに、今時の金剛賣に二兩づゝ取らせても、さのみ嬉しがる顏付もせず、少し露うつ（祝義をやること）間が遲ければ、長き夜を四つ前から呼び立てゝ明日の舞臺缺けると云ふ。戀の最中に氣の毒ぞかし云々』とある。

右の舞臺子の外に、蔭間、飛子といふ男娼も現はれ、從つて其の色を業とする青樓も生じて來た。蔭間とは專ら宴席にのみ侍して色を賣る者を云ひ、飛子とは諸國を遍歷して媚を鬻ぐ者を云ふ。『人倫訓蒙圖彙』に『狂言役者男子を遊女屋の女を抱へるが如くに置きて藝を仕入れ、十四五にもなれば、それ〴〵芝居へ出だし、藝よく名を取れば吾が門口に太筆にて誰が宿と苗字を記し、夜は戸口の掛行燈に名をつけ置くなり。未だ舞臺へ出ぬを蔭間といひ、他國をまわるを飛子といふ』とある。而して此等の男娼の中、最高の地位を占めたのは舞臺子で、寶暦年代に出た『風俗七游談』にも『先づ舞臺子を上品とす』とある。而して男娼は其の少年時代の

みならず、二十三十の年頃となつても、猶は正業に復せずして依然媚を賣つた者も尠く無い。『麓の色』に荻野八重桐といふ色子が六十歳になるまでも男色を賣つたことを記し、また『御前義經記』にも『二十をうち越して三十までを若衆盛りにたとへ、それ過ぎて誠の念者と定め、男になつても見捨てず睦言かはることなし』とあり、また『志道軒傳』の中にも『四十過ぎての振袖、頰髭のあと青ざめたるも見ゆ。これ等を玩ぶ人は好の至れるなり』とある。されど多くは十歳より二十歳位までを男娼の限度とした。

男娼の最盛期は、寶暦、明和、安永、天明の時代で、即ち風俗の最も墮落した時代であつた。江戸、大阪、京都等には男娼を抱へた靑樓も多く、それを一般に蔭間茶屋と稱へた。『嬉游笑覽』に江戸は芳町を始めとして、木挽町、湯島天神、麹町天神、塗師町代地、神田花房町、芝神明前、此の七ヶ所、天明の末までありけり。近歲は四ヶ所絕えて芳町、湯島、芝明神のみ殘れり』と記し、『守貞漫稿』には『京師は鴨川、東の宮川町と云ふ遊女町の中にあり。大阪は阪町と云ふ遊女町の中にあり』とある。寶暦より安永天明の頃までは、江戸中で男娼の數二百三十餘人の多きに達し、其の舞臺子なると蔭間なるとを問はず、女娼の如くに客の座敷に招かれて酒の相手ともなり、また歌舞座興をも演じた。最初は所謂若衆姿であつたが、次第に柔弱化して女粧するに至り、大振袖または中振袖を着し、髮も島田、其他處女と同じく、時々の流行に從つたものである。併し僧侶の客に連れられて物見遊參、芝居見物に行く時には、黑紋つき振袖或は

詰袖に袴をつけ、大小をさして小姓に扮することもある。(『守貞漫稿』)男娼が染色の振袖を着、幅廣の帶を締め、頭髪も鬢を出し、髷も女に擬したことは明和安永以來の風習であつて、江戸の男子は一般に氣が荒く、男娼に成り難いため、京阪地方より江戸に幼年の男子を賣り下したものである。

男娼の如何に盛んであつたかは、風來山人の『飛花落葉』中にある『江戸男色細見序』に『堺町、木挽町には四季折り〳〵の番附ありて世の人普ねく有り難かれども、恨むらくは此道の盛んなることを知らざる愚痴無智の凡夫もあらんかと、贔屓の腕をさすりつゝ、自ら有頂天となり、夢中に氣を取りて、ところまだらの譫語をそこはかと無く書きつくれば云々』と書し、また『志道軒傳』の中にも『木挽町に引かるゝ客は、身代は大鋸屑の如く、神明參りの歸り足は、本地垂跡の兩道になづむ。湯島の二階は千里の目を極め、英町の向側は隣よりもまた近し。よごれをふくかやば町、すが眼もまじる神田の明神、外になければ、市ヶ谷の八幡前、天滿神のあたり近き室咲きの梅手折らんと、麴町には疑るを樂む士、氣を取らぬ土橋より云々』とあるを見ても其の一班を察知することが出來る。此等の男娼は前記の如く女のやうに裝うても、其の名のみは男名を名乘つたものである。但しそれとても梅太郎、藤松、松次、菊之助、染吉などゝ云ふ優弱なる名であつた。『守貞漫稿』に記する處に依れば、京阪の男娼は皆必ず俳優の弟子となり、其の師匠の家號を冠して、中村某、嵐某などゝ稱へた。寶暦七年版の北尾辰宣の『繪本小倉塵』にある大阪阪町の蔭間茶屋の圖

を見るに、其の店先に蔭間の名を記した掛行燈を掛けてあるが、其の姓名は俳優名で、中村梅二郎、村山千代勢、市川幾世、嵐菊之丞、瀬川染吉、芳澤松太郎、花井藤松などゝある。而して男娼の大に流行した時代には、深川の藝者屋の中には其の向ふを張らんとて、藝者をわざと蔭間風に仕立て、男髷に結ばせて羽織を着せ、其の名さへ千代吉、鶴治、甚八などゝ呼ばせて男娼に對向せしめたものもあつた。これが起源となつて一般に藝者の名は男名を附することゝなり、遂に今日にまで及んでゐる。

男娼の最も流行したのは安永天明の時代であつて、其の頃の春畫には男色を描いた者も尠く無い。當時男娼の揚代金は一刻一分、二刻一分二朱で、青樓一宵の値と同じであつた。江戸市中の男娼の數は二百三十人に迄達し、芳町だけでも百人餘もあつたことは「疑問錄」にも記してある。文政頃より次第に衰へて「すつぽんの直段を聞いて恐れけり」といふ狂句も出で、天保年代に入つては餘程衰へて來た所へ、同十三年、水野越前守の風俗改革で、男娼を禁止した。當時芳町では、男娼十八、神明は十一人位であつたと云ふから、其の衰微の狀推して知るべしである。そこへ禁止の令が下つたから、爾後、男娼は市井より殆ど其の跡を絶つに至つた。

天保の改革以後、江戸市中の蔭間茶屋は悉く取拂はれて了つたが、併し今日も猶ほ湯島にあつた蔭間茶屋の跡を記念に留めてゐるのは、湯島の料理屋魚十の軒頭に靡いた翠柳である。湯島の切り通しから鳥居を潜ると、直ぐその向うの方にある魚十の門近くに一株の柳の樹を見るであらう。このあたりが、其の昔、藤村屋、加賀屋、三谷屋、津賀屋、千代本などゝいふ蔭間茶屋が軒を並べてゐた處である。而して此の柳は加賀屋の抱への男娼松次といふ者の植ゑたものだそうで、その來歷を聞くと、松次は或年の

初卯に、馴染の客に連れられて、龜井戸に參詣し、その歸りに肩にした繭玉の柳を何心なく地にさしたのが根を持ち枝を垂れて、幾春の風に梳りつゝ、遂に此の老幹となつたとのことである。當時湯島にあつた男娼の數は三十有餘人で、その顧客は上野三十六坊の寺院の僧侶であつた。銀の兩天に蔦の定紋打つたのを頭にさし、裾模樣の着物に立て矢の字、虛無僧下駄を穿いて、新年の元旦などには振袖姿愛らしく、追羽根をつく有樣など、眞の女のやうであつた。但し客に連れられて廣小路の大師の緣日に往く時や、山内へ招かるゝ時などは、男仕立にして外出するのが常であつた。湯島が男色の本場として世に知られたのは、門地の高い上野の僧侶を得意としてゐたからである。其の中にも名高かつた湯島の男娼は、藤村屋抱への力松といふ者で、如何にも男のやうに美しかつたから、上野三十六坊の院主三十六人が悉くその客となつて、力松の名は湯島から上野にかけて響き渡つたさうである。

江戸時代で有名なる女形俳優の中には、男娼出身の者が多かつた。『嬉游笑覽』に『色子ども末には皆役者となれり。女形は多分此の者どもより出でゝ上手の地位に至りしもありけるとなり。既に當時の尾上松祿、岩井喜代郎等も舞臺子にてありしなり云々』とある。男娼や女形が其の體質に於ても女型に類似し、また精神狀態も女性的情調を帶び、所謂「アンドロギニー」Androgynie（女性的男子）と認むべきものであることは、彼等の似顏繪、素顏繪、また其の逸話に關する記錄に徵しても明かであつて、彼等は所謂女性的男色者 Feminine Uranier たる資質を生來より有つてゐた。されど其の性慾に至つては全く倒錯するに限らず、同時に異性に對する愛情をも有つてゐたことは、彼等が御殿女中、後家等に買はれた事實を見ても明白である。

男女關係の變遷

原始時代の社會では、天産物に依賴して各人自ら容易に衣食することが出來た。それ故、未だ經濟的價値が認められず、從つて經濟制度も無かつたがため、男子が女子を撰び、女子が男子を撰ぶも各自の自由であつて、その間に何等檢束制肘のあるべき筈はなく、男女間の關係は全く放縱無拘束で、一部落の女子は同部落の男子の共有であり、未だ別個に配偶せぬ有樣であつて、所謂亂婚或は共同婚 Promiskuität oder Gemeinschaftsehe とも稱すべき狀態であつた。此の如き男女關係は、今日に於ても猶ほ、原始時代の狀態のまゝにある野蠻種族に於て往々認められる。ヘレラの說に依れば、ヴエネズエラ古代の蠻族は、自己の欲するがまゝに妻を娶り女子も亦その思ひのまゝに夫を撰び、若しその意に叶はざる時は隨意に去るのが常であると云ひ、フインクはフユーロン種族に於ける性交の自由放縱なることを述べ、殊にペリユー島人の亂淫にして、眞の家族的生活と稱すべきものなく、男女雜然として相集り相交り、青年男女間に道德的制裁の全く缺如してゐることを記述した。

併し原始時代を出でゝ、社會が少しく進步するに從ひ、經濟的觀念及び財産觀念が發生した

結果、女子を購買し、或は掠奪するが如き風習が起つて來た。蓋し女子は其の生れた家に於て一定の業務に從事し、經濟的價値を有つてゐる者であるから、之を掠奪し或は之を娶るの報償として物品を提供することゝなつたのである。今日に於ても、結婚に際して男子の方より女子の方に結納を差し出すのは、女子掠奪の遺風と看做すべきものであらう。此の如く財產及び經濟の制度が萠生し發達して女子の購買の風を生じ、それが次第に進んで遂に夫婦關係が起つて來た。亂婚時代に於ては、女子は如何なる男子に接するも其の自由であつて、少しも檢束が無かつたのであるが、一たび夫婦關係が起り、男子が女子を購買若しくは掠奪して、自巳の所有とする風習が出來てからは、女子の自由を奪ひ權力を之に加へて服從せしめなければならぬ。斯くして夫の妻に對する權力は强大となつて、茲に一家族なるものが成立するやうになつた。男女關係の自由であつた時代に於ては、一部落は恰も一大家族の如きものであつたが、夫婦關係が生ずるに至つてより、一部落は數多の家族に分れるやうになつた。

男子が既に女子を以て自己の所有物となし、財產と看做した後は、その性慾滿足以外に、成るべく多數の女子を獲得し、之を經濟的作業に從事せしめて多くの富を作らんと欲し、また一面に於ては、自己の豪勢を衒はんとするやうになる。これが卽ち一夫多妻の風習の起源で、此の風習は權力と財力とを有する酋長や富豪の間に行はれた。併し女子の數少く、また貧困なる者多き處では、一妻多夫の風が行はれる。今日に於ても、印度、錫蘭、西藏等には猶ほ之を認

めることが出來る。

上記の如く、家族が成立して、一夫多妻或は一妻多夫の風習が起つて來たが、併しその家族は所謂母系制であつて、母子の緣を以てその家系を維持したものである。これは男子が女子の家に入るの習慣から起つたものであり、また父の何人たるかを認識することの困難なるがため、家系はすべて母系を標準とする必要から生じたのである。されば家族内に於ける實權は男子の手にあつても、ただその家系に就いての權利のみは女子に存してゐたのであつたが、併し此の風習も男權が益々强大となるに從つて亡び、父系氏族制に變化して了つたのである。

私は以上に於て、原始時代には、共同婚卽ち亂婚が行はれ、次いで社會が少しく進んで、經濟的價値の觀念が萠生し、やがて財產及び經濟制度が起つてより、女子の掠奪賣買の風起り、茲に始めて夫婦關係が生じ、家族なるものが成立したことを記した。然るに世の學者中には、原始時代に亂婚が行はれたと云ふことを否定し、人間は最初より家族的生活を營んだものであると主張する者も尠く無い。その說に依れば、高等動物の多くは大抵家族をなして生活してゐる。蓋し雌雄は其の生んだ子供を保護養育するがため、一時的或は永續的に共棲するの要があるからで、人間も亦一の高等動物として、他の動物と共通の性質を有つてゐる以上は、既に原始時代の頃より、家族生活を營んだものと認めねばならぬと云ふのである。併し此の如き說は私等より見ると、其の論據が頗る薄弱である。蓋し高等動物の生活狀態を見るに、その多くは一雄多雌、若しくは亂婚であつて、卽ち强力な

る雄が數多の雌を獨占して之と共棲し、或は數多の雄が數多の雌を共有する亂婚の群をなしたものである。人間に最も近い類人猿を見ても、ゴリラの一種たる「ゴリラ、ギナ」は一頭の雄が多數の雌と子供とを有し、チンパンゼーも亦一雄多雌たるものが多い。凡て動物の間には一時的の性的結合は在つても、それが終れば雄は少しも雌のことなどを顧みないものである。但し鳥類の中には、永續に結合するものもあるが、哺乳動物に於ては、一般に一雄多雌であり、また亂婚の群をなすのが普通である。されば動物界に於ける雌雄關係の上から、原始時代の人類の男女關係を推測すれば、多婚か或は亂婚か、二者其の一を選ばざるを得ない。ウエスターマーク等は原始時代に亂婚が行はれなかつたことを立唱するも、現に今猶ほ原始狀態のまゝに留つてゐる蠻族間に於て、亂婚の風が行はれることは爭ふべからざる事實である。例へば、カリフォルニアの印度種族は、動物に於けるが如く衝動的に性交をなし、また酒宴舞踏を催うした後は男女亂交に耽り、またアラビア族の一派なるヤズイデーは、毎月或は三ケ月毎に相集つて酒宴を催うし、之を終れば、兄弟姉妹或は人妻の別もなく、黑闇の中で亂婚すると云ふことであり、また濠州のカミロイ族は、一部落のあらゆる女は、他の一部落のあらゆる男子の妻であると云ふ。此の如き蠻族間に於ける亂婚狀態より推測すれば、原始時代に於ける男女關係を以て、亂婚的と看做すことの合理的なる所以を認めざるを得ない。

人間に於ては、動物の如く一定の交接期なきも、動物と相距ること遠からざる原始的蠻族中

には、往々一定した交接期があり、現に亞米利加土蠻の印度種族には此樣な風があると云ふ。ウエスターマーク等の說に依るも、太古の原人は動物と同じく、交接するに一定の季節があつたやうである。多くの高等哺乳獸は、春季或は秋季に於て、每年一回或は二回交尾するものであるが、野蠻人種間にも亦、春季或は秋季に男女が雜然相集つて濫交し、或は夫婦の約をなすが如き風習がある。エリスは之を以て動物時代に於ける交尾期の遺習と看做した。されど他の一方には、原始時代に於ける亂婚の遺風となす者も多い。吾國の上古時代に於て行はれた『歌垣』、即ち諸國の男女が春季或は秋季を選んで相集り歌を唱和して、男子の方より意中の女を呼びかけて名乘りをなし、婚姻の約をなした風習のことに就いては、『萬葉集』中にある長歌にも見えるが、其の歌の一節に『少女少男の往きつどひ、かゞふかゞひに、人妻にわれも交らん、わが妻に人もこと問へ』とあつて、啻に靑春の男女のみならず、有夫の婦女も相集つて痴戲したことが分る。これも亦亂婚の遺風であらう。但し春季或は秋季を選んで男女相會したことは、交尾期の遺習のやうにも見える。それは兎に角、原始時代の人類間に、性交の無拘束なる亂婚が行はれたことは、殆ど疑ふべくも無い。

高等動物が幼兒を保護養育することは人の知る通りであるが、併し全然家族を形成すること無く、亂婚の生活をなすものも決して尠くない。若し論者の說くが如くに、幼兒の保護養育といふことが、果して家族成立の起源であるならば高等哺乳動物は悉く家族生活を營むべき害である。尤も高等動物中にも家族生活に類する生活

をなすものもあるが、併し多くは一雄多雌の關係であつてその甚だしきものになると、一雄にして百乃至百二十の雌及び幼兒を伴ふものさへある。此の如き動物では、雄が子供の養育保護に關係しないことは言ふ迄も無い。されば、家族成立の原因を以て、子供の養育保護にありとする説は、容易に受け取れない説である。子供の保護は女性のなす所であつて、必ずしも男性の手を籍るの要は無いから、子供の養育と家族の形成とは、その間に密接の關係あるべき筈は無い。殊に人類原始の生活に於ては、天産物が豐富であり、之に依賴して充分に生活することが出來たから、幼兒の養育は專ら女子の手によつて行はれたことが明かなる以上は、家族を形成する要も無かつたであらう。更に一歩を進めて論ずれば、父が子に對する愛情は、決して原始的のもので無く、其の甚だ薄いことは動物に於て最も明かに認め得られる。鳥類の中には、子の養育のために雌雄相分れるが如きものも尠からず、また猫の如きは、雄は動もすれば其の子を喰ひ殺さんとする傾向があり、そのために雌は其の子供を隱蔽して、雄に見せないやうに苦心することは周知の事實である。原始的蠻人に於ても、父が子に對する愛情は甚だ薄く、ヘルワルドの説いたが如くに、母が子を愛するは自然であるが、父が其の子を愛するのは、子を自己の所有財産とするやうになつてから始めて起つたものである。此樣な事實から考へても、子の養育が家族形成の必要の原因にあらざることは、自明の理であらねばならぬ。

　此の如く觀察し來れば、人類に於ける家族の成立は、決して最初の原始時代より起つたもの

で無く、前述の如く、亂婚狀態より夫婦關係に進んだ後に、始めて成立したことが明かである。而して一夫多妻の關係は、既に動物に於ても多く認められる處であるが、人間に於ける一夫多妻の原因は、性慾關係と經濟的關係との二方面より能く說明し得られる。性慾の方面から云へば、若し一夫一婦ならば、妻の月經、姙娠、產褥中は、性交を行ふことが出來ないから、多妻の必要が起り、また婦人の容色は男子よりも早く衰へるものである故、男子は成るべく若い美しい女を相手にしたがる。それから男子の好奇心や、家系の維持のためにも、多妻を必要とすることがある。グリーンランドに於ては、最初の妻に子が無い時には、夫の當然の權利として第二の妻を追求することが出來る。また經濟的關係から云へば、多くの妻を有し、更に多くの子を作つて之を勞役に使ふことは、忠實なる勞働者を養ひ、之によつて大に富を增加することになる。中央阿弗利加の東部では、百人の妻を有つても毫も困難せず、却つて富を增すと言はれてゐる。モドック蠻人の如きは、家政のために一人の妻、獵のために一人の妻、耕作のために一人の妻と云ふやうに、分業的に多くの妻を所有してゐる。さりながら一夫多妻制が行はれてゐる國であつても、貧困なる者は到底多くの妻を養ふ資力は無いから、實際に多妻を擁する者は、酋長、君主、富豪に限られ、一般人民は大抵一夫一妻で止まつてゐるのである。スペンサーが云つた如く、一夫多妻の風の行はれる國では、多妻を有する者は、其の權力資力が强大であつて、偉大尊貴といふことが聯想せられるから、多妻は實に階級的優越を表現するもので

ある。されば一夫多妻の風の行はれる國では、男權夫權が次第に强大となり、女權婦權は之がため益々壓抑せられ、女子自ら男子の下に屈從して、その壓抑を受けるのが自然の運命と思惟するやうになり、男尊女卑の風習を助長した。

さりながら一夫多妻の風の行はれる國でも、それが一夫一妻に變化すべき傾向のあることは、吾人の注意すべき事實である。それは多くの妻の中、最初娶つた者に他より最高の位置を與へること、及び自身の氣に入つた妻を偏愛することである。初妻を正妻とすることは、日本支那を始め、グリーンランド、印度諸島、西ヴイクトリア等にも行はれてゐるが、また一妻多夫制の行はれる國でも、初夫が正夫となる例が多い。カニヤグム族の中には、次の夫は正夫の留守中には之に代るけれども、正夫が歸宅すると同時に、奴僕に變化する慣習があり、ヲダク族でも數人の兄弟は一妻を共有するも、兄に對して弟は常に奴僕の役目を有つてゐる。されば一夫多妻もまた一妻多夫も、次第に一夫一妻に向つて變化すべき傾向のあることを認むることが出來る。

抑々人類の社會に於て、一夫一婦の自然なることは、男女の數の略ぼ同等に生れることによつて之を承認し得られる。但し戰爭、冒險、移住、疾病、酒精濫用等、種々の原因によつて、男子の數が減少し、或は女兒殺戮の習慣（未開國に行はる）のために、女子の數が減少して、兩性の數の割合に不權衡を來すことはあるが、併し大體の上から見て、世界全體に於ける男女の平均數が千人の男子に對して女子九百八十八人といふ程、略ぼ同等なることに徴すれば、一

夫多妻、一妻多夫が異常で、一夫一妻が通常たるべきことを容易に肯定し得られる。然るに最初より一夫一妻の制が行はれずして、一夫多妻、一妻多夫の制が行はれたのは何故かといふに、世界全體の上では、兩性の數が略ぼ平均してゐるけれども、地方によつては其の割合に不權衡を來し、男子の數が女子よりも多ければ多夫の風を生じ、女子の數が男子よりも多ければ多妻の風を生ずることは、自然の理數であるが、併し一夫多妻の風は、必ずしも女子の數の超過にのみ因由するものでは無い。前記の如く、經濟的及び性慾上の關係より多妻の要を感じ、君主、酋長、富豪の如き權力財力を有する者の間に於て、多妻の風が行はれるのである。併し女子は元來嫉妬心が強いから、多妻を喜ばない。ただ夫を恐れるがために、之を心の中に思ふだけであるが、併し嫉妬のために多妻の間に反抗が起り、互ひに仇視するやうになつて、種々の騷動が勃發する。ウエスターマークは、多妻的家族の內に少しも風波の起らないと云ふ樣な說は、動もすれば人を誤らしめるものであり、實際上、妻は夫の嚴重なる懲戒によつてのみ平穩に生活するので、舊來の風習であるがため已むなく多妻を默認してゐるのであると云ひ、プレスコットは、ダコター蠻族の女子は、常に多妻の風を嫌惡するが、男子に壓抑せられるがために遂には自殺する者があるといひ、ウエーベルは、最も粗野なる蠻人に於ても、多妻は女子の感情を害すると云つた。スペンサーの說に依るに、マダガスカルて、一夫多妻といふ語 Fampovafea-ana は「敵意を惹き起す」といふ意味である。されば女性通有の嫉妬根性が多妻を妨げる原因

となることは言ふ迄もない。また文化が進み道德心が發達するにつれて、男子は自分より弱き女性に同情愛憐を寄せるやうになることも亦、多妻主義を一夫一妻化する原因の一である。

歐洲に於ても、太古の希臘、羅馬時代には多妻の風が行はれたが、基督敎が輸入せられてより、男女間に於ける愛情も大に養成せられ、また一面には、中世紀に於ける武士階級が宗敎、武事及び婦人に對する敬愛の三者を重要視したがため、自ら女性を尊重する風が次第に盛んとなつて、一夫一婦制が行はれるやうになつたが猶ほ此外に看過すべからざる原因は、歐洲の人種は進取敢爲の氣象が強いから、女子と雖も何時迄も男子に屈從せず、遂に之に對抗するやうになつたがため、女子を奴隷視するに等しい多妻の風は遂に全く地に墜ち、一夫一婦制が實行せられることとなつた。

今日の社會は一夫一婦制を道德としてゐる。これは固より當然の事柄であるが、併し實際の狀態を見ると、それが嚴行せられて居らず、一夫一婦の假面を被つた多妻多夫主義が矢張り行はれてゐる。それには種々の原因事情もあるが、其の根本の動機を云へば、人間は其の相手とする異性の變換を要求する本能を有つてゐて、男子が一人の女子のみを守り、女子が一人の男子のみを守ると云ふことは、人間自然の本性で無い。さりながら法律、道德、慣習、經濟等の制裁要約があるがため、表面上では是非共一夫一婦制を遵守しなければならないのである。道德の皮、文明の肉を以て自然の本能を隱蔽しなければならないのである。これ亦文化生活に於ける喜劇であり悲劇であつて、一夫一婦といふ美しき形式の陰に、秘密なる性的交渉が行はれてゐるのも、思へば異とするに足らない。

（近刊「夫婦の性的生活」緒論より）

性慾顚倒と疼痛性淫亂症

——變態性慾要說（二）——

（乙）女性に於ける性慾顚倒

これにも先天及び後天の二種がある。先天性素質に基くものは、既に思春期に達する頃より同性を愛し、異性に冷淡なるものであるが、併しまた時としては、異性に對する愛情の痕跡を有つてゐるものもある。之に反して、後天的の種々なる原因、例へば、異性の肉に飽き、或は異性に接するの機會なく、或は友情親密なるがために同性愛に陷るものにあつては、固より異性に對する愛情が充分に存し、また既に之を實行し、或は其の實行を要求するものであるが、併し因習の結果として、同性愛が第二の天性となつて了ふやうな者も多い。殊に神經病性素質を有する者に於て這般の傾向が認められる。

先天性に同性愛を好む女性に於ても、女子としての處世的必要と、社會的慣習とによつて結婚する者も尠く無い。併し元來異性に對する愛情が薄く、或は全く缺乏してゐるから、早晩離婚の已むなきに至ることが甚だ多い。マンテガツツアーは、夫婦間に愛情が成立せずして、常に感情の融和を缺き、不幸不快なる家庭生活を送りつゝある者の中、他人が見てその不和の原

因を明かにすることの出來ないものの多くは、同性愛を好む性慾顚倒の女性を妻にせるものであると云つたが、此樣なことは世間に稀有のことでは無からうと想はれる。歐洲に於ては、女性中に同性愛を好むもの頗る多く、現に上流社會の婦人間には青春期を經過するも猶ほ結婚せずして、同年或は年少の女性を情人となし、相携へて長途の旅行をなすやうな者もある。而して同性間に於ける愛情の熱烈なるものは、殆ど夫婦の如き關係を結び、時としては嫉妬のために相手を傷つけ、或は生死を共にせんとて相擁して情死することも決して稀でない。

女性間に行はるゝ同性愛の性慾滿足は、主に擦淫 Tribadie によつて行はれる。專ら同性のみを愛して異性を顧みざるやうな女子は、その外貌體質、及び精神共に男性的なるものが多く女らしき優雅温籍なる處がない。女性でありながら飲酒喫煙を嗜み、好んで男裝をなし、庖厨裁縫の技を嫌つて、或は政治を談じ或は經濟を論じ、或は女權論を主唱するが如きものゝ中には、その性慾も顚倒せるものも決して尠く無い。此の如き女性を稱して男性的女子 Mannweiber「ギナンドリール」Gynandrier といふ。

疼痛性淫亂症　Algolagnie, Schmerzgeilheit

疼痛性淫亂症とは、異性に苦痛を與へ或は異性より痛苦を受くることによつて、性的快感を覺え、性慾を滿足するの謂ひである。之を二種に區別する。一は異性を虐待凌辱して其の身心に苦痛を與へ、或は之を心中に想像して、性的興奮乃至性慾滿足の目的を達するもので、之を虐待性淫亂症（ザヂスムス）Sadismus と稱する

これは佛國の貴族ド・ザード侯爵 Marquis de Sadeの行爲及び其の手に成つた小說の內容に基いて斯く命名したのである。他の一は異性に對して身を奴隷的位置に置き、虐待凌辱を甘受して性的快樂を感ずるもので、之を被虐待性淫亂症（マソヒスムス）Masochismus と云ふ。これは墺國の文士マソッホ Masoch の行爲及びその小說の內容に基いて命名したものである。而して兩症共に先天性變質的素質に基因する異常性慾であつて、屢々相併發するものである。

（甲）　虐待性淫亂症（ザヂスムス）

主に男子に認めらるゝもので、性交前または性交中、對手の女子を毆打し或は之を嚙み、或は頭髮を引張り、或は腕を捻ぢ上げ、或は面上に唾を吐いたりなどして之を苦しめ、或は小刀を以て股や腹部を傷つけ、或は鞭を以て撻ち、その苦悶するの狀を見、其の悲鳴する聲を聞いて大に快を感じ、甚しきは性交を終つて後、女子を殺し、その陰部を抉り、肉を割き、臟腑を出だし、之を喰するが如きものさへある。此の如きものを稱して殺人淫樂症 Lustmord と云ふ。然るに奇異なることは、虐待性淫亂症に罹つた者に意外にも氣質が優しく溫和の人間が多いことで、モルの說に依るも、其の多くは神經質の人間であつて、纖弱なる女子的性格の所有者であると云つてゐる。

異性に對して殘虐なる暴行を加ふるの外に、また屢々不潔なる物質（例へば糞尿の如き）或は煤煙或は油類を以て異性の衣服肌膚を汚し、或は異性をして强いて自己の汚き足、靴等を舐めらすこと等によつて性的快感を覺ゆるが如き者がある。此の如きものを稱して象徵的虐待淫亂

症 Symbolischer Sadismus といふ。或はまた大聲を放つて異性を罵言し、或は文字を以て異性を侮蔑することによつて性的快樂を感ずるものを、言語性及び文字性虐待淫亂症 Wortsadismus und Schriftsadismus といふ。またただ心の中に異性を虐待凌辱することを想像して快感を催ふすものを、觀念性虐待淫亂症 Idealler Sadismus と稱する。

（乙）被虐待性淫亂症（マソヒスムス）

前記の「ザヂスムス」とは反對で、異性よりの虐待凌辱を甘受し、之を忍ぶことによつて性的興奮を來し性慾を滿足するもので、男子に之を見ることも稀では無いが、女子の方に比較的多い。性交前或は性交中、對者をして自己を毆たしめ或は傷けしめて快感を覺ゆる者もあればまた對者より肉體的に或は精神的に苦痛を與へらるゝことを心の中に想像して性的興奮を來す者もある。（觀念性被虐待淫亂症）或は好んで異性が排泄した不潔物、例へば糞尿、精液、喀痰月經血等を口にして、性慾を滿足するが如き者や、或は汚垢に穢れた異性の足部、陰部等を舐めて、性的興奮を催ふすが如き者もある。此の如きものを稱して「コプロラグニー」Koprolagnie と云ふ。



次號豫告

▽迷信と變態性慾
▽女子同性愛に關する説話
▽醫學上より觀たる獨身生活の利害
▽毛髪戀愛——截髫漢
▽日本に於ける生殖器崇拜の起源及び成立(下)
▽女性の生殖機能と犯罪(下)
▽變態性慾要説(三)

創刊號内容▽發刊の辭▽性的早熟と早夙性發情▽月經の生物學的意義に關する一疑問▽割禮の遺風と認むべき日本民族の龜頭裸出▽虐待性好淫者ザード侯爵と殺生關白豊臣秀次▽江戸時代に於ける性的犯罪の刑▽男性假半陰陽者アレキシナの日記中より▽女嫌ひ▽變態性慾要説(一)

第二號内容▽マソヒスムスに關する説話▽貴婦人墮落の原因考察▽日本に於ける生殖器崇拜の起源及び成立に就いて(上)▽黴毒に傳染したるショーペンハウエル▽墮胎と墮胎專門▽變生男女の話

本誌定價表

壹部(一ヶ月分)	金參拾五錢	稅壹錢
六部(半ヶ年分)	金貳圓拾錢	稅共
拾貳部(一ヶ年分)	金四圓拾錢	稅共

◎注意
□御註文は總て前金御拂込のこと
□なるべく振替にて御送金のこと
□特別號は定價超過分申受のこと

本誌廣告料

表紙二、三、四面	金五拾圓
普通面一頁	金參拾五圓

大正十一年六月廿日印刷納本
大正十一年七月一日發行　第一卷　第三號

編輯兼發行者　東京市外北品川御殿山七一八　中村蓊
印刷者　東京市芝區南佐久間町二ノ一四　渡邊素一
印刷所　東京市芝區南佐久間町二ノ一四　內外印刷合資會社
發行所　東京市外北品川御殿山七一八　日本精神醫學會
電話高輪一〇四三番
振替東京三一一七七番

大賣捌（東京堂、東海堂、北隆館、參文社、上田屋、至誠堂、盛春堂、共盛社、）

變態心理學講話集

裝釘美菊版三三〇頁
口繪寫眞二葉入
定價壹圓四十錢
送料八錢

好評嘖々――再版出來!!

(本書內容)

變態心理學概論 文學士 中村古峽

變態心理學に對する一般の誤解―常態と變態との區別―變態心理學の研究範圍―變態心理と潜在意識―變態心理現象の區分―一時的變態心理現象―持續的變態心理現象―變態心理學の任務及び貢獻

精神病の概念 醫學士 森田正馬

緒言―心身の關係―精神障礙―症狀的方面より見たる觀察―原因的方面より見たる觀察―治療的方面より見たる觀察―疾病の型、性質、本態、種類―精神病の研究法―經過、豫後方面より見たる觀察―精神病學の應用範圍―附錄臨床講義―變質性精神異常者―早發性癡呆

犯罪と迷信 文學士 寺田精一

序言―迷信の行はれる範圍―迷信家―犯罪者と迷信―犯罪と關係しての迷信―犯罪の原因としての迷信―犯罪行爲遂行の爲の迷信―犯罪の發覺を防ぐ迷信―犯罪者の日常生活と迷信

不良少年の精神分析 文學士 久保良英

はしがき―心的軋轢―幻影に由る心的軋轢―強迫觀念に由る心的軋轢―容易に分析される軋轢と分析の困難なる軋轢―兩親其他に關係した軋轢―竊盜に慾れる心的軋轢―放浪に慾れる心的軋轢―他の惡癖に慾れる心的軋轢―結論

變態心理と近代文藝 文學士 生田長江

戀愛といふ語の意義―近代文藝に對する誤解―變態心理と近代文藝との關係

歐洲大戰の心理的側面觀 文學士 上野陽一

平和論者の夢―不可思議に堪へぬ大戰の勃發―ザッキンソン氏の大戰原因論―文明人の發生的觀察―文明匠習の解放―結論

愛の還俗 文學士 菅原敎造

戀愛の醜化―聖者の性的惡鬪―禁慾の齎らす變態現象―破戒僧尼の群―操の辯―自由戀愛の歌―她の發現と愛の法律―愛の共產主義―自由戀愛と禁慾主義―解放―表現―探偵術の出現―自由戀愛の非難―戀愛の恐怖―色情藝術の發生―宗敎藝の色情化―色情藝術の推移―ルーベンス、フラマンの色情藝術―レンブラント、和蘭の色情藝術―工藝品としての色情藝術

東京品川
御殿山
日本精神醫學會
振替東京三一一七七番
電話高輪一〇四三番

品文學士　中村古峽氏著

變態心理の研究

四六版布裝頗美本
紙數四百八十頁
定價金貳圓五拾錢
送料金十二錢

忽ち七版

本書は其の内容の種類に依つて、上中下の三篇に分たる。——

□上篇……には催眠現象・潛在精神・二重人格・透視と念寫・幽靈の出現・狐狸の憑依等、諸種の變態心理現象を一般の讀者にも理解され得るやう極めて丁寧親切に説明す。

□中篇……には著者多年の經驗中から、精神治療に關する實例數種を詳細に報告したるものにて、就中二重人格者に對する諸種の施術法幷に夢の新實驗等は全く著者の創意に屬す。

□下篇……には精神病者の心理描寫二篇幷に狂人の興味ある手記繪畫二十餘種を收む。

著者の文章は世既に定評あり。讀者は小説を讀むが如き興味のうちに、此の新科學の新智識に通曉することを得べし。

□取次所　東京市外品川御殿山
振替東京三一一七七
日本精神醫學會

變態心理學講義錄

全部完結
四ヶ月卒業
總紙數二千二百頁

我が學界破天荒の試擧!!

科目は何れも精神科學の精華
講師は悉く斯界第一流の權威

▽變態心理講義　文學士　中村古峽氏
▽精神療法講義　醫學士　森田正馬氏
▽心靈學講義　文學士　小熊虎之助氏
▽犯罪心理講義　文學士　寺田精一氏
▽群衆心理講義　文學士　葛西又次郎氏
▽催眠術講義　文學士　中村古峽氏
▽臨床催眠術講義　大阪實驗心理研究所主幹　向井章氏
▽變態性慾講義　性之研究主幹　北野博美氏

▼入會者には諸種の特典あり。詳細規定幷見本入用者は往復葉書にて問合せありたし。

申込所　東京品川御殿山　振替東京壹壹五○壹番　日本變態心理學會

プラトンシャープ鉛筆

鉛心の繰出しのみならず
繰入れも自動的に行く
專賣特許品

歐米の製品より
更に一歩進んだ
理想のペンシル

一番書きよい

プラトン萬年筆

日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣

Platon

變態性欲第壹卷第參號
大正十一年四月廿六日第三種郵便物認可
大正十二年七月一日發行（毎月一回一日發行）

定價金參拾五錢

大正十一年四月廿六日第三種郵便物認可
大正十一年八月一日發行（毎月一回一日發行）

性之問題研究の最高級雜誌

變態性慾

田中香涯執筆

八月號

目次

東京 日本精神醫學會 發行

日本變態心理叢書

變態心理主幹 中村古峽監修

變態心理編輯部著

四六判美裝 二七〇頁 送料十七錢 定價壹圓八十錢

第一編

少年不良化の徑路と教育

好評嘖々再版

本書は、幾多の少年の不良化し、遂には恐るべき犯罪をもなすに至る徑路を觀察し、その如何なる原因に依るかを社會的家庭的、教育的の種々なる缺陷に究め、更に思想的の遠因をも尋ね、社會的に著名なる數多の實例を引用して、心理的に懇切平易なる說明を加へたるもの。以て國民教育の徹底に資すべく、世の教育家、家庭父兄及社會問題研究家の一讀を望む

内容一斑

- 不良少年の問題
- 恐るべき不良少明の犯罪
- 不良少年の種類と團體
- 不良少年を生む環境
- 不良少年の遺傳と素質
- 不良少年の感化救濟
- 家庭教育と不良少年
- 思想問題としての不良少年

東京 品川 御殿山 日本精神醫學會

振替東京三一一七七番 電話高輪一〇四三番

日本變態心理叢書

第二編

變態心理主幹 文學士 中村古峽新著

自殺及情死の研究

四六判美裝 三五〇頁 送料十七錢

愈々發賣 定價貳圓參拾錢

著者は變態心理の研究家として世に喧傳せらるるが、啻に個人變態心理のみならず、社會變態心理現象にも多年注目する所あり、その第一着手として自殺及情死なる現象に對する觀察を公にするに至れり。本書は、この現代社會の病患たる現象に對して、先づ統計學及醫學上より觀察し、歐米幷に日本の諸大家の學說を紹介し、更に何人も及ばざる獨特の立脚地に立ちて、自殺者の心理を研究し、その思想問題としての價値及道德的責任にまでも論及せるものなり。而かも世の專門書の如く乾燥無味に墮せず、說明は平易に、科學的冷靜と文學的熱情とを以てし、引例豐富に興味深く讀了せん事を期したり。敢て警世憂國の士の一讀を切望す。

東京品川御殿山 日本精神醫學會 振替東京三一七七番 電話高輪一〇四三番

哲學的冥想を加味したる新心理觀察!!

文學士 寺田精一先生新著

惑溺と禁慾

（精巧寫眞版三十餘枚入）

總紙數約五〇〇頁
定價金貳圓八拾錢
送料金拾貳錢

―（目次一斑）―

東京品川御殿山
日本精神醫學會
振替東京三一一七七
電話高輪一〇四三番



女子同性愛に關する説話

（一）

女子同性の愛は夙に太古時代より行はれ、殊に肉體美崇拜の風習があつた太古の希臘に於ては、啻に男子のみならず、女子の間にも同性愛が盛んに行はれた。其の中にもレスボス島の婦人に之を好む風が大に盛んであつたから、今日に於ても女子同性愛を一に『レスボスの愛』Lesbische Liebeと稱する。希臘太古の女詩人として名高きサッフォーは、實に同性愛の讃美者であり且つ實行者の一人であつた。彼女は美青年ファオンに片戀をして、リウカディアの岬から海に身を投じて自殺したと云ふ傳説があるが、併し彼女は一面に於ては、同性をも熱愛し、而も或特殊なる方法 Lambendo lingua genitalia によつて、其の燃ゆるが如き情熱を滿足した。それ故、此樣な方法の下に行はるゝ女子同性愛は、今日に於てもサッフォー淫

Sapphismus と稱せられてゐる。初めはフエニチアに行はれたものであるが、軈て希臘に傳はり、次いでシリアより伊太利に入り、帝政時代の羅馬では甚だしく婦人間に蔓延した。さればマルチアルの如きは詩を作つて之を諷した程である。

支那に於ても、女子同性愛が太古時代より行はれたことは『漢武故事』中の記事に徵しても明かである。漢武帝の皇后寵衰へて驕妬甚だし。女巫楚服なるもの言ふ、能く帝の意を回さんと、晝夜祭祀し、藥を合せて后に服せしむ。女巫男子の服を着、冠幘帶素して皇后と與に寢、相愛すること夫婦の如し。帝聞いて巫と后と女にして男淫せるを究治し、皆罪に伏すとある。『漢武記事』は漢書と同じく班固の筆に成つたものとすれば、上記の事實は、支那の史乘の中、女性相愛のことを敍した最古の例と謂ふべきである。而して漢時代に於ては、宮女が相共に夫婦となるのを對食と稱した。『漢書外戚傳』に『宮人自相與爲二夫婦一、名二對食一、甚相妬忌也』とある。(前の清朝に於ては、菜戶とも云つたそうである。)

我國に於ても女性相愛は平安朝時代より行はれたもので、其の證據は村上天皇天曆五年の勅撰に成る『後撰和歌集』の中に、『定めたる女も侍らず、獨り臥しをのみすと、女友達のもとより戲むれて侍りければ、讀人不知』とあつて『いづこにも身をば離れぬ影にしあれば、臥す床ごと

に獨りや寢る」といふ和歌がある。

歐洲に於ては、今日に到るも猶ほ女性相愛が盛んに行はれてゐるが、近世時代に入つて以來、始めて精細に記述せられた實例は、カタリネ・マルガレター・リンケン Katharine Margaretha Lincken といふ女子で、他の一人の婦女と結婚したが爲め、法に問はれて死刑に處せられたのは實に千七百二十一年の頃であつた。しかし歷史上、有名なる婦人の中には、同性愛を好んだ者も可なり多く、前記サッフォーの他に、ヘンリー第八世の妃カタリナ・ホーワルト（千五百四十二年死刑に處せられた第五番目の王妃）及び露國の女帝カタリナ第二世等は其の最も顯著なるものである。歐米では、詩人及び小說家が女性相愛を材料とした作品多く、殊に佛國では、チドロが其の創作 La religneuse に於て、尼僧間に於ける同性愛を描寫してより、此種の小說は種々に趣向を變へて刊行せられた中にも、バラックの La fille aux yeux d'or ゴーチエの Mademoiselle de Maupin フエイドの La comtesse de Cholis フローベルの Salambo ベヨーの Mademoiselle Girand mafemme ゾラの Nana 及び Curée 等は最も世に有名なものである。また英文で書かれたものには、スタヂオンの Brick and brack 獨逸文で書かれたものには、ウイルブランドの Fridolins heimliche Ehe 及びザッヘル・マソッホの Venus im Pelz 等がある。ソーウアルの說に依

れば、フランツ一世時代の佛國宮庭は、朝紀甚だしく亂れて宮女は男子の性的行爲を摸擬し、また一皇女の如きは半陰陽の宮女を情人となした。宮中も巴里の市中も同性愛を好む貴婦人に充たされ、そのため彼等の夫は幸ひにも嫉妬を免るゝことを得て、淫蕩を恣にしたさうである。

(二)

女性相愛にも單に精神的に過ぎざるものもあれば、また甚だしい肉的のものもある。精神的相愛の一例として茲に擧ぐべきものは、嘗てカチユユ・マンデによつて記述せられた Protectrices で、一貴婦人が妙齡の一女優を熱愛し、其の舞臺に登る間も、互ひに視線を交換したり、或は共に睦ましげに散歩したり、或は金を拂つてやつたりなどしたが、併し肉的關係を結ぶやうなことは少しも無かつた。また嘗て雜誌『雄辯』誌上に掲載せられた石丸梧平氏の創作『二人の女の生活』に於ける女敎員光子、よし子の相愛も、純然たる精神的戀愛であつた。併し此の如きものは實際には頗る稀であつて、一方の女が『男子』となり『夫』となり、他の一方の女が『女子』となり『妻』となつて非自然なる性的結合をなすことが甚だ多く、その中には眞の夫婦と同樣の生活を送る者さへある。ドストック (Paris-Eros, S. 58) の說に依れば、三十年の久しきに亘つて、性的關係を續けた相愛者もあつたと云ふ。併しイワン・ブロッホは、女性相愛に於ては、男

性相愛よりも相手を變換することが比較的に多く、四年の間に三人までも情人をこしらへた中年の女性があつたことを記した。されど女性相愛者に於ては、嫉妬の情は男性に於けるよりも甚だしく、之がため刄傷沙汰に及ぶことも決して尠く無い。明治二十年の頃と記憶するが、前田某といふ女が嘗て其の奉公してゐた主家の娘を殺さんとし、剃刀を以て切りつけたが、其の目的を達すること能はずして捕縛せられ、裁判官の糺問に對して、生來男子を愛せず、ある官吏の家に下女として仕へてより、主人の娘と情を通じ、衾を同うしたことも屢々であつたが、其後主家を辭してからも、以前の關係を繼續してゐた處、漸く相手の女が已を疎んずるやうになつたので、非常に立腹し、遂に之を殺害せんとするに至つたといふことを自白した。當時江口襄氏は此女を診して「色情顚倒症」と鑑定せられた。

此の如き女性があるかと思へば、また一方には交情恰も蜜の如く、互ひに苦樂を分ち、生死を共にせんとて、果ては相抱いて情死する者さへある。約十年前、東京で、曾根貞子、岡田玉江といふ二人の女學生が、親不知の激浪に投じて情死を遂げたことは、當時世間の噂に上つたが、之より遙か前にも、芝濱松坊の娘もとが女髮結と心中したことがあり、また下野足利の者で渡邊某といふ人の娘お末が、上總屋の女のお花と死を同うしたこともある。此等はいづれも友情の切な

るがため、不知不識の裡に同性の愛に陷つた者であるが、併し他の一面に於ては、異性に對する愛情が先天性に缺如し、或は僅微なるに反し、同性に向つて專ら愛情を捧ぐるが如き異常の女性もある。此樣な者は其の身女性でありながら男子と感じて、其の言語、擧動及び服裝等悉くその顚倒した感覺に相當する許りでなく、其の身體の狀態も男性に類似し、骨格筋肉の發育比較的に强く、乳房は小さく、骨盤は狹く、時としては鼻下や頤部に粗毛を生じ、其の性質も男性的で、飮酒喫煙を好み、或は政治經濟を論ずるが如き傾向がある。所謂男性的女子 Mannweiber 或は「ギナンドリール」Gynandrier「ウイラゴ」Virago と稱せらるゝ異常の女性が即ち之れである。キッシュの實驗した或る貴婦人は、十六歲にして結婚し、其後六年を經て離婚したが、その體格は至つて頑丈で、酒を飮み煙草を嗜み、好んで男裝をなし、特に同性を愛する傾向が著しかつた。しかし月經は每月正規に來潮し、生殖機關も輕度の膣加答兒があるのを除けば通常であり、鼻下に薄い粗毛の生じてゐる他には、身體の格好も女型を失つて居らなかつた。

此の如く先天性に性慾が顚倒して、同性愛を好む女性も、社會の習慣や處世の必要等に迫られて結婚する者も尠く無いが、しかし元來異性に對する愛情が甚だ薄く或は全く缺乏してゐるから、一度は結婚しても夫婦中が融和せず、家庭の圓滿を缺くため、早晩離婚に終るやうになる。

マンチガツツアーは、夫婦間に愛情が成立せずして、何時も感情が融合せず、不幸不快なる家庭生活を送つてゐる者の中、他人が之を見て其の不和の原因を明かにすることの出來ない者の多くは、同性愛を好める女性を妻にしてゐる者であると云つたが、此樣なことは恐らくは世間に稀有で無からうと想はれる。マルチノー及びモルは、有夫の婦人が其の夫の眼を偸んで他の女と契つたことを詳細に記述したことがあり、またヂユウセは千八百七十七年佛國巴里に開かれた人類學會に於て、既婚の婦人が他の未婚の女と私通して、其の夫より受けた精液を之に移して姙娠せしめたといふ、殆ど信ずることの出來ない程の珍奇な實例を報告した。

(三)

科學上より同性愛を精細に研究して始めて學界の注意を惹起したのは、獨逸の精神神經病學者ウエストフアールで、千八百七十年同性愛に耽る一女子の履歴を詳述して之を世に公にし、神經質の徵候は在つても、精神病者と認むべきものに非ざることを論じた。これより以來諸學者の男女を通じて同性愛に關する研究報告が、相次いで世に出づるやうになつたが、此のうちにも、クラフト・エビングの如きは最も豐富なる材料に就いて、精細なる觀察を遂げ、同性愛は先天性なる一種の異常と看做すべきもので、疾病若しくは變性狀態に屬すべきものに非ざることを唱へ、

之に次いで、モル及びヒルシユフエルド等も、同性愛は先天性素質に出づることを論じ、ネツケも同性愛を好む者は其の性欲の異常を除けば、全く身心の健全なることを認めたが、併しモルは輕度の神經病的素質と一定の關係あることを說き、エリスは同性愛に耽る者の五十%は可なり健全なる家庭に生れたが、他の四十%は其の家系に輕度の異常及び疾病、例へば酒類の濫用、神經衰弱症、神經病等を證明し、また全身の健康狀態に就いては、其の三分の二は佳良であるが、爾餘のものには神經衰弱の傾向、或は輕浮なる氣質を認め、たゞ少數の者殆ど八%に於てのみ、著しき病的異常を見た。

上記の如き先天性異常に基く同性愛は、異性に對する愛慾が全然缺如し、或は甚だ僅微なるものである。私はこゝにクラフト・エビングの著書 Psychopathia Sexualis 中より其の顯著なるものを擧げて見よう。それは四十四歲の一婦人で、少女時代より怜悧なる性質であつたが、併し感傷的の傾向を有し、十歲の時、己に對する母の愛情が大に衰へたのを悲むあまり、再び愛情を喚起せしめんものと、珈琲汁に燐寸を漬して之を飮用し、わざと病氣に罹つたやうなこともある。思春期の年齡に達する前から早くも性欲が發揚し、異性に對しては何等性的興奮を來すことも無いが、妙齡の處女を見れば忽ち春心動き、殊に浴場等で花恥しき處女の肌を見、或は其の楚々た

る進歩を見ると、殆ど堪へ難きほどに發情するので、思はず知らず自分の身體を彼女の身體に接して、其の燃ゆるが如き情慾を滿足せしめた。されど女と女とが接觸するのであるから、誰れあつて之を恠しむ者も無かつた。また途上で窈窕たる貴婦人に遭遇すると、戀慕の情に堪へずして、之に尾行したり、或は可愛らしい少女に邂逅すれば、之に草花や物品を與へて其の歡心を求めなどした。十九歲の時、結婚して一兒を擧げたが、間もなく夫に死に別れてより、またもや同性を戀慕し、非自然の方法によつて其の性慾を滿足してゐたが、二十七歲の時、已むを得ざる事情から再嫁して、三人の子供を生んだ。併し其の夫は結核病を患つてゐたので、三年の後、彼女を後に殘して不歸の客となつた。寡婦になつてからの彼女は、先夫との間に生れた女兒の九歲になる者を抱擁して、またもや非自然の醜行を恣にした。彼女の自白する處に依れば、異性に對する愛情は頗る稀薄粗笨で、未だ嘗て快感を催うしたことも無いが、同性に對しては、實に名狀すること能はざる快情を感じ、その豐頰に熱い唇を觸るゝ折などは、快極つて夢心地になるといふことである。

　さりながら女性相愛の中には前記の如き先天性異常に基因する者の他、異性に對する愛慾が十分にありながらも、之を充實滿足すること能はざるがため、或は新奇の刺戟を求めんがために、

同性愛に耽るに至るが如き者も尠く無い。彼の監獄、寄宿舍、驅黴院等に行はるゝ女性相愛は、這般の原因に由來するもので、其の中には因習の結果、遂に第二の天性となり、異性よりも同性に愛着するが如き性慾顚倒に陷つて了ふ者もある。イワン・ブロッホの所謂『假性同性愛』Pseu-dohomosexualität といふのが即ち之れで、殊に賣笑婦に於て這般の傾向を見ることが尠く無い。パラン・デュシャトレーの說に依れば、二十乃至三十歳の賣笑婦中に同性愛の行はるゝこと多しと云ひ、またロンブロソーは百三人の賣笑婦の中、五人に就いて之を認めた。其の原因は異性の肉に飽滿した結果、新奇なる非自然的刺戟を要求するに至るがためで、彼の淫婦カタリナ第二世が放縱生活に飽き果て、『自然は何故に第六感を吾人に與へなかつたか』Warum hat uns die Natur nicht einen sechsten Sinn gegeben? と云つて、同性愛を好むに至つたのと其の揆を一にせるものである。モルの說に依れば伯林の賣笑婦の二十五%には同性愛が行はれてゐると云ふことであるが、リッカルヂーも情交に冷淡なる賣笑婦の多くは特にサッフォ淫の愛好者であると云つた。されど啻に賣笑婦ばかりで無く、淫蕩なる歐米の貴婦人社會にも、同性愛が盛んに行はれ、タキシールの說に依るも、佛國の巴里では特に既婚の婦人に之を嗜好する者が甚だ多い。さればその需要に應せんが爲に、同性愛のみを事とする賣笑婦もまた尠からず、佛國では之を Gouines

或は Gougnottes と稱へてゐる。

最後に一言するの要あるのは、女性相愛が如何なる方法の下に實行さるゝかと云ふことてある。之に就いてマシユカは三種を區別した。一は Reibung (Masturbation)、二は Vergrösserte Klitoris によつて一人の女が他の女に向つて之を行ひ、三は人工的に作られた Membrum virile を以て一人づゝ或は兩人同時に之を行ふのである。猶ほ此の外にサツフオ淫 Sapphlismus 即ち Cunnilingus なるものもあるから、女性相愛の實行法は都合四種ある。しかし一々其の方法を說明しては、それこそ風俗を壞亂する虞があるから玆には明記しない。

女性の生殖機能と犯罪(下)

(四)

上記の如く、月經期には種々の犯罪行爲が演せらるゝ故、女性犯人に對しては、その犯罪行爲が月經期に合致するか否かを究めることは甚だ必要である。而して月經期に於て女性の精神機能の障碍せらるゝことは明白なる事實であるから、月經時に行はれた犯罪には、よしや月經性精神病を證明せずとも、之に對する刑を輕減すべく、また元來精神薄弱なる者が月經期に罪を犯した場合には、當然その責任能力を問ふべきもので無いとは、夙にクラフト・エビングによつて論唱された。自由戀愛主義者の一人神近市子が、その情人たる大杉榮を殺害せんと企て、其の目的を達せずして四年の懲役に處せられたことは吾人の今猶に記憶する處であるが、聞く處に依れば、彼女の殺人罪を犯さんとした當日は月經期であつたそうである。若しそれが果して事實であつたとすれば、彼女に對する量刑は多少斟酌しなければならなかつたのである。

啻に月經期のみならず、姙娠中にも犯罪行爲の演出せらるゝことが稀でない。これもまた精神

障碍に基因するもので、殊に姙娠中には強迫的欲望の起るがため、窃盜罪を犯す者が往々見うけられる。グッテンは姙婦に萬引する者の稀ならざることを説き、また佛國の文豪エミール・ゾラも其の創作 An bonheur des dames に於て、姙娠した一貴婦人の萬引を犯す狀態を描寫した。併し姙婦の犯す窃盜罪は必ずしも常に強迫的欲望に出るに限つたことで無く、フイッセルの報告した實例を見るに、ヒステリー性昏朦狀態に於て萬引の罪を犯した姙婦もある。

姙娠中に特殊の精神病の起ることは比較的に多くない。所謂『姙娠精神病』Schwangerschafts-psychose なるものは僅かに三%の姙婦に於て之を見るに過ぎない。(レーウエンフエルド)而して特に初姙婦に起るもので、主として姙娠後半期に生ずる。その中最も多きは鬱憂病であつて、フユールストネルに依れば八十%、リッピングに依れば八十四・四%の割合である。之に次ぐものは躁病である。またクレペリンの説に依れば、姙娠中には早發痴呆を來すことが稀で無い。姙婦が鬱憂病を生ずること多きがため、自殺、他殺、放火等の罪を犯すことがある。其他、こゝに注意すべきことは姙婦によつて往々小兒殺害の行はるゝことで、動物でも姙娠した場合には其の子供を殺すことがあり、現にロンブロソーは、一時其の生兒を非常に可愛がつてゐた母猫が再び姙娠してから、今までの態度が一變して子猫を嫌ふやうになり、遂に之を噛み殺したといふこ

とを記した。

分娩後、女子の產褥にある間にも精神異常を來すことが稀で無く、クレペリンの說に依れば、女子の精神病の六・八％は產褥時に起るといふことである。而して產婦に見る所の犯罪行爲は、主として生兒殺害であつて、クレペリン及びホーヘの記述した如く、生兒を絞殺し、或は毒殺し、或は看護を怠り榮養物を與へずして死に陷らしむることである。これと略ぼ同じ樣な行爲が流產したものにも演ぜられることは、コウアレフスキーの報告した處である。

右述べたやうな犯罪行爲に對して、責任能力の存在を認めて嚴刑に處することがあつたとすれば、それは根本的に誤つた判決である。然るに千九百七年、獨逸の某裁判所では、或下婢が自分の生んだ子供の漸く三週間經過した者を毒殺したに對し、死刑の宣告を下したやうなことがあつた。實に無法な判決で、醫學の進步した今日、殆ど信ずべからざる奇怪の事實である。獨逸の如き國でさへ、往々此樣な無法の判決を下す非常識、沒學理の判官のあるのを見ると、吾國に於て女性犯人に對する判決の程度も想ひやられる。

女性生殖腺たる卵巢が萎縮して、生殖機能が廢絕する時期、即ち更年期（四十五乃至五十歲）になると、精神生活の狀態も變化し、殊に情緖が興奮し易く、些細の刺戟によつても興奮する傾

向となることは、クラーメル等の說いた處である。されば更年期に達した女性は、誹譏罪を犯すことが尠く無い。ヘーゲルが獨逸で千八百八十二年より千八百九十年間に亙つて、誹譏罪を犯した婦人の年齡を調査した所、四十歲より五十歲までの者が最も多かつた。その他、自制力の減衰は更年期の女性にも見る處で、そのため萬引竊盜の如き罪を犯すことがある。ソーユは自制力の減却に因る萬引犯人五十六名中、十八人の更年期の女性を見た。

月經不淨觀の原因考察

原始的蠻族より文明國民に至る迄、月經を不淨汚穢視することは一般民族の慣習である。月經其者が決して不淨不潔のものに非ざることは、今日の醫學上に於ては既に明白なる處であるが、ヒツポクラテース及びガーレンの時代より中世紀時代に至る迄は、月經を以て體內に存在する有害性物質を排除する淨化機轉のやうに看做し、今日と雖も民族間には這般の迷信が廣く行はれ、啻に月經血のみならず、月經期にある女性をも不潔汚穢なるものとして取扱つてゐる。此の如き民族的慣習は抑々如何なる思想に淵源せるものであらうか。また果して月經期にある女性を不潔視すべき事實の存在するに由るのであらうか。之に就いて少しく私の所見を語りたい。

抑々往古時代に於て、「魔法」Magische Prozeduren 或は「魔術的現象」Magische Erscheinungen と稱せられた神怪的事實は、之を今日より見れば「ヒプノチスムス」（催眠術）及び催眠的狀態に他ならぬもので、這般の事象が男子よりも女子に多く認めらるゝことは疑なき處である。蓋し女子の「ヒステリー」に罹り易き事實、從つて此種の女性が自動的及び他動的暗示によつて、容易に

「エクスターゼー」「カタレプシー」等の狀態に陷り、神氣恍惚たる裡に種々奇異なる動作をなし、また豫言、託宣等をなすこと多き事實より、科學的知識なき古代の人民が、此樣な現象を眼前に見て、驚異畏怖の念に打たれたのは蓋し當然の次第であり、また古代より女性に巫祝、降神等の業をなす者の多いのもまた自然の數である。女子が巫女として神に奉侍することは其の起源甚だ舊く、バビロニア、アッシリアの太古に於て既に之を認むることが出來る。女子が神秘不可思議の超自然的魔力を有するものとして、人間と神或は精靈との媒介者となり、豫言、神託をなす所の宗派、即ち「シャマニスム」Shamanism も東洋の上古時代より行はれた。「シャマニスム」とは即ち女巫の敎の意である。支那の古代に於ても楚人が女巫を「靈子」と稱したのは神の子の意であり、また我國で女巫を「みこ」と呼ぶのも靈子の意である。此の如く一面に於ては、女性は神祇に仕ふる巫祝として尊崇せられたが、之と同時に他の一面に於ては、魔力 Dämonische Krafte を具へて、他人を蠱惑する恐ろしい妖魔のやうに信ぜられた。所謂魔女 Hexe の信仰と之に對する恐怖感情とは、東西民族を通じての迷信である。古人が女子を以て惡魔の權化の如くに看做したのは、必ずしも其の美しい、艶なる容貌が男子を誘惑し、國を傾ける資質あるのみでなく、女子其者を以て最初から妖魔に等しいものとした觀念もまた、大に與つて力があつたに違

ひない。

此の如く太古時代に於ける女性妖魔觀の思想は、女子特有の月經血にも神秘的魔力的意義を附し、驚怖すべき異常の性質を具ふるもののやうに信ずるに至つたらしい。『月經期にある女性が其の身體を暴露する時は、旋風、霰、雷電も忽ち止み、また女子が月經期に際し、裸體となつて田野を行く時は、蛹蟲、甲蟲及びあらゆる害蟲は死す』とまで信ぜられ、また『月經期にある女性の接觸した肉類は酸くなり、種子は實を結ばず、草木は枯死し、果實は墜落し、月經血を舐めた犬は發狂する』とまで恐怖せられた。(プリニウス氏『自然史』Plinius, Historia naturalis 參照)

此の如き思想は蓋し月經血は有毒なりとの想像に基き、而して月經を毒視する想像は、元來女性が超自然的魔力を具へて、其の體內には一種恐るべき神秘的物質を有すとの迷信に胚胎したものであらう。而して月經を有毒視する思想は、軈てまた之を不淨不潔視する觀念を生み、遂に牢乎として抜くべからざる民族的習性となつた。コッスマンの説に依れば、月經を不潔とする思想は、夙に有史以前より東洋民族間に成立したもので、それが希臘に輸入せられ、次いで羅馬が世界の大帝國となつて東洋をも支配するに至つてより、更に東洋思想が歐州に移植され、月經を不淨視する東洋民族の思想と慣習とが、遂に醫學にまでも影響するに至つたとある。

それから猶ほ考察の中に入れねばならぬことは、月經期に於て女性の精神機能に屢々異常障碍が起り、それがため傍人の眼を驚かすが如き奇異なる行爲の演せらるゝことも、月經に對して不可思議の觀念、不淨思想を抱かしめた一因子であることである。殊に神經病性、「ヒステリー」性の女子は、月經期に際して狂的發作を起すことが尠く無いから、益々月經に對する迷信が助長せられたに相違ない。

併し茲に注意すべき科學上の一事實がある。それは近年シックの實驗的に證明した事實で、即ち月經期に於ける女子の皮膚よりは、卵巢黃體の內分泌物たる化學的物質が汗と共に排泄せらると云ふことである。本誌創刊號に掲載した『月經の生物學的意義に關する一疑問』の中に述べて置いた如く、月經の發現と卵巢黃體の內分泌作用との間には密接の關係があるから、月經期に於て女體の血液中に輸入された黃體の內分泌物の一部が、皮膚の汗腺よりも排出せらるゝことは固より有り得べきことである。歐洲の民族間には、月經時の婦人が花草を永ゝ手に持つと、其の花は早く萎むといふ說話があるが、恐らくは事實と認むべきもので、黃體の化學的物質が汗と共に排出せらるゝがためであらう。既に此の如き事實が科學的に立證せられた以上は、前記の如き月經不淨觀も多少實際上の根據を有つてゐるやうにも想はれる。

醫學上より觀たる獨身生活の利害（上）

（一）

宗教革命家として史上に名高きマルチン・ルーテルは『人間が自然より賦與された性慾を抑制するは、恰も火の燃えず、水の濕ほさず、飮食せず、睡眠せざると同じく、全く自然に反せる行爲である』"Wer dem Naturtrieb wehren will und nicht lassen gehen, wie Natur will und muss, was tut er anderes, denn er will wehren, dass Natur nicht Natur sei, dass Feuer nicht brenne, Wasser nicht netze, der Mensch nicht esse, noch trinke, noch schlafe" と云つた。眞摯熱誠の大宗教家に甚だ不似合の言であるが、併しこれは恐らくは羅馬舊教の極端無意義なる禁慾主義に反抗せんがため、故意に放つた激語であらう。されど性慾は固より自然の本能であるにしても、果して食慾、睡眠慾と同一視すべきものであらうか。吾人は食せず、睡眠せずしては到底生きることは出來ないが、併し性慾に至つては之を滿足せしめずとも、依然として生活をつゞけ得られるでは無いか。食慾、睡眠慾は現在の個體保存に必要なる本能であり、性慾は未來の個體發生に必

要なる本能であるから、現在に於ける個體生存の上から見れば、性慾と食慾とを同一に取扱ふことは出來ない。されど茲に起る處の問題は、個體の生存上、性慾其者は無關係なるにしても、若し之を滿足せしめざる時は、健全なる生命が脅されて、病的障碍が惹起するか否かと云ふ問題である。私は此の重要なる性的問題に對して、醫學上の立場より觀察した處を披攊したいと思ふ。

私の見る處を以てすれば、健康なる男子に於ける性慾の禁克が、身心に有害なる影響を及ぼすことを初めて主唱した醫學者は、實に佛國の學者ラユマンで、千八百三十六年刊行の著書 Des pertes seminales, 1836 に於て、禁慾のために病的遺精及び神經衰弱症の起ることを說いた。之に次いでボックも强健なる男子が長く其の性慾を滿足せざる時は、遺精、睪丸及び精系部の疼痛、不眠、頭痛、ヒポコンドリーを來し、遂に次第に其の度の增加する陰萎に陷つて、生殖能力を失ふに至ることを說いた。此の如き所說は他の多くの醫家よりも唱へられ、俗間にもそれが信ぜられて、而も著しく誇張せらるゝに至つた。さればハインツ・スタルケンブルグの如きは、『思春期に達した後、性慾を滿足することは實に身心の健康の要件で、禁慾が身心に重劇なる傷害を齎すことは、あらゆる眞摯なる醫師の齊しく信ずる處である』とまで極言して、獨身生活の有害なることを高唱した。近世の神經精神病學者エルブの如きもまた强烈なる性慾を有する壯年男子の

之を滿足すること能はざるがために身心に著しき障碍を來した數多の實例を擧げた。

されど私は直ちに上記の如き所說に賛同することが出來ない。クラフト・エビング曰く『禁慾は非生理的と看做すべきものであるが、併しそれが有害なる結果を齎すのは、たゞ神經系の低格にして强き性的需要を有する者のみに限るのであつて、普通正常の人間に對しては、決して其の神經及び精神生活に何等の危險をも及ぼすもので無い』„Mann kann die Enthaltsamkeit als unphysiologisch beobachten. Aber sie hat nur für minderwertige Nervensysteme, die vielfach starke sexuelle Bedurfnisse haben, uble Folgen. Dagegen bietet sie für normale Männer niemals eine Gefahr für das Nerven-und Geistesleben“と。私は實に此の說に同意するものである。之を他の信用ある醫學者の所論に徵しても、禁慾が一部の醫家及び多くの世人の信ずるが如き、有害のものに非ざることは明かである。依つて私は先づ近世醫學の文獻中より、吾人の信賴すべき醫學者の禁慾無害說を少し許り列擧して見よう。

有名なる瑞西の精神病學者フォーレルは曰く『私は未だ嘗て禁慾によつて起つた精神病を見たことは無い。さりながら黴毒や房事過度等のために起つた精神病に至つては實にその無數を見た』と。また曰く『壯年の男子には其の結婚する迄、童貞の啻に倫理的及び審美的のみならず、ま

た衛生的にも最も有効なることを吾人は固執しなければならぬ」„Nie habe ich eine durch Keuschheit entstandene Psychose gesehen, wohl aber zahllose solche, die die Folge von Syphilis und Exzessen waren“ „Wir müssen dabei bleiben, dass für den jungen Mann bis zu seiner Verehelichung die Keuschheit nicht nur etisch und aesthetisch, sondern auch hygienisch das Zuträglichste ist“ と。

有名なる獨逸の花柳病學者ブラシユコは曰く、「靑年社會に汎く擴がれる「健康のためには二週毎に一回性交を行はねばならぬ」との説は全く愚説である」„Die in den Kreisen junger Leute weit verbreitete Annahme, man müsse „der Gesundheit halber“ alle paar Wochen einmal den Beischlaf ausäben, ist ganz unsinnig“ と。

佛國巴里の神經精神病學者フルニエ曰く、「人は無作法輕卒にも、男子の禁慾の危險なることを言ふけれども、私は君等に向つて此樣な危險を私の知らざることを告白する」„Man hat ungebühlich und leichthin über die Gefahren der Enthaltsamkeit für den Mann gesprochen. Ich gestehe euch jedoch, dass Ich derlei Gefahren nicht kenne“ と。

瑞典の有名なる性衛生學者リッピングは曰く、「童貞は精神をも身體をも害せず」„Keuschheit

schadet weder der Seele noch dem Körper" と。

右の他、英國の醫學者アクトン、バーゼー、ガワース、獨逸の醫學者ヘーガル、オイレンブルグ、及びフユールブリンゲル等、いづれも禁慾の決して健康に害なきことを論じた。就中ヘーガルの如きは、彼の獨逸社會黨の領袖たりしベーベルの著『婦人と社會主義』Die Frau und Sozialismus 中の所説を駁して、禁慾が決して色情狂を來すこと無きを說き、またオイレンブルグも、秩序正しき理性的生活をなすものが單に禁慾のために神經性疾患を發するといふが如きは、甚だ疑はしきことであると云つた。

抑々獨身生活の害否は私共の見る所を以てするに、先づ第一に個人の素質如何にある。生來身心の健全なる者ならば、たとひ其の性慾を抑制するとも別に著しい害のある筈は無い。之をレーウエンフエルドの說に徵するも、二十歲乃至二十四歲の男子に於ては、二十四歲乃至二十六歲の男子に比して、禁慾のために身心の障碍の起ることは稀有で、且つ殆ど記するに足らず、また二十四歲乃至三十六歲の男子でも、健全なる者にあつては、僅かに性慾過敏、輕度の眩暈發作、「ヒポコンドリー」性觀念等の起るに過ぎない。從來禁慾のために發生するが如くに思はれた種々の疾病、例へば遺精、精液漏、精系及び睪丸の有痛性炎症、精系水腫、陰萎、色情狂等の如きは、

ヘーガル、グルーベル等も論じた如くに、却つて情慾を縦にして放蕩淫逸を極めた者が、その後禁慾を餘儀なくされたがため起ることが多く、直ちに禁慾其者より發生するものと認むることは出來ない。

されど一歩を進めて論ずれば、禁慾の身心に害なきは生來健康正常の人間に於てのみ見る處で、神經病性素質を有する者、或は荒淫のために性的興奮性の亢進せる性的神經衰弱症 Sexuelle Neurasthenie 患者等にあつては、僅かに有害なることを注意しなければならない。また普通正常の人間に於ても、其の全生涯を通じて強いて其の性慾を抑制するが如きは固より不可である。尤も彼のニユートン、カントのやうに一身を學問の研究に捧げて之に沒頭するが如き者は、性慾の發動興奮する機會も無く、從つて純潔なる童貞生活を送り得らるゝも、凡人庸夫にして無理に自然の本能を抑制することの不可能であり、且つ危險であることは固より言ふ迄も無い。トルストイ、ワイニンゲル、グラボフスキー等は性慾其者を害惡視して、一生涯之を禁克すべきことを唱導したが、併し此の如きことは到底一般の常人に期待し得られない。私共はたゞ衞生的及び道德的見地よりして、結婚する迄性慾を抑制すべきこと、且つ健康なる人間ならば其の決して有害ならざることを認め、其の實行を唱ふる者であるが、併し神經病性素質の人間にして、且つ容易に

結婚することの出來ない事情ある者に對しては、禁慾の危險なることを肯定せざるを得ない。殊に性慾の亢進せる病的素質ある者が強いて之を抑制すれば、クラフト・エビングの云つた如く、神經精神病を惹起し、且つ強烈なる性慾を禁壓する結果として、神經性興奮狀態が發起し、重症の神經病、淫亂症を來す虞がある。エルブもまた神經病性遺傳を有し、感情に強く性慾の興奮し易き男子は、禁慾のため屢々遺精、強迫性手淫、不眠、勞働不能、生殖性神經衰弱症に罹ることを說いた。

されば禁慾の有害なると否とは個人の素質如何に關するもので、健全なる理性を有し、學術の研究、宗教の宣傳等に專心沒頭して、外界の刺戟、誘惑を回避するが如き人ならば、たとひ禁慾生活を送るとも、其の身心に何等の障碍を來すことも無いが、之に反して神經病的素質を有する上にも、不健全なる文學を讀み、卑猥なる社會に出入し、酒類を飲用するが如き者が、強いて其の性慾を抑制すれば、前記の如き身心の病的障碍を來すことになる。シユレンク・ノッチンクが性慾抑制の結果として、性慾の倒錯及び淫亂症が起ると云ひ、フロイドが生來性慾の強く旺んなる者が強いて之を抑壓すれば、神經衰弱症、「ヒステリー」性苦悶狀態を來すと云ひ、デヤストロウイッツが「ヒポコンドリー」鬱憂狀態に陷ると云つたのは、いづれも病的素質ある人間に就いての實驗より、斯くの如き結論に達したのである。

日本に於ける生殖器崇拜の起源及び成立に就いて（下）

（四）

以上說くが如く、我國では夙に上古時代から南洋及び亞細亞東北大陸より輸入された生殖器崇拜の行はれてゐた處へ、更に佛敎に附隨して輸入された印度思想が、此の風習を助成するに至つたことの爭ふべからざる事實である。印度に於ては古代より生殖器崇拜の風汎く行はれ、今に至るも猶ほ衰滅しない。男根を「リンガム」、女陰を「ヨニー」と稱し、寺院殿堂の壁畫中には猥褻なる圖畫が多數にあつて、いかにも生殖器崇拜の甚だしきを具象的に示してゐる。印度敎の寺院には怖ろしい程大きな男根が具へつけられ、また信者は宗敎上の裝飾具として、小さな形の陰莖を頸にかけてゐる。また寺院内には屢々男女兩陰の相結合した彫刻像が見受けられる。それは女陰の形を摸した石製の盆の中央に、「リンガム」を立たしめたものであるが、此の如く男女の生殖器を結合せしめたものは、之をPulciar と稱し、生殖力増强の表象とする。而して此の彫像は每

日清められた後、花や香氣のある木を以て裝飾せられ、信者は之に水或は乳を注ぎ、その滴り落つる液を取つて治療用に供し、或は魔術を行ふに用ゆるとのことである。また不姙の女は、その陰部を「リンガム」の尖に觸接し、また處女は他に嫁するに先つて、「リンガム」の上に跨り、その處女膜を破らしむるとの傳說もある。此の如く生殖器崇拜の風盛んなる印度の風習は、佛敎と共に吾國に輸入せられたが、殊に眞言密敎は此の風習の傳播を著しく助成した。

人の知るが如く眞言密敎では、天地萬象を金剛界と胎藏界との二部に分ち、之を理智の二者を代表するものとなし、更に之を男女の兩性に配し、男は決斷の智あるが故に金剛界の德を具へ、女は靜の德あるが故に胎藏界の德を有すと說き、理智の冥合と男女の交接とを同一視し、性交を以て即身成佛の秘術であるなど〻唱へ出し、『瑜珈行品』中の『男女二根相交會する時、五塵大佛事を成す』と云ふことを引證して、生殖器崇拜の風習を助長せしめた。此の如きは所謂立川流の眞言に於て說く處で、前記の印度思想の外に、支那一部の道敎者間に於ける生殖器崇拜の觀念及び我國神道のイザナギ、イザナミ陰陽二神の傳說をも加味して、『赤水心經』『白水心經』等の經典を僞作し、男女の交りを以て理智の冥合にして成佛の因となし、當相即道の妙、餘敎超絕の大秘と言明して、一時多くの信者を獲得した。

佛教と共に輸入せられた印度思想の影響を受けた結果は、生殖器崇拜の對象として種々の生殖神が現出するやうになつた。平安朝時代には、既に京洛の街衢に男根女陰の彫刻物を立てゝ、之に幣帛を捧げ或は香華を供して禮拜する風習が行はれた。『扶桑略記』の天慶二年の條に『近日東西兩京大小街衢、以木作レ神、相對安置、凡厥體像、髣二髴丈夫一、頭上加レ冠、鬢邊垂纓、以レ丹塗レ身、成緋彩色、起居不レ同、或所レ作女形、對二丈夫一而立レ之、臍下腰底、刻繪陰陽、構二几案於其前一、置二杯器於其上一、兒童猥雜拜禮、慇懃捧二幣帛一、或供二香華一、號曰二岐神一』とある。されば當時代に於ては、既に男女兩性の生殖機關を神に祀つて之を岐神と稱し、幣帛、香華を其前に供して崇拜したもので、我國上古時代よりの生殖器崇拜に印度思想の混合したものと認むべきものである。此の如く既に平安朝時代に於て生殖器崇拜の風習は都人の間に盛んに行はるゝやうになつたのみならず、當時代の漂泊者たる『傀儡』(くゞつ)にも此の風習の行はれたことは、大江匡房の『傀儡記』中の記事に徴しても明かで、『夜に百神を祀りて鼓舞喧嘩し以て福助を祈る』とあり、而してその『百神』なるもの一に百太夫と稱せられて、同じく匡房の『游女記』に之を『道祖神の一なり』とあるを見れば、所謂『百神、百太夫』の生殖器神なることが容易に推定される。此の如くにして、生殖器崇拜の風習は年を逐ふと共に世に擴がつて、一方には道饗祭、道祖神祭等が行はれ、

また幸の神、道陸神、鹽釜明神等の如き神名の下に、男根を神體として奉祀する風も盛んとなつて來た。而して中世以後よりは、更に印度に於ける性的崇拜の對象物たる歡喜天、大黒天等の崇拜もまた、大に世俗間に行はるゝに至つた。

それから猶ほ中世以後より近世にかけて、男根を象徴した製作物が攘災除病の護呪として愛玩せらるゝやうになつた。其の中にも『蘇民將來』と『卯槌』とは神社及び寺院より賣り出されて、民間に汎く弘まつたものである。其の起源、由來は明白でないが、兩者共に其の形態、色彩、紋樣が男根を象徴したことは一見明かで、同一系統のものたることは殆ど疑が無い。

毛髪戀愛——截髷漢

長い、柔い、艶のある、房々とした婦人の頭髪は、實に女性美の一として異性の愛慾を唆るものである。羅馬の帝政時代に於ては特に金髪が賞美せられたので、當時の婦人社會にはわざと其の頭髪を黄金色に染め、或は金色の鬘を被りなどして、異性の注目を惹くに勉めた。我國では上古時代より、頭髪の特に長い婦人が美人として持て囃されたが、平安朝時代に入つてよりは、女子蟄居の風が起り、あらはに其の顔を人に見せぬ用意に几帳を垂れ、或は檜扇を當て、或は髪を振りかけるやうな慣習となつた結果、顔貌以外のものに美の標準を置き、他人の眼に附き易い頭髪の長く美しいのを美人型の一と看做すやうになつた。それ故、當時代の物語本を讀むと、美人の容姿を描く個處には、特に黒髪の長く美しいことを記してあるのがうるさい程眼に附く。例へば『榮華物語』に『御ぐしの紅梅の織物の御ぞの裾にかゝらせ玉へるほど、ひまなう、やうじ掛けたる樣にて、御たけは七八寸ばかりあまらせ玉へらんかし云々』とあるが如き、『大鏡』に『御ぐしの上にいと長く曳かせ玉ひて出でさせ玉ひしは、いとめづらかなりしこと哉』とあるが如き、また『紫式部日記』に『髪うるわしく、もとは、いとこちたくてたけ

は一尺餘あまりたりけるを』とあるが如き、また『文德實錄』に檀林皇后のことを記して『后爲レ人寛和、風容絶異、手過ニ於膝一、髪委ニ於地一、觀者皆驚』とあるが如く、いづれも頭髪の長いのが讃美されてある。されば顔貌はさのみ美しくなくとも、頭髪の長く美しいがために美人と看做された者もあつた。例へば『源氏物語』を見るに、末摘花といふ女は、色靑く顔非常に長きが上にも鼻の尖が赤く爛れ、痩せぎすの醜い女であつたが、其の髪だけが長く麗はしかつたので、光源氏の好色心を挑發した。『源氏物語』の『末摘花』に此の女の髪の有様を敍して『頭つき髪のかゝりはしも、美しげにて、めでたしと思ひ聞ゆる人々にも、をさ〳〵劣るまじう、うちきの裾にたまりて曳かれたるほど、一尺ばかり餘りたらんとおぼゆ』とある。

女性の頭髪美を讃美し、また之に憧憬するのは固より生理的である。併し頭髪に對して異常の戀着心を抱き、其の匂ひを嗅ぎ、或は之を瞥見し、或は之を撫で、或は掻き亂すことによつて快感を覺え性慾を滿足するが如き者に至つては、慥かに病的人間である。這般の變態性慾は、女性身體の一部分たる眼、口唇、鼻、手、足等に對して、異常の戀着心を抱く處のものと其の性質を一にする『節片性淫亂症』(性的崇物症 Fetischismus であつて、特に之を稱して毛髪性節片淫亂症 Haarfetischismus と云ふのである。既に千七百八十五年の頃、アルヘンホルツは其の著『英國と伊國』England und Italien, 17,5 の中に、ある英國人が美人の頭髪を自ら梳ることによつて絶大の快感を覺え、それがために美しい妾を置き、時々留針を除去せしめて自分の

手で其の髪を搔き亂し、燃ゆるが如き情熱を滿足して、最大の快樂を感じた者のあつたことを記述した。此様な異常性慾はまた往々同性愛を好む婦人に於ても認めらるゝ處で、ダヌンチオの創作『快樂』Lust（獨逸譯）の中には婦人が婦人の頭髪に愛着憧憬することが描寫されてある。

此の如く女性の頭髪を異常に愛好する者は、之を瞥見して性慾の發揚興奮する結果、暴力を以て其の婦人の頭髪を截り取り、之に接吻し、或は其の匂ひを嗅ぎ、或は之を撫でゝ性慾を滿足することがある。所謂截髻漢 Zopfschneider と稱せらるゝ者が此種の人間で、這般の變態性慾的行動は、特に十八世紀時代に盛んに行はれたことがあつた。我が國の江戸時代に於ても屢々髪截りのあつたことは、當時代の種々なる隨筆中に散見せる記事に徵して明かである。例へば『諸國里人談』に『元祿の初、夜中に往來の人の髪を切ることあり。男女共に結びたるまゝにて元結際より切り、結びたる形にて土に落ちてありける、切られたる人曾て覺えなく、いつ切られたりと云ふことを知らず。此のこと國々にありける中に、伊勢の松阪に多し。江戸にても切られたる人あり。云々』とあり、また『敗鼓錄』にも『明和六年春末より初秋の頃まで、江戸市中の婦女、曾て眼に遮るものもなきに忽然として頭髪を截らるゝこと幾百千人といふことを知らず』とあり、また『善庵隨筆』にも『予幼かりし頃、髪截りとて一時流行せしことあり。その後も一二見聞せり。これ狐妖とは云へど道士の狐を驅使して然らしむるにて、大抵は婦人の髪を截り、男子の髪を截ることを聞か

ず」とある。思ふに此の髪截りと稱せられたものの中には一種の絲狀菌が頭髪に寄生するより起る處の傳染性毛髪病、即ち寄生性毛髪斷裂症 Trichorrhexis parasitaria に起因するものもあつて、それが流行性の髪截りとなつたこともあるかも知れぬが、併しまた前記の如き毛髪性節片淫亂症に罹つた異常性慾の人間のある時は、其の都市村落に於ける多數の婦人が、其の頭髪を截り取らるゝことのあるのも固より怪しむに足らない。

途上に邂逅した婦人の頭髪を截り、或はそのため同時に頭部に負傷せしめて警官に拘引せられ、法に問はるゝ者の尠からざることは、從來の醫書及び醫學雜誌に於ける記事や報告を見ても明かであるが、本年四月發行の『ミュンヘン醫事週報』第六十九年第十四號の紙上に掲載されたペテルセンの報告『截髪漢』(Petersen, Ein Zopfschneider. Münch. med. Wochensch. Nr. 14, 1922) は、特に其の事實の新しいがため、左に其の要旨を抄出して、讀者諸氏の一粲の料に供することにする。

三十歳の未婚の商人、千九百二十年の耶蘇復活祭日に、一處女の金髪を截り取つたがため拘引せられた。此男の家系は精神病者で、母の二人の姉妹は十年來癲狂院に入院し、また其の一人の兄弟は白痴、他の一人は酒客である。母の生んだ十人の子供の中、五人は早く痙攣で死し、他の生き殘つた五人の中、一人は痴愚、四人は眼病を病んでゐる。

被告の身體を精驗するに、心臟神經病(心動迅速症)及び輕度の眼球震顫の他には異常なく、智力は多少制限せられてゐる。十年以前、

五迷突深さの堀に陷つて頭部を打ち、且つ上膊の骨折を來したことがある。それより以來、數ヶ年間は著しき精神興奮、睡眠不足、强度の心動迅速、震顫に惱んだ。世界戰爭中、滿四年間戰役に從ひ、二十七回も大戰爭小戰爭に加はつたが、併し重傷を受けなかつた。

被告の性慾倒錯に就いて其の陳述する處に依ると、八歲の時より一商店に傭はれて、可なり長い間仕事に從事してゐた。其の家には同年の金髪の少女があつて、其の頭髪を梳るのを何時も見る每に、被告は大なる快感を覺え、發情するのが常であつた。思春期に入つてから後は、金髪婦人を瞥見すると性慾が忽ち發動し、每回自慰を試みた。そして金髪に對する愛着と要求とは次第に强くなつて、若し金髪婦人に遭遇すれば、屢々二三日間も精神が興奮して、不眠、苦悶、頭痛等を來し、爲めに仕事をなすことが出來ない。此樣な時には自慰によつて精神の興奮を沈靜した。彼は金髪婦人の髪を密かに拾ひ取つて之を集め、其の匂ひを嗅いだり、或は之を撫でたり、或は瞥見したりなどして、其の異常の性慾を滿足してゐたが、併し人目を忍んでするのであるから、何人も彼の變態性慾と之に因る內心の葛藤とに氣づかなかつた。

然るに、千九百二十年の耶蘇復活祭日、彼は或料理店で葡萄酒を飮んでゐた時、偶々途上に金髪婦人の姿を見たので、突然馳せ行きて衝動的に懷中鋏を取出し、婦人の髷十仙迷計りを髮り取つた。當時彼は酒に酩酊してゐなかつたが、併し飮酒によつて多少意識が麻痺してゐたことは言ふ迄も無い。彼は一ヶ月の禁錮に處せられた。

上記の如き髪髷漢は必ずしも稀有なるもので

無く、夙にクラフト・エビング等の著書にも掲載されてある。其の中の一實例の如きは頗る極端なもので、三十歳許の位置高き男子であるが、既に十歳頃の少年時代より婦人の頭髪を見れば直ちに快感を覺え、詩を詠じ文を草して、女の髪の美麗なることを讃美し、非自然なる方法の下に其の燃ゆるが如き性慾を滿足した。而して女の髪に觸れた許りでは猶ほ充分なる快感を得られないので、之に接吻し、或は吸吮することによつて、始めて愉快に其の色情を滿足することが出來た。若し女の髪を見る機會なき時は甚だしく不愉快となり、已むを得ず脳裡に美しい女の髪を想像しつゝ自慰を行つた。途上貴婦人に邂逅すれば、先づ第一にその頭髪を注視し、色情勃々として燃ゆるのあまり、頭に向つて接吻せんとする心が起つて、胸内の苦悶實に喩ふるに物がない。一日それがため一處女の頭髪を截り取つたこともあり、また密かに貴婦人の髪の櫛目に殘つたものを盗み、之を口にしつゝ自慰をなしたこともあつた。またマグナンの報告した二十五歳の男子の如きは、其の平素夢に見るものは、いつも婦人の美しい頭髪で、若し之を實際手に觸るゝ時は、忽ち發情して射精した。一日街道で少女の頭髪三條を截り取つたこともある。

上記の如き毛髪性淫亂症のあるかと思へば、それとは全く反對に禿頭に對して異常なる愛着心を抱く者もある。ヒルシュフェルドは『禿頭性淫亂症』Glatzenfetischismus と稱すべき一賣笑婦に就いて記述した。ブロッホも二三の民族に於ては、脫毛が却つて性的刺戟となることを記した。我國にも美しく剃られた坊主頭に惚れた者も無いではない。

迷信と猥褻罪

變態性慾的行動及び之に起因する猥褻罪は、必ずしも先天性若しくは後天性精神異常者の所爲に出づるに限つたもので無く、往々迷信に基くこともある。我國の俗說に『初物を喰へば七十五日長命する』と云ふ迷信から、未通の少女を犯したり、或は千人の女に通ずれば現世利益ありとの迷信より、亂倫の所行をなす者のあることは珍らしくもない事實であるが、歐州に於ても之と同樣の迷信があつて、處女を姦すれば花柳病が治癒するとか、或は處女に交れば生命が延びるとか、或は處女の身體より出づる蒸發氣は老人を若返らさすとか云ふ迷信から、少女を犯す者が尠く無い。所謂『色情性兒愛』Pädophilia erotica なるものは這般の迷信に起因するものであるが、其の甚だしきものに至つては、嘗てアムシュルの千九百四年刊行の『刑事人類學寶函』第十六卷 Archiv für Kriminalanthropologie. Bd. 16 の紙上に公にした如きものさへある。それは花柳病性潰瘍に罹つた一農夫が、純潔なる少女との性交のみによつて、諸病が治癒すると云ふ他人の說に唆されて、自身の娘を犯したと云ふ一實例である。

上記の如き迷信は夙に太古時代より行はれたもので、羅馬帝國時代に於て、少女、姙婦、果

奴等を犯すことによつて、淋病の治癒すると云ふ迷信の行はれたことは、名醫ガーレンの著書中にも記載せられてある。また獸姦も淋病、黴毒を全治する方法として之を行ふ者のあることも周知の事實で、ポラックの説に依れば、波斯國の醫師は淋病を患ふ者に獸を姦せしむる風習があると云ふことである。されば此の如き淺薄卑俗の迷信より猥褻罪に問はるゝ者も決して尠く無い。私は今茲にアルベルト・ヘルウイツヒが嘗て『法醫學三箇月月報』Vierteljahresschrift für gerichtliche Medizin 紙上に公にした『猥褻罪と迷信』Sittlichkeitsverbrechen und Aberglauben の中より其の若干例を摘載して見よう。

ヒルト判事は十七歳の男子が八歳の幼女を强姦した一例を報告した。其の動機は純潔の處女と交れば淋病が治癒するといふ迷信であつた。彼は固より淋病の傳染性疾患なることを能く知つてゐたが、併し處女だけには傳染しないものと信じてゐた。だから彼は故意に自己の病氣を少女に傳染せしむる積りで猥褻行爲を演じたのでは無く、全く俗間の迷信を眞に受けて、其の惡性淋疾其者を治癒せしめんがため、八歳の幼女を犯したのであつた。

姙婦を姦することによつて淋病が治癒するの迷信から、强姦罪を犯す者も尠くない。その一例はリムバツハに依つて報告せられた。またマグヌス・ヒルシユフエルドは良家の一處女が姙娠して、而も黴毒に罹つたものを診察したが、其の病歷を訊き質して、彼女が嘗て一官吏に性交を許したことが分つた。彼女の自白に依れば、その官吏は重症の黴毒に罹つてゐたの

で、之を治癒するには未通の少女と交るにありと云ふ考から自分を挑んだがため、善意を以て之に應じたといふのである。思ふに此の處女は性交の意義を知らず、また男子の方でも無垢の處女には黴毒の傳染しないものと誤信してゐたのである。

　遺尿癖のために主家より解雇せられた一少年は、七匹の野鼠に婦人の陰毛を加へて壺の中で燒き、それを内用すれば遺尿が治癒するとの俗信に動かされ、婦人の陰毛を獲んがために、白晝二人の婦人を凌辱したことがある。そのため彼は強姦未遂罪の名の下に捕縛せられたが、併し性慾を滿足せしめんがために婦人を辱しめたのでは無くして、ただ其の陰毛を毟り取り或は截り取らんがための目的に出でたのであるから、強姦未遂と目すべきもので無く、猥褻罪、或は傷害罪に問ふべきものであることは固より論を俟たない。

　ハベロック及びクローンフエルドの蒐集した歐州諸國に於ける民間療法の中には、上記の如く、處女或は姙婦との交接によつて淋病、黴毒を治癒せんとする迷信のある外にも、シユワーベン地方に於ては、牝馬或は牝驢馬との獸姦が同じく花柳病を治するとの迷信が行はれ、無智無識なる患者をして、此等の猥褻罪を犯すに至らしむることが頗る多い。其の甚だしきものに至つては、アムシユルの報告した如く、自分の娘をも犯すに至るものさへある。これは前にも一寸書いて置いたが、茲に其の大要を述べると、此の犯人はアントンと云ふ小作人であつて、股關節部に疼痛性の潰瘍を生じ、それが荏苒治癒しないので、或鐵道員が此樣な病は處女

との性交のみによつて始めて治癒すると告げたのを眞に受け、遂に最後の方法として之を試むことに決心したが、其の老齢にして且つ醜貌であるのと、また貧乏なるとのため、思ふやうに少女を獲ることが出來なかつた。そこで彼は自身の第二女ローザといふ十九歳の處女を犯すの已むなきに至つた。此の娘は三年の間に二三回許り無智無頓着なる老父の性的犠牲となつた後、ある大工と婚約を結び、彼に對して過去の罪惡を打明けて懺悔したことが、圖らずも世に知れて大評判となり、遂に近親相姦の廉を以て拘引せられ、アントンは十八ヶ月の禁錮、ローザは禁錮一ヶ月の刑に處せられた。

歐洲文明國に於ても今猶ほ上述の如き戰慄すべき迷信が行はれて、無垢の處女、良家の婦人の性的犠牲になりつゝあることを思ふ毎に、私は迷信が如何に根强く如何に其の害毒を逞しうするかの甚だしきに寒心せざるを得ない。我國にも古來此種の迷信が可なり行はれて、猥褻姦淫罪を犯す者が絶えないやうである。「性教育」「性衞生」の必要なることは這般の事實を見てもまた明かであらう。

腹帶

吾が邦の古俗として、婦人妊娠して五ヶ月に至れば腹帶をする。「換杳新話」には後藤椿庵の說を引證して、「腹帶は鳥羽天皇の皇后に始まれり。當時四海大に亂れて、鑾輿屢々蒙塵するが故に流產を恐れて帶を以て腹を縛したるなり。」と云つた。眞僞如何を知らずと雖も、恐らくは此の如きことから漸次腹帶が世に行はれるに至つたのであらう。

强姦の鑑定難

强姦を法醫學的に鑑定するには、加害者と目せらるゝ男子に就いて行ふことは殆んど絶無であつて、被害者たる女子に於てのみ之を行ふのが常である。而して女子に就いて之を鑑定するには、陰部の解剖的變化、膣及び其の附近に於ける精液、身體に於ける抵抗の痕跡、及び花柳病傳染の有無等であるが、併し此の中最も重要であるのは、陰部の解剖的變化であつて、即ち暴行的性交に因る生殖機關の損傷の有無を證明することである。さりながら這般の損傷は、未だ異性に觸接せざる少女に於てのみ認めらるゝ處で、既に幾囘も異性に接した婦人に於ては、殆ど之を證明することが出來ない。少女に於ては、處女膜の破裂、膣乃至會陰の損傷等が認めらるゝも、併し之を證明したからと言つて、直ちに强姦されたものと斷定し得られない。何となれば、强姦偽訴の目的を以て本人自身、或は其の周圍にある者が故意に其の陰部を傷つけることもあるからである。だから法醫學上に於ては、强姦されたと告訴した女子を檢査して、處女膜の破裂及び陰部の損傷を認めても、それは硬固なる鈍器の作用に由る暴力的損傷と鑑定すべきものであつて、輕卒にも强姦に因るものと明言することは出來ないのである。蓋しそれが

果して强姦によつて生じた損傷であるか否かは、現行犯を見ない限り到底客観的に認識し得られるものでなく、强姦の行はれたか否かに就いては、裁判官の主観的判斷に任すの外はない。

　これ實に法醫學上、强姦を確實に鑑定することの困難なる所以の一であつて、たとひ心の中では、十中の七八まで强姦に因る損傷なるべきことが判つてゐても、法醫として鑑定書を起草するに當つては單に客観的に見た處のみに留め、決して『强姦に因る損傷と認む』と云ふやうな主観的判斷を記入してはならない。私が特に此樣なことを喧しく言ふのは、世の中には强姦されたと虚僞の告訴をして、被告の男子より金錢を貪ぼらんとし、或は其の名譽を陥れんとして、自分の娘の陰部を故意に傷つけ、强姦に因る損傷を装ふやうな惡漢も往々あるからである。

　膣及び其の周圍に於ける精液の證明は、性交遂行の鑑定の材料となつても、併し和姦なるか强姦なるかは固より之によつて判る筈が無い。且つ强姦の告訴は被犯後直ちに申し出づる者は甚だ稀で、多くは既に多少の時日を經過してゐるから、被姦者の陰部及び其の周圍、又は衣服等に精液を發見することが出來ない場合が甚だ多い。それ故、精液存否の證明も鑑定上にとつて左程の意義効果も無いものである。

　身體に於ける抵抗の痕跡は成人した婦女に於て認めらるゝ處で、即ち陰部の他、股、下腿、腕、頸圍、胸部等に於て、皮膚剝脫、溢血、時としては猶ほ大なる疵傷を見ることもあり、また加害者たる男子に於ても、被害者の抵抗を受けたため、屢々顏面、前腕、股、陰部等に搔傷、

咬傷等を生ずるものであるが、併し幼女少女が強姦された場合には、抵抗力の無きがため、此様な抵抗痕跡が少しも證明せられず、また成人した女性でも、熟眠時、催眠狀態、麻醉狀態に於て強姦された場合には抵抗の痕跡が無いから、強姦の證跡を擧げることは甚だ困難である。

花柳病を被害者に認めた時、更に加害者を檢して同一の疾病に罹ることを認め、且つ被害者に於ける花柳病の發生及び經過時日を精査して、強姦されたと云ふ日と一定の關係あることが判明した場合には、性交行爲によつて傳染したことだけは明かであるが、併し此の場合に於ても、それが果して強姦和姦いづれであるかは固より明かにすることは出來ない。

以上概述するが如く、科學的に強姦なることを立證することは實に困難なるが上にも、強姦の申立には實際上僞訴に出づることが多いから、餘程注意しなければならぬ。

カスペルは十一歳の幼女が強姦の辱を受けたとて、其の母親の訴へた事件に就き、親しくその女兒を檢した處、其の局部には何等の損傷もなく、たゞ淋疾を患つてゐることを認めたので、更に被告の男子を檢査した處、淋病を患つたこと無く、却つて徽毒に罹つてゐることを發見し、女兒の現症と被告の疾病との全く相異れることを突きとめ、之を僞訴と鑑定した。そこで裁判官は原告たる母親を詰問した處、果してカスペルの鑑定通りであつた。その母親は貪慾飽くことを知らざる惡婆で、大金を貪ぼらんとする目的から、故意に知人某をして其の兒女を姦せしめ之に淋疾を傳染せしめ、富豪某より強

姦せられたと僞訴したのであつた。

　マシユカが世に報告した强姦事件に於て、一處女の癲癇發作の際、被告男子のために米穀倉庫内に運び入れられ、其處で姦淫されたと申し立てたが、直ちにその僞訴なることが看破せられた。それは何故かといふに凡て癲癇發作の際は全く意識を失ひ人事不省に陷るのが常であるのに、右の處女は其の當時の事情を明かに申し立てたからである。これもまた被告から金錢を貪ぼらんがための僞訴であつた。

　またカスペルは姉の夫から姦淫されたと訴へ出た一處女を檢したが、毫も破爪の徵を認めなかつたので、嚴しく詰問した處、遂に姉の請に從ひ、其の夫と離縁せしめんとの目的より、斯く僞訴に及んだことを白狀した。

　それから猶ほ吾人の注意すべきことは、酩酊或はクロ、ホルム麻醉中に性交を夢み、或は之を幻覺して强姦せられたと信じ訴を起すことである。また豫じめ謀つて相手の男子に酒を强い、巧言令色以て其の淫慾を挑發し、或は自ら酒を飲み、其後になつて男のために酒を强いられ酩酊して前後不覺となつた時强姦せられたと訴へ、金錢を騙取せんと企つる莫連女のあることをも知らねばならぬ。されどカスペル、リマン及びマシユカは　姦事件を鑑定するに當り、該婦人の擧動態度をも檢することの必要なる所以を指摘した。蓋し經驗の教ふる所に依るに、實際上强姦の不幸に逢つた女子は醫師の檢査を受くるに當り、その擧動靜肅にして容易に陰部の檢査を許すものであるが、之に反して强姦を僞訴する無恥厚顏の莫連者は、外觀上强いて陰部の檢査に反抗し、或は殊更に羞恥の態を裝ふ

者が多い。また強姦の僞訴をなす者には「ヒステリー」性の婦人が尠く無い。それは好んで他を陷れんとする病的性癖に基き、或は異常に興奮した性慾、或は交接の幻覺に因るのである。此の如く強姦を僞訴する婦人は、一般に成人した者であり、また有夫の者も多いから、固より法醫學的檢査を施しても、其の事實なるか僞訴なるかを明かにすることは出來ない。ただ裁判官の主觀的判斷に任すの外は無いのである。それがため往々誤判が下されて、被告の男子が思ひも掛けぬ冤罪を負はされ、罪なくして牢獄に呻吟するやうなことがある。現に杉村楚人冠氏が『中央公論』第二五年第一號に掲載した『變な女』から、強姦の僞訴を提起されて牢獄に投ぜられたが上にも、醫師開業免狀をも取り上げられた岸（假名）某といふ醫師もあつた。

陰核

陰核は元來睾丸の別名であつて、「クリトリス」Klitorisの譯名とすべき語で無い。『倭名類聚抄』に「刑德敎云、丈夫淫亂割二其勢一、勢者則陰核也」とあり、『伊呂波字類抄』にも「陰核、勢」とある。而して和語には陰核即ち睾丸を篇乃古（へのこ）といふ。「へのこ」の元來陰莖に非ずして睾丸の義なると「箋注倭名類聚抄」にも「以レ勢爲二陰核一、後世宮刑割二去陰莖一者誤、皇國今俗謂二陰莖一爲二篇乃古一亦誤」とあるを見ても判る。想ふに「クリトリス」を俗にサネと云ふより陰核なる字を誤て當て嵌めたのであらうが併し「クリトリス」に該當する語は漢名では「陰舌」、「吉舌」和語では「ヒサナキ」である。又挺孔の譯字も當て嵌まらない。蓋し挺孔とは元來「溺孔」の端を指した挺孔、又は廷孔の字を挺に變じたもので、「陰挺」と云ふのならば「クリトリス」に該當するが、孔の字を附すべき理は無い。私は「クリトリス」の譯語として「陰舌」若しくは「陰挺」の語を使用したい。

性的崇物症（節片性淫亂症）Sexueller Fetischismus

——變態性慾要說（三）——

性的崇物症とは異性の全人格に對して戀愛の情を抱くのでは無く、ただ其の身體の一部分（例へば眼、耳、口、毛髪、手、足等）或は其の所有物（例へば指輪、短靴、手巾、襯衣等）に對して異常の戀着心を有するものである。普通の人間に於ても、異性の涼しい眼元、薔薇の如き頬、雪の如き肌膚、柳の如き細腰等に憧憬することがあり、また戀人の紀念として殘し置いた指輪、手巾等に愛慕の情を寄せ、或はきぬ〴〵の移り香懐しき袖袂に切なる思ひを抱くこどもあるが、併し病的の人間にあつては、其の愛し戀ふ處の對象が異性の全人格に非ずして、單に其の身體の一部分のみに限られ、或は其の所有物のみに留まり、之を見、之に觸れ、之を嗅ぐこと等によつて大に快感を覺え、性慾を滿足するのである。

上記の如き性慾倒錯に陷れる者は、大抵神經病性及び精神病性遺傳素質を有せるものであるが、其の性慾滿足の方法に從つて、此の變態性慾をば積極的及び消極的の二種に區別する。積極的崇物症とは、其の異常に戀着する物的對象、例へば毛髪、短靴、襯衣を獲んがために、途上

に邂逅した婦人に暴行を加へて、其の毛髮を截り取り(截髮漢 Zopfschneider) 或は暗夜密かに他の家宅に忍び入つて、婦人の短靴、襯衣等を窃取するが如きものを云ひ、此の如き性慾倒錯者は再三刑罰に處せらるゝも、其の變態性慾的衝動を抑壓する能はずして、常習犯罪者となることが多い。消極的崇物症とは異性に接しても、其の戀着する物的對象を心の中に想像し、或は其の現物を目視し、或は之に觸接するに非ざれば、性慾が發動せず、從つて交接すること能はざるものを云ふのである。

クラフト・エビングは上記の如くに身體の一部分或は衣服に戀着する者の他、猶ほ一定の物質、例へば絹、天鵞絨、毛皮に觸れ、或は小動物(猫、犬等)を撫することによつて、性的興奮乃至滿足を告ぐる處の崇物症を區別した。(物質性崇物症 Stoffetischismus 及び動物性崇物症 Tierfetischismus) またイワン・ブロッホは異民族の珍らしい容貌、態度、言語、風俗等に異常の戀慕心を有するがため、歐洲の婦人にして黒奴に戀し、また黒奴にして白人種の婦人を愛するが如き性慾の變態、所謂種族性崇物症 Rossenfetischismus なるものを特に記述した。

(此項未完)

次號豫告

▽先天性生殖腺發育不全
▽同性愛に關する學理
▽非自然的性交に因る姙娠
▽「ザヂスムス」と文藝
▽醫學上より觀たる獨身生活の利害(下)
▽變態性慾要說(四)

本誌定價表

壹部(一ヶ月分)	金參拾五錢	稅壹錢
六部(半ヶ年分)	金貳圓拾錢	稅共
拾貳部(一ヶ年分)	金四圓拾錢	稅共

圖注意
□御註文は總て前金御拂込のこと
□なるべく振替にて御送金のこと
□特別號は定價超過分申受のこと

本誌廣告料

表紙二、三、四面	金五拾圓
普通面一頁	金參拾五圓

大正十一年七月廿日印刷納本
大正十一年八月一日發行　第一卷　第四號

編輯發行者　東京市外北品川御殿山七一八　中村蓊
印刷者　東京市芝區南佐久間町二ノ一四　渡邊素一
印刷所　東京市芝區南佐久間町二ノ一四　內外印刷合資會社
發行所　東京市外北品川御殿山七一八　日本精神醫學會
電話高輪一〇四三番
振替東京三一一七七番

大賣捌(東京堂、東海堂、北隆館、參文社、上田屋、至誠堂、盛春堂、共盛社、)

變態心理合本 第壹卷

裝釘美　六〇〇頁
改正定價金壹圓八十錢
送料不要

內容一斑

論說——支那に於ける靈的現象（幸田文學博士）正態と變態（上野文學士）迷信と妄想（一—五）（森田醫學士）觀念は生物也（一—二）（福來文學博士）所謂心靈現象の研究法に對する吾人の希望（石川醫學博士）宿識障碍と犯罪（杉江醫學士）干支と易（遠藤文學博士）印度の魔術（武田早大教授）其他

研究——頭蓋骨の興味（挿畫十二葉入）（菅原文學士）フロイド精神分析法の起源（久保文學士）習慣性犯罪者に就いて（佐藤政治）二重人格の少年（一—二）（中村文學士）自働現象の話（一—二）（小熊文學士）病覺就中主觀的病覺に就て（永井醫學博士）迷信としての犯罪者の脫糞（寺田文學士）心の繪圖（挿畫十九葉入）（菅原文學士）混亂せる夢の性質（小熊文學士）禪の悟りに就て（入谷文學士）アドラーの補償說と神經病（久保文學士）其他

雜錄——編輯者の變態心理（佐多千葉醫學士）植物の心理（松島理學士）輪廻轉生に關する傳說（一—二）（三枝十一）植物の感情（松島理學士）最近の歐米催眠術界（小熊文學士）變態心理學上より見たるオルレアンの少女（佐多千葉醫學士）最近歐米の精神療術界（小熊文學士）少年犯罪者の殖民地（ドストエフスキ）周圍の變化と動物の體色（挿畫二葉入）（谷津博士）人の心を狂はせる植物（松島理學士）兒童の變態心理に就て（高島平三郎）潛在意識（自署入）（シャストリ）支那人の特性に就て（堀田延千代）相貌に由る性格鑑別法（一—二）（小西學士）生贄と人身御供の傳說（三枝十一）敎育心理實驗（村上文學士）錯誤より出でたる悲劇（中村文學士）其他

人間的證券——汽車只乘の巧い少年（宇佐美學士）歸國すると惡心の出る男（宇佐美學士）彼等の一家（一—二）（沖野牧師）二狂人（中村文學士）余の見たる鬼權（宮島資夫）余の僞らざる告白（流々生）小笠原に送られた少年（宇佐美學士）其他

其外每號掲載されたるもの——變態心理日誌、近代の珍書圖本考料、最近の新聞雜誌拔萃等

東京品川
御殿山
日本精神醫學會
振替東京三一一七七番
電話高輪一〇四三番

變態心理合本第二卷

裝釘美　五五〇頁
定價　金壹圓六十錢
送料不要

內容一斑

論　說――宗敎より見たる物心關係（櫻田晋斧）迷信と妄想（毎號連載）（森田醫學士）印度神變術（毎號連載）（武田早大敎授）犯罪と感化救濟事業（小河法學博士）不良少年發生の原因（坂口警部）浮浪少年と犯罪（勝水敎誨師）變態心理學研究に對する所感（倉橋文學士）

研　究――囚人の歌（勝水敎誨師）妖怪研究（伊東工學博士）不良少年の身體並に精神（杉江醫學士）嗜好性恐喝少年犯の一例（山崎法學士）統計上より見たる犯罪少年（黑田小田原分監長）ごろつきの心理（賀川豐彥）强迫觀念（佐多千葉醫學士）馬に關する空想（伊東工學博士）酒亂の心理（三宅醫學博士）幽靈思想の變遷（柳田法學士）群衆の指導者に就いて（寺田文學士）强迫觀念の心因（向井章）法醫學上より見たる病的衝動（安東禾村）少年受刑者の夢（苅屋哲公）電氣娘の現象（小熊文學士）性慾衝動と精神生活（北野博美）

紹　介――妄想と疾病（向井章）狂氣の心理（中村文學士）精神醫としての基督（向井章）精神薄弱と强迫觀念（葛西文學士）

雜　錄――念寫實驗記（中桐早大敎授）蟻の家族制度（矢野理學士）相貌に由る性格鑑別法（小西早大文學士）十種の人格を持てる女（ドクトル・ウイルスン）生靈の傳說（三枝十一）不良少年の感化（留岡家庭學校長）ジョン氏讀心術合評（森田醫學士・大川定次郎・中村文學士）催法と堀才吉君（島地東洋大學敎授）斷食中の精神狀態（村井弦齋）支那人に對する日本小學兒童の感想（堀田延千代）偶像保存の遺風（三枝十一）其他

人間的證券――彼の僞らざる告白（流々生）棄兒に添へたる遺書（市場學而郎）在監不良少年の通信（市場學而郎）彼が流轉の跡（流々生）僕の恐怖（和田生）狂人の手記、電氣病容態書

其　他――變態心理日誌、最近の新聞雜誌から、讀者欄等、趣味津々たる多くの記事に滿てり

東京品川
御殿山

日本精神醫學會

振替東京三一一七七番
電話高輪一〇四三番

品文學士 中村古峽氏著

變態心理の研究

四六版布裝頗美本

紙數四百八十頁

定價金貳圓五拾錢

送料金十二錢

本書は其の内容の種類に依つて、上中下の三篇に分たる。——

□上篇……には催眠現象・潜在精神・二重人格・透視と念寫・幽靈の出現・狐狸の憑依等、諸種の變態心理現象を一般の讀者にも理解され得るやう極めて丁寧親切に説明す。

□中篇……には著者多年の經驗中から、精神治療に關する實例數種を詳細に報告したるものにて、就中二重人格者に對する諸種の施術法幷に夢の新實驗等は全く著者の創意に屬す。

□下篇……には精神病者の心理描寫二篇幷に狂人の興味ある手記繪畫二十餘種を收む。

著者の文章は世既に定評あり、讀者は小説を讀むが如き興味のうちに、此の新科學の新智識に通曉することを得べし。

忽ち七版

□取次所　東京市外品川御殿山　振替東京三一一七七

日本精神醫學會

變態心理學講話集

好評嘖々――再版出來!!

装釘美菊版三三〇頁
口繪寫眞二葉入
定價壹圓四十錢
送料八錢

（本書內容）

變態心理學概論 文學士 中村古峽

變態心理學に對する一般の誤解―常態と變態との區別―變態心理學の研究範圍―變態心理と潜在意識―變態心理現象の區分―一時的變態心理現象―持續的變態心理現象―變態心理學の任務及び貢獻

精神病の概念 醫學士 森田正馬

緒言―心身の關係―精神障礙―症狀的方面より見たる觀察―原因的方面より見たる觀察―經過、豫後方面より見たる觀察―治療的方面より見たる觀察―疾病の型、性質、本態、種類―精神病の研究法―精神病學の應用範圍―附錄臨床講義―變質性精神異常者―早發性痴呆

犯罪と迷信 文學士 寺田精一

序言―迷信の行はれる範圍―迷信家―犯罪者と迷信―犯罪と關係しての迷信―犯罪の原因としての迷信―犯罪行爲遂行の爲の迷信―犯罪の發覺を防ぐ迷信―犯罪者の日常生活と迷信

不良少年の精神分析 文學士 久保良英

はしがき―心的軋轢―幻影に由る心的軋轢―强迫觀念に由る心的軋轢―容易に分析される軋轢と分析の困難なる軋轢―兩親其他に關係した軋轢―竊盜に終れる心的軋轢―放浪に終れる心的軋轢―他の惡癖に終れる心的軋轢―結論

變態心理と近代文藝 文學士 生田長江

戀愛といふ語の意義―近代文藝に對する誤解―變態心理と近代文藝との關係

歐洲大戰の心理的側面觀 文學士 上野陽一

平和論者の步―不可思議に堪へぬ大戰の勃發―ザッキンソン氏の大戰原因論―文明人の發生的觀察―文明[illegible]の解放―結論

愛の習俗 文學士 菅原教造

戀愛の習化―聖者の性的惡魔―禁慾の齎らす變態現象―破戒僧尼の群―操の帶―自由戀愛の歌―愛の殺死と愛の法律―愛の共産主義―自由戀愛と禁慾主義―解放―表現―裸體畫の出現―自由戀愛の主張―徵毒の恐怖―色情藝術の發生―宗教畫の色情化―色情藝術の推移―ルーベンス、フラマンの色情藝術―レンブラント、和蘭の色情藝術―工藝品としての色情藝術

東京品川御殿山
日本精神醫學會
振替東京三一一七番
電話高輪一〇四三番

變態性慾第壹卷第四號　大正十一年四月廿六日第三種郵便物認可　大正十一年八月一日發行（毎月一回一日發行）
定價金參拾五錢